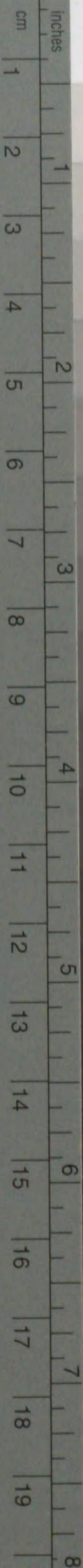


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

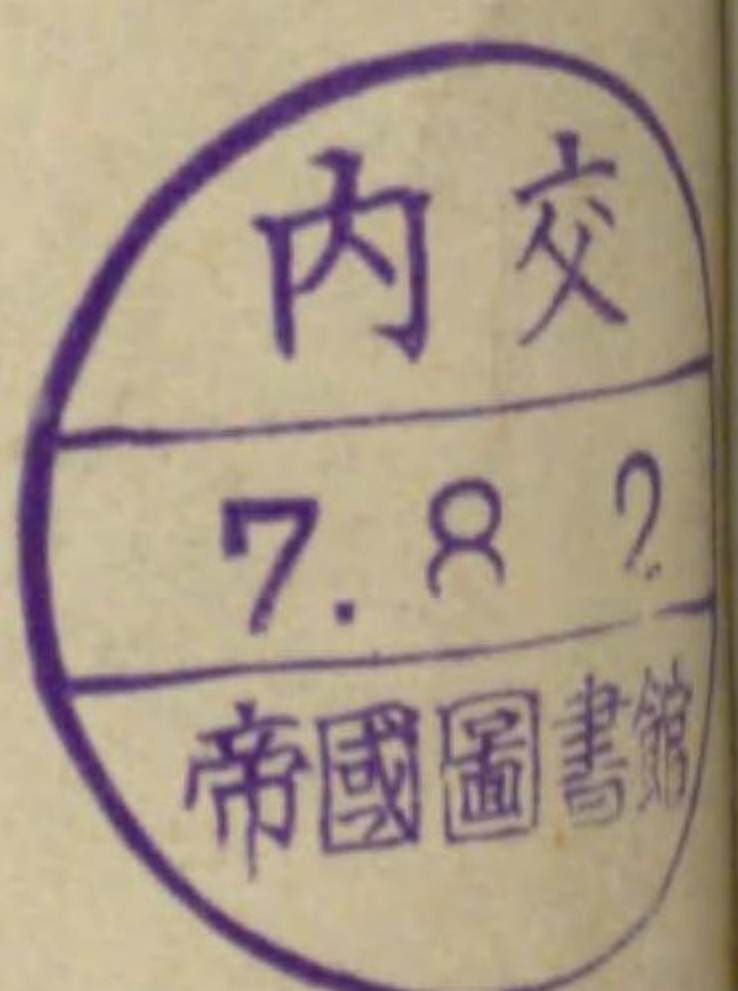


Kodak Color Control Patches



80

昭和七年七月一日發行



製鐵所參考資料

(第五拾參號)

製鐵所總務部

例言

- 一、本冊子ハ文書課ニ於テ抄譯シタル外字新聞若クハ雜誌中掲載ノ事項及ヒ其他ノ調査資料ニ付キ參考トナルヘキモノヲ撰ミ關係所員ニ頒タンカタメ謄寫ニ代ヘ印刷スルモノトス
- 二、本冊子ハ當務ノ參考ニ供スルヲ以テ目的トシ文字ノ彫琢編纂ノ體裁ニ於テ缺クル所少ナカラサルヘシ讀者之ヲ諒セヨ

製鐵所總務部

製鐵所參考資料第五拾參號目次

獨逸鐵鋼業の經濟事情	一
外人の觀たる本邦鐵鋼業 (其の五)	一九
同 上 (其の六)	三二
英國の新輸入關稅	七二
五ヶ年計畫に依る露西亞の鐵鋼及び石炭生産高に就テ	七八
合衆國鐵鋼業の賃金引下及び此れに伴ふ生産高並價格の變動關係に就テ	八四
白耳義の鐵鋼業	八八
本邦石炭埋藏量の調査	九三
雜報及統計	一〇六
印度のタタ鐵鋼會社最近事情	一〇六
露西亞に又新製鐵所計畫さる	一〇七
インド製鐵業の現在及び將來	一〇八
一九三二年露西亞の鐵鋼生産計畫	一一三
露西亞の獨逸鋼材三十萬噸購入契約締結	一二五
獨逸と瑞典との鐵鋼石賣買契約價格と契約噸數の減額	一二六
プレトリアに大製鐵所の建設	一二八
鐵鋼工業界は事業擴張の模様	一二八
メキシコの鐵工業	一二九
英國鐵鋼業統制會社組織	一三三
一九三一年に於ける佛蘭西の滿	一三三
一九三一年の鐵鋼輸出入	一三三
一九三一年に於ける佛蘭西の滿	一三三
一九三一年中ルクセンブルクの鐵鋼石産額	一三三
一九三一年中に於ける日本の	一三三
鐵鋼石輸入高	一三三

印度鉄輸入……三三 一九三一年中佛蘭西の壓延鋼材生産高……三三 一九三一年中佛蘭西の鐵鑛石炭生産額……三五 一九三一年中日本の鋼材供給高……三五 一九三一年一月の佛蘭西鋼材生産高……三七 獨逸に於ける地方別、種類別鐵鑛石生産高……三六 米國一九三一年假炭生産量……三三 一九三一年合衆國主要製鋼會社の損益……三三 一九三一年合衆國の軌條生産高……三六 一九三一年中佛蘭西の鐵鋼生産高……三七 一九三二年一月露西亞の石炭鐵鋼生産高……三六 一九三二年一月及び二月中の佛蘭西鐵鑛石産額……三三 最近三ヶ年英國鋼材生産高……三三

附 表

- 一、製鐵所並民間製鐵會社鐵鋼材生産高月別表
- 二、各國鉄鋼月別生産統計
- 三ノ一、昭和五年中鐵鋼材用途別品目別販賣數量調表
- 三ノ二、昭和五年中鐵鋼材用途別品目別販賣數量割合表
- 四、世界國別鐵鑛石生産高表
- 五、世界主要國の鐵鑛石供給高表
- 六、世界の石炭産額表

獨逸鐵鋼業の經濟事情

Iron and Coal Trades Review, Jan. 15, 1932 Jan. 29, 1932

内 容 目 次

- 一、生産 狀 態
鉄鐵生産高の低減、高爐數及能力の變化、鋼塊生産高の低減と能力、壓延鋼材生産高、國內鋼消費高の減少
- 二、外 國 貿 易
輸出輸入共減少、鋼塊組合、露西亞の注文
- 三、仕上工業に對する輸出割戻
割戻制度の修正と最近數年間に於ける棒、フープ、ピレットに對する輸出割戻高の増減比較表
- 四、價 格
各種製品の價格引下歩合。鋼材の諸運賃に關する獨逸の奇習
- 五、勞 力
賃銀協約の一ヶ年延長と勞資双方の讓歩。賃銀率引下。作業時間の短縮と職工數の減少
- 六、原 料 の 供 給
鑛石の輸入。瑞典鑛石供給者との契約。鑛石のストック一千萬噸。國內鑛石の生産高と諸鐵山に對する補助金。屑相場
- 七、主要會社アエライニテシユグタールウエルケ
鐵鋼材生産狀態と關係諸シンヂケートの賣上高に保有する本會社の持分。最大株主の最近に於ける活躍（一小持株會社に株を集中）
- 八、獨逸諸鐵鋼會社の收益狀態一覽表

九、上部 シレジアの鐵鋼業

鐵鋼材品別生産比較表、諸會社の併合と中央集權

- 一〇、機械工業事情
- 一一、鐵鋼材
- 國內取引の減少と對外貿易の不振。作業率は能力の五割以下
- 一二、貨車工業
- 一三、機關車工業

在伯林英國大使館附商務官 J. W. F. Thelwall 及び R. P. F. Edwards 兩氏の獨逸經濟事情に關する報告中 (一九三一年九月迄の事情) 鐵鋼業に關する分次の如し。

一九二九年中の獨逸鐵鋼生産高は一三、四〇〇、〇〇〇噸に達し戦後の記録を示したが一九三〇年の生産高は九、六九〇、〇〇〇噸に減じ一九二六年を除けば戦後に於ける最低數字を現出した。其の後生産高は漸減を辿り一九三一年上半期の生産高は、前年同期の五、五九〇、〇〇〇噸に對し僅に三、三四〇、〇〇〇噸を計上したに過ぎない。一九三〇年に於ける世界の鉄鋼生産高は前年に比し二割を減じたが獨逸の生産高は二割七分七厘を減じたのであつた。

六月末現在獨逸の高爐數は前年の一六五基に對し一六〇基を算し内操業せるもの僅に六一基、吹下ろしたるもの四一基、修繕中のもの三四基及操業準備中のもの二四基を數へた。一九三〇年に於ける操業高爐の生産能力は五〇、六二五噸であつた。操業高爐數一基當りの生産高並に能力合計の増加したのは新式高爐の大

型に基因するものである。

一九三〇年に於ける鋼塊生産高は一九二四年以來の最低數字であつて一九二九年に比し二割九分を減じたが同期間に於ける世界生産高の減少歩合は二割一分四厘であつた。月生産高は一九三〇年一月の一、二七五、四六二噸から同年九月には七三八、八三三噸に減じたるも同月以後生産増加した爲め一九三一年上半期中の月平均生産高は七六九、五三一噸を算した。獨逸製鋼所の能力は合計概算年一七、八〇〇、〇〇〇噸に達す。

一九三〇年中に於ける壓延工場の生産高は一九二九年の一、二、四五九、四〇二噸に對し九、〇七〇、六三〇噸を算し尙一九三一年上半期の生産高は一九三〇年同期の五、一一〇、七三四噸に對し三、六四五、六六五噸に減じた。

一九三〇年に於ける獨逸の國內鋼消費高は一九二九年に比し三分の一以上を減じた(一九三〇年八、三五四、〇〇〇噸、一九二九年一、二、七七七、〇〇〇噸)此の下向傾向は造船業、機械工業、建築業其の他鐵鋼業の大得意先たる諸工業の不振状態に基因するものであつたが一九三一年中に於ても亦依然として此の傾向を持續した。

外 國 貿 易

一九三〇年及一九三一年第一四半期間中シンデケートに於ては、世界市場價格の沈滞せるものあるにも拘

らず輸出を増加して以て國內販賣高の減少を償ふことに努力した。例に依つて聯邦鐵道は此の目的に對し特
 惠運賃を規定する所あつたが然しながらこれにも拘らず鐵鋼の輸出は一九二九年の五、八一三、〇〇〇噸か
 ら一九三〇年には四、七九四、〇〇〇噸に減じ尙一九三一年上半期中の輸出は二、一四八、〇〇〇噸を計上
 したに過ぎなかつた。輸入も亦、一九二九年の一、八一八、〇〇〇噸から一九三〇年には一、三〇二、〇〇
 〇噸に減じ、一九三一年上半期は五四七、〇〇〇噸に過ぎなかつた。一九三〇年中輸入數量に増加を示した
 のは薄板だけで前年の三四、〇〇〇噸から三六、〇〇〇噸に増加し、又輸出に於て増加したのはガーダーだ
 けで一九二九年の二〇四、〇〇〇噸に對し二〇七、〇〇〇噸に達した。

獨逸鋼塊組合の販賣高の内、輸出獎勵金制度の適用を受くる仕上工業の手を経て直接間接輸出されたる數
 量は一九三〇年に於て四割九分、一九三一年第一四半期に於て五割六分に達した、尙一九二九年には四割三
 分、一九二八年には四割一分、及び一九二七年には三割二分であつた。世界市場の價格が獨逸の國內價格よ
 りも著しく低廉なるが爲め前記輸出割合の増加は最近年間に於ける財政結果の不利を物語るものである。

一九三一年三月末、鋼塊組合は、當時の法外に低廉な價格では注文引受の責任を負ひ難きを感じ、一時輸
 出市場から手を引いた。五月と六月には三十萬噸に達する露西亞からの注文があつた爲め事態はいくらも持
 ち直つたが然し一九三二年七月下旬の獨逸の財政危機に依り再び輸出貿易は攪亂せらるゝに至つた。

仕上業者に對する輸出割戻

一九三〇年十一月A V I 輸出割戻制度に關し次の如く修正された、即ち仕上業者が其の要する粗鋼の全部
 を獨逸シンヂケートから取る場合に限り百パーセントの割戻が彼等に與へられ若し其の鋼需要高の幾分をシ
 ンヂケート外より或は又外國より購入する場合は其の割合に應じて割戻が減ぜらるゝことになつた。

第一表に見る通り一九三〇年及び一九三一年に於ける割戻高は前數年間の平均に比較し最高率を示して居
 る、此の現象は鋼の世界市場價格と獨逸國內價格との開きの増大せるに基因するものであつた。

第一表 A V I 輸出割戻制度 (屯當り馬克)

年次	棒鐵	フープ	ピレット
一九二五年	一七・四〇	一四・五〇	一〇・一〇
一九二六年	二二・六五	二六・八七	一四・九五
一九二七年	三一・一五	三三・二九	二二・四〇
一九二八年	二五・三五	三四・一六	一九・〇〇
一九二九年	二二・四五	三六・六七	一四・八五
一九三〇年	三八・六六	四五・三三	二七・〇〇
一九三一年一月	四九・〇〇	六五・〇〇	三九・〇〇
一九三一年四月	四七・〇〇	五五・五〇	三五・〇〇
一九三一年六月	四七・〇〇	五六・五〇	三八・〇〇

輸出割戻に關する特別協約が鋼塊組合と銲接管製造業者との間に締結せられ銲接管製造業者はチユーブシ

ンデケート會員の製品と競争せざる製品のみを對し又其の生産高を増加せざる條件の下に於て割戻を附與せられた。協約は一九三一年六月一日から實施せられ一九三三年六月卅日を以て通知に依り解除せらるゝこととなつて居るが若し通知無き場合は一九三五年一月卅一日迄契約は效力を有することとなつて居る。(本件はチューブシンデケート會員の爲め外界の競争に對抗する目的を以て輸出割戻制度が用ひられたものである)

價 格

鐵鋼價格は一九三〇年六月一日から引下げられて居つたが更に一九三一年一月一日より平均七パーセント引下げられた、半製品の價格は四・五〇馬克乃至五・〇〇馬克引下げられた。此の基本價格の引下に加ふるにエキストラに於ても割引せらるゝ所あつた、棒鐵に對する此の割引は二・五〇馬克乃至三・〇〇馬克に達した故に之を加へ棒鐵の價格は合計一・一五〇乃至一・二馬克引下げられた。線材のエキストラも寸法に依り〇・五〇乃至二・五〇馬克引下げられ、又フープのエキストラも割引されたる結果本品に對する價格の引下げは合計平均一八馬克に達した。薄板組合に於ては市場向板の基本價格を引下げたる外焼鈍鋼板の價格をも一〇馬克引下げた。ワイヤー組合に於ても應當り一〇馬克を引下げ又チューブ組合に於ては一般鐵價の値下に應じてチューブの價格を引下げた。銑鐵の價格はヘマタイト銑應當り二・五〇乃至四馬克、鑄物銑應當り三乃至五馬克、其の他の銑は全部應當り五馬克引下げられた。鑄物の價格は一九二九年六月一日に定められ

た價格より六パーセントを一般的に引下ぐることに決定された。茲に注目すべきことは壓延鋼材(半製品譯者)に課する諸運賃に關する獨逸の奇習である、戰前壓延鋼材は形物を除き仕上工業の工場に於て引渡されたものであつたが現在に於ては總べての値段はノイキルヘン(ザール地方)或はオーバーハウゼンを基礎として居る、たゞへ委託貨物が仕向地に近接せる工場から供給される場合でもそうである、例へばマグデブルグ(Magdeburg)で鐵板を製造する會社はエッセンからマグデブルグ迄の屯當り二三・五〇馬克の運賃を仕拂はねばならぬ、然るに材料はリーザ(Liege)から供給され、リーザからマグデブルグ迄の運賃は僅かに一三馬克に過ぎない。右の如き運賃の計算方法は製造業者の地位が中部北部及び東獨逸に於けるよりも一層有利である東部獨逸(西部の誤りか譯者)に鐵鋼の仕上工業が集中の傾向を増しつゝあることに對し一部の責任を負ふべきもの言はれて居る。

中部獨逸に於ける仕上工業の地位は鐵鋼生産業者が此の方面の仕事に手を延ばしつゝあるが爲め困難の事態に陥つて居るに傳へらる(一九二五年鐵鋼仕上工業組合鐵鋼生産業者との間には此の侵蝕行動を防ぐ契約締結せられたにも拘らず)鐵鋼生産業者の附屬工場に於ては特別の運賃を仕拂ふことなく又獨立會社が購入する相場よりも低廉な價格で壓延鋼材の供給を受けて居る。

勞 力

ラインウエストフアリア鐵鋼業に於ける勞資間の協定に依つて家族手當、休日其の他諸項目に關する賃銀

協約は一九三二年五月卅一日迄一ヶ年間延長された。此の傭主の讓歩に對し勞働者側に於ては一九三〇年六月の裁定に依つて定められた賃銀を、一九三一年八月一日より（一九三一年十月一日の代りに）改變することに同意せざるを得なかつた、一九三一年七月廿四日に行はれた裁定に依り熟練工の一時間當り賃銀は七八ペニヒから七五ペニヒに引下げられ加ふるに時間拂作業に仕拂はるゝ附加賃銀は廢止された、然しながら此の賃銀引下は一人一時間當り五ペニヒを越へざるものであつた、新賃銀は一九三一年十一月卅日迄效力を有すべきものとせられた。

作業時間に關する最後の協定に於ては一週の作業時間を五二乃至六〇時と規定せるが實際の作業時間は短縮作業の爲め多くの場合之れ以下であつた。斯業の不振は幾度か作業中止を餘儀なくせしめたるが爲め、例へば聯合製鋼會社（Vereinigte Stahlwerke A. G.）の傭役職工數は一九三〇年六月卅日現在の一五二、九三六人から一九三二年六月卅日現在の二〇二、九二四人に減少した。

一九三〇年上半期中のラインウエストファリア鐵鋼業地に於ける勞銀の精確なる減額數字に關しては述べ難いが、然し一九三一年の初頭に於て更に六パーセント引下げられ同年四月には合計一〇乃至一五パーセント引下げられた、第二次の賃銀引下げは職工側の承諾せざる裁定に依つて行はれたるもので之れが爲め賃銀協定なるものは一九三一年七月迄存在せなかつた譯である、一九三一年七月一日から勞資双方歩み寄つて各種團體の職工賃銀を六%乃至八%を引下げ尙短縮作業を採用する場合は更に四%乃至七%を引下ぐるこゝの

協定が成立した。月收百馬克の男工賃銀と月收九〇馬克の女工賃銀は、徒弟の報酬と同様減額を免除された。本協定は一九三二年二月廿九日迄效力を有すべきものとされた。

原料の供給

第一表は一九三〇年中及一九三一年上半期中に於ける獨逸の鐵石輸入高を示す。（單位噸）

第一表	獨逸の鐵石輸入	（單位噸）
	一九三〇年	一九三一年上半期
鐵 鑛 石	一三、八八九、九〇〇	四、四二二、三〇〇
滿 掩 鑛 石	三三五、八〇〇	五二、七〇〇
黃鐵鑛其他	九五九、六〇〇	三七八、五〇〇

一九二九年以來の鐵鑛石輸入高の減少は若し一九二九年獨逸の鐵鋼業が取り結んだ大量の瑞典鐵石購入長期契約がなかつたならば一層減少程度の大なるものがあつたであらう、而して瑞典の供給者も協商せる結果其の引渡高の一部は延期せらるゝ所あつたが然しながら鐵石のストックは累積し（一九三一年二月現在西部獨逸の鐵石ストック約一千萬噸）而も之れに對しては市價に依らず契約面に定められた價格を仕拂ひたるもので、獨逸鐵鋼業に對し莫大なる損失を與へた根元は實に此のストックであつた。鐵鑛石輸入數量の減少は主として西班牙からの輸入減に依るもので、滿掩鑛石の輸入減は英領印度と濠洲からの船積量の減じた爲めである。

獨逸の主要鐵礦資源地たるプロシアの一九三〇年に於ける鐵礦石産額は一九二九年の四、三〇九、三四二噸に對し三、七八六、二五二噸を算した。ジールランド地方の諸鐵山に對する補助金は依然として仕拂はれたが此の仕拂は、少くも月十萬噸の生産並販賣を、少くも五百人の礦夫の傭役を條件とするものである。一九三〇年聯邦政府及プロシア政府は此の費目に各々五七〇、〇〇〇馬克を支出したが一九三一―三二年度に於ける此の費目の振當高は各々四〇〇、〇〇〇馬克に減ぜられた、然し此の外ヘッセン州政府が三〇、〇〇〇馬克を又ヘッセン州ミプロシア州政府と共同して同じく三〇、〇〇〇馬克を支出することになつて居り即ち一九三一―三二年度に於て此の費目に仕拂はれ得る金額は合計八十六萬馬克である。特惠運賃率の適用も又低廉なる電力も例に依つて供給せらるゝであらう。此の地方に於ける傭役並販賣状態は鐵鋼業の不振に依つて一九二九年以來不満足なる事態を展開して居る。一九三一年三月一日より赤鐵礦の價格は屯當り六〇ペニヒ値下げせられたが其の他の礦石も同程度の値下りを見せた。鐵鋼業の不振に依り屑の價格は一九三〇年及び一九三一年中に於て著しく低下した、ジュツセルドルフに於ける屑相場場は一九三〇年初頭の屯當り五六馬克乃至五七馬克から、一九三一年七月末には三一馬克乃至三二馬克に低落した。

主要會社

Vereinigte Stahlwerke A.G., Dusseldorf.

第二表の數字は右會社の年報及び四半期報告から取れるものであつて同期間に於ける獨逸重工業の状態を

代表するものである。

第二表		フェライニグテ・シュタールウエルケの石炭、鐵鋼材生産高 (單位噸)	
石炭	鐵鋼塊	銑鐵	壓延鋼材
自一九二九年九月	三五,七三,五〇〇	九,三三六,一七三	五,二六六,九七〇
自一九三〇年九月	三五,七三,五〇〇	九,三三六,一七三	五,二六六,九七〇
自一九三〇年十月	五,一三〇,七〇〇	一,七三三,三三五	九七七,七六八
至全 年十二月	一五,三〇,七〇〇	一,四三三,七〇〇	一,〇〇五,五五三
自一九三一年一月	四,六九七,五〇〇	一,四三三,七〇〇	八七七,六四五
自一九三一年三月	四,六九七,五〇〇	一,四三三,七〇〇	八七七,六四五
自一九三一年四月	四,六九七,五〇〇	一,四三三,七〇〇	八七七,六四五
自一九三一年六月	四,六九七,五〇〇	一,四三三,七〇〇	八七七,六四五

數字未詳

在 Freiter の Dolomitwerke G.m.b.H はフェライニグテ・シュタールウエルケと關係ある會社の一に加へねばならない。又次に掲ぐる數字は各種シンヂケートの年賣上高(噸)であつて括弧内の數字はフェライニグテ・シュタールウエルケの該シンヂケートに於て保有する石炭並鋼材の持分(年)である。

シンヂケート名	賣上高(噸)	一九二九―三〇年度
Rhenish Westphalian Coal Syndicate	一六九,五〇八,四一五	(三六,六〇八,六九〇)
Pig-iron Union : Participation Sales	一,九四四,七三三	(七八四,七五三)
" Own Consumption	六四六,二〇〇	(三五九,一八八)
A Products Syndicate	四,七五三,四七五	(一,七七七,六八八)
(a) 半製品	一,一四〇,五九五	(四四二,九二九)

リツク氏の最近の活躍を述べて見よう。
 フリツク氏は西部獨逸の重工業フェライニグテ・シュタールウエルケ及びゲルセンキルヘルネルベルクウエルケ會社に保有せる持株ミバウアリアの一會社アイゼンウエルケゲゼルシヤフト・マキシミアンスヒュ

(b) 軌道材料	(c) 形物	國內賣上	對外賣上	國內賣上	對外賣上
Bar Syndicate	Universal Iron Syndicate	四、一七七、八八二	二九三、八九八	一、二八六、五六七	一三〇、五三五
Hoop Syndicate		七九、八〇一	八六五、一五九	五二、一三六	三三八、八〇六
Plate Syndicate		二九二、六八四	一〇二、五七二	一〇二、五七二	一〇二、五七二
Medium Sheet Syndicate		一、七〇九、五七八	六七二、〇一四	六七二、〇一四	六七二、〇一四
Thin Sheet Syndicate		二三五、八四五	一〇三、七六二	一〇三、七六二	一〇三、七六二
Wire Rod Syndicate		一、二一五、五二六	一、六〇八、〇七四	一、三三九、三三九	一、三三九、三三九
Wire Syndicate		八九一、四五一	一九八、三三三	一九八、三三三	一九八、三三三

一九二九—三〇年度の収益ミ一九二八—二九年度の収益ミには大差なきも然し配當は約二%を減じた。
 (六%から四%へ) 此れに關し、フェライニグテ・シュタールウエルケの最大株主たるフリードリツヒ・フ

ツテ會社の株二二、五〇〇、〇〇〇馬克の大部分を在ジユツセルドルフの一小持株會社たるシャロットテンヒユツテに集中した。一九三一年春、氏はシャロットテンヒユツテミ協同してマキシミアンスヒユツテ會社の手を経て在伯林のミツテルドイツチエル・シュタールウエルケ會社(資本金五五、〇〇〇、〇〇〇馬克)株の大部分をフェライニグテ・シュタールウエルケから買収し斯くして氏は中部獨逸に其の勢力を著しく擴大するに至つた。

此の外西部獨逸に於ける顯著な事件は Eisen und Stahlwerke Hoesch A.G. 及び Köln-Neu-Essener Bergwerks Verein への合同であつた。會社の資本は一九三一年三月卅一日現在に於て一四二、一〇〇、〇〇〇馬克に達した。

次表は一九二九—三〇年度に於ける獨逸主要鐵鋼會社の財的結果を示すものである、括弧内の數字は比較の爲め一九二八—二九年度の結果を示せるもの (單位百馬萬克)

會社名	總利益	純利益	普通株に對する配當歩合
Eisen-und Stahlwerk Hoesch A.G., Dortmund.	(五・五二)	(四・五二)	(七)
Köln-Neuessener Bergwerks-verein Essen-Altensessen	(四・八六)	(五・七二)	(七½)
Gutehoffnungshütte, Aktienverein für Bergbau & Huttenbetrieb, Nürnberg	(一〇・〇八)	(五・八三)	(七)

Klöckner-Werke A.G., Castrop-Rauxel	(三五・六七)	(三七・四九)	(八・八五)	(七六)
Friedr. Krupp A.G., Essen	(三八・九〇)	(四九・一二)	(二・五三)	(〇〇)
Mitteldutsche Stahlwerke A.G., Berlin	(一一・七五)	(一三・〇七)	(四・三六)	(八六)
Oberschlesische Eisenbahn-Bedarfs A.G., Gleiwitz	(一・一三)	(一・〇七)	(〇・三六)	(六〇)
Vereinigte Oberschlesische Hutten- werke A.G., Gleiwitz	(一二・四八)	(一四・七六)	(〇・八五)	(〇〇)
Phoenix A.G., für Bergbau u. Huttenbetrieb, Düsseldorf	(一〇・三一)	(一五・三三)	(一五・三三)	(六四) 六
Iseder Hütte, Gross Isecke	(五・八四)	(七・二一)	(〇・〇一)	(六〇)
Mannesmannröhrenwerks Düsseldorf	(四一・八二)	(四四・〇九)	(一四・〇七)	(七六)
Gelsenkirchener Bergwerks A.G., Essen	(二七・六八)	(二八・二二)	(二一・九七)	(八六)
Rheinische Stahlwerke, Essen	(一六・二七)	(二〇・八六)	(一〇・〇七)	(七) 六

備考 ※印 一九三〇年一月一日現在備役人員二、〇三八（一六、五四四）
 #印 鉄鐵工場の年産額前年に比し二四%、壓延工場の年産額前年に比し二九%を各々減せり
 △印 年賣上高は前年の八五%
 ◇印 職工の平均數一五、七三一（一八、一四六）

上部シレジアの鐵鋼業

次表は一九三一年自一月至五月及び一九三〇年に於ける獨逸上部シレジア鐵鋼業の生産高を一九二九年及び一九一三年の生産高と比較せるものである。（單位噸）

品目別	一九三一年 自一月至五月	一九三〇年	一九二九年	一九一三年
鉄 鐵	二五、一六三	八六、五二四	一八〇、一九四	三八一、三一八
鋼 塊	一六一、八一三	三四三、五八四	五一九、六七五	三四五、九五七
鋼 鑄 物	二、五七四	八、六九四	一三、九五七	未
再製鑄物	五、七三五	二四、〇五四	三八、〇四七	詳
販賣用半製品	九、三六五	二五、〇〇一	三四、三八一	八、三一九
壓延工場の製品	一一三、〇一四	一六三、九七四	二六八、六〇〇	一一七、六九一
各種精製品	未	詳	一八、二九七	未
亜鉛板	三、二二六	七、二九一	六、七八〇	三、九三五

西部獨逸に於けると同じ理由で一九三一年及び一九三〇年中の生産高は亞鉛板を除き各品共一九二九年に比し減少した。一九三〇年中五割以上を減じた鉄鐵の生産高は獨逸全産額の〇・八九%に過ぎなかつた。

備役人員は一九二九年の一三、四七九人から一九三〇年には一〇、五五二人に減じ、更に一九三一年五月末には九、〇七三人に減少した。然しながら斯くの如き不況にも拘らず改築、電化、或は又最新式機械の採用等に依りて或る程度の改善並擴張が行はれた、一九三一年最初七ヶ月間中の事態は相變らず不活潑であつ

たが然し、ワイヤー、農具及び狹軌鐵道方面にはいくらか季節的の景氣を見せた。數多工場の業務は一九三一年七月露西亞からの鐵道車軸の注文に依つて向ふ約十ヶ月間確保さるゝに至つた。

一九三二年二月、上部シレジア重工業大部分の持株會社である在グライウィツの Oberschlesische Eisenbahn-Bedarfs 會社、Mitteldutsche Stahlwerke 會社から一五、〇〇〇、〇〇〇馬克の株を買收して以て Oberschlesische Huttenwerke 會社の資本を占有するに至つた。一九三一年八月 Oberschlesische Huttenwerke 會社、Preussische Bergwerks- und Hutten からのシレジアの二工場を引受けたが更に Borsigwerke 會社の鑄鐵爐、鑄物工場、ワイヤー工場の買收に關し商議を進めつゝあつた、若し此の交渉が纏まる曉には、上部シレジア鐵鋼業の中央集權を現出するに至るであらう。

機械工業

獨逸機械工場組合の報告に依れば一九三〇年中の國內販賣高は一九二九年よりも約三七%の低減を示したが、一方一九三〇年中の注文高は一九二九年に比し二七%を減じた、斯業の備役状態は一九二九年に於ては平均六八%であつたが一九三〇年末には四二%強に低落した。作業時間は一九二九年に於ては平均一週四十八時間二分の一であつたのが一九三〇年十二月には一週四十二時間弱に減じた。一九三〇年中に於て解雇の運命に逢着せるもの、斯業従業員二割五分以上に達した、尙年末に於ては従業員七割五分以上が短縮作業に従事せざるを得なかつた。一九三一年上半期中に於ける一作業日當りの機械生産高は春期に季節的景氣

をいくらか示せるにも拘はらず前年同期の數字に比し三割を減じ尙一九二九年の數字よりも四割を減じた。一週四十二時間の作業を基礎として一九三一年六月の備役状態は従業員四割八分を使役し得るに過ぎなかつたが一年前に於ては平均一週四十五時間七を基礎として六割二分を使役するところであつた。

輸出貿易の結果は、いくらか事態を緩和することが出來た。機械輸出高の増加は輸出價額に同様の増加を示さなかつたが然しながら一九三〇年に於ける獨逸の機械輸出は量に於ても價額に於ても記録を作つたのであつた、其の輸出の減少し始めたのは一九三一年上半期中からであつた。一九二九年に比し其の輸出に變化を見せた主なるものは、織物機が八九、四一三噸から五九、三五二噸に減じたのミ、金屬作業機械が八八、一八四噸から一一一、三二二噸へ増加したところであつた。

鐵鋼材

一九三〇年中及び一九三一年最初七ヶ月中に於ける本工業の事態は實に逆境を極めたものであつた、これは特に國內取引の減少を外國市場に於て埋合はすことが全然出來なかつたからである。本工業に於ては殆んど各方面共作業率は能力の五割以下に下り、時折取引に若干の復活を見せたところもあつたが極めて短命に終つた。

貨車工業

一九二九—三〇年度に於ける本工業主要會社の帳尻は満足なる結果を示し例へば東部獨逸の Linke-Hofm-

ann 會社は5%の配當を又 Vereinigte Westdeutsche Waggon-fabriken 會社は7%の配當を行へるが然し一九三一年に於ける業態は振はなかつた、獨逸鐵道會社は一九三一年の注文高を制限し又向後數年間の注文高を年約六五、〇〇〇、〇〇〇馬克に減額した此の數字は獨逸現存二十六貨車會社の能力に比すれば、別に外國からの注文もその他私鐵からの注文も殆んど算入し得ざるが爲め極めて微々たるものである、事情斯の如きが爲め大抵の工場は一九三一年九月始めには手持注文殆んど皆無となり危機状態に瀕したのであつた。一九二六年本工業鐵道會社との間に締結された協約は一九三一年末に満了するこゝになつて居るが更に向ふ五ヶ年間の延長問題に就ては本報告の日附迄には未だ決定を見なかつた。協約には價格算定の基礎として、貨車工業の製造する各種製品の平均生産費を公表することを規定して居るが生産費の平均は最近四ヶ年間に於て一%乃至二%を低減せりと報じて居る。

機 關 車 工 業

本工業に於ては其の超能力を低減するの目的に向つて多様の術策を施したにも拘らず現存の工場に於ては此の不景氣期間中満足なる業務を遂行し得るの注文を望み得なかつた、故に斯業を一層集中するの方針を以て大會社が小會社を併合買収する等の諸手段が此の八ヶ月間中に採用されたのであつた。(譯者三宅)

外人の觀たる日本の鐵鋼業 (其の五)

The Far Eastern Review, Feb. 1932 Harold Huggins 氏述

目 次

- 一、官營八幡製鐵所並民間會社の棒鋼生産高
- 一、山形鋼 (主要製造業者と生産高、輸入高)
- 一、溝形鋼とIビーム (生産高、輸入高、製造業者)
- 一、鋼 管 (生産高、製造業者、輸入高)
- 一、スケルブ
- 一、軌條及附屬品 (主要製造業者、生産高、輸入高)
- 一、線 材 (生産高、製造業者、輸入高、工業別線材使用高)

一九三〇年に於ける官營八幡製鐵所の棒鋼生産高次の如し

丸 鋼	八三、三八四
角 鋼	二三、九八八
平 鋼	四五、三〇八
其 他	一一、三一一
合 計	一五二、九三三
民間の棒鋼生産高	

八幡製鐵所に於ける棒鋼の生産高は相當に大であるが民間の生産高は之れより遙かに大であつて同年の生産高合計二七七、九二四噸に達し其の内譯次の如し

丸鋼	二五九、九五一
角鋼	五、一四三
平鋼	一一、八三〇
合計	二七七、九二四

尚過去三ヶ年に於ける民間工場各種棒鋼の生産高次の如し

一九三〇年	二七八、〇一九
一九二九年	三八七、六七九
一九二八年	三四五、七五五

山形鋼

一九三〇年に於ける山形鋼の國內生産高は全需要高を満たすに殆んど十分であつた、其の輸入高は全生産高一八二、四八四噸の八分一厘、換言すれば一九三〇年に於ける全需要高の七%即ち一四、九一八噸に過ぎなかつた、此の品目に於ても亦日本の製造業者は其の生産能率を非常に増大したるが爲め輸入は殆んど喰ひ止められて居る。

此の百分比は棒鋼の場合殆んど同一である、輸入高は棒鋼生産高の八%、全供給高の七%であつた。

一九三〇年に於ける山形鋼の生産高は合計一八二、四八四噸、内八幡製鐵所の分八九、二六三噸、民間の分九三、二二二噸を算した。山形鋼の主要製造業者次の如し

- 八幡製鐵所、日本鋼管株式會社、東海鋼業株式會社、住友伸銅鋼管株式會社、東京鋼材株式會社、株式會社神戸製鋼所、釜石鐵山株式會社

右の内最も重要なものは八幡製鐵所であつて大型物は全部同所にて製造せらる、然し日本鋼管に於ては最近三吋對四吋、三吋對五吋及び三吋二分の一對五吋の寸法物製造に着手した、此の寸法物に關する協約は無いが然し小型及び中型物に關し、販賣生産及び價格を統制する組合が一九三一年三月に設立された。

八幡製鐵所の山形鋼生産高

八幡製鐵所に於ける各種寸法の等邊山形鋼の生産高は一九二九年五三、四七九噸、一九三〇年六〇、六九五噸、尙不等邊の分は四一、六九八噸、二七、九〇二噸で合計一九二九年九五、一七七噸、一九三〇年八八、五九七噸を算した、一九二八年及び二九年に於ける民間製造業者の山形鋼生産高は次の通りである。(一九三〇年六月鋼材年報發表數字に依る)

一、日本鋼管	五〇耗以下	一〇〇耗以上
一九二九年	一	二八一
一九二八年	一	七、七一九
	五〇耗以下	
	六七、四三一	
	五四、八六二	

一九二七年	五二五噸	三〇、六〇〇	八、一七七
二、東海鋼業			
一九二九年	一	二五、四三八	一
一九二八年	一	二九、四六四	一
一九二七年	一	二一、〇六四	一
三、住友伸銅鋼管			
一九二九年	一	五五七	一
一九二八年	九	一八三	一
四、神戸製鋼所			

神戸製鋼所に於ては一九二九年より山形鋼の生産に着手し同年に於ける生産高は二三二噸（五〇耗以下のもの）に過ぎなかつた。

五、釜石鐵山

一九二七年と一九二八年には山形鋼の生産なく一九二九年に於て五〇耗以下のものを一四一噸生産したに過ぎない。

山形鋼の輸入

一九三〇年に於ける各寸法の山形鋼の輸入數量は一四、九一八噸であつた。

溝形鋼ミイビーム（構造用形鋼）

日本鋼管は溝形及びイビームを生産する唯一の民間工場であるも其の生産高は公表されてゐない、一九三〇年に於ける右二鋼材の生産高は八幡製鐵所のみのものであつた次の如し

溝形	三八、九一三噸
イビーム	二七、九九八噸

一九三〇年に於けるイビームの全供給高は三三、五三七噸溝形は四八、九三四噸を算し全供給高は八幡製鐵所の生産高との差は輸入されたものである。

溝形鋼の輸入——本鋼材の輸入に就ては輸入先別の數字は不明なるも其の合計輸入數量次の如し

一九三〇年	一〇、〇二一噸
一九二九年	一〇、七五一噸
一九二八年	九、四四七噸

「イビーム」——本鋼材の生産は八幡製鐵所に限られ、一九三〇年の生産高は二七、九九八噸、一九二九年は二五、二二五噸、一九二八年は二七、三三二噸に達した、需要は安定せるもの様である、然し一九二九年と一九三〇年の輸入高には著しき差を生じ即ち一九二九年の輸入高は二六、〇五六噸を算したるも一九三〇年には五、五三九噸に減じた、全供給高は次の通りであつた。一九三〇年三三、五三七噸、一九二九年五一、二八一噸、一九二八年四一、七〇一噸。

Iビームの輸入——本鋼材の輸入數量は一九三〇年に於ては全供給高の一六・五%に過ぎなかつたが一九二九年には五〇%、一九二八年には三四・四%を占めて居つた最近三ヶ年の輸入數量次の如し

一九三〇年	五、五三九噸
一九二九年	二六、〇五六"
一九二八年	一四、三六九"

鋼管

日本に於ける鋼管の生産は日本鋼管株式會社と住友伸銅鋼管株式會社の二社に限られて居る、最近三ヶ年間の生産高次の如し

一九三〇年	八八、三三八噸
一九二九年	七六、二六九"
一九二八年	六四、四六〇"

一九二四年迄は供給の主要資源であつた輸入は其の後著しく減じ目下は年供給高の約四分の一を占むるに過ぎなくなつた。

鋼管を生産する二會社の内生産高の點から見れば日本鋼管の方を見ても財務鞏固の點より見れば住友伸銅鋼管の方が優つて居る。

スケルブ

一九二九年八幡製鐵所は民間會社へ拂下用のスケルブの製造に着手した其の生産噸數は不詳である、日本鋼管會社は一九三一年二月直徑一吋以下のチューブ用スケルブの製造に着手せるが作業第一月即ち一九三一年の二月の生産高は一千噸であつた、生産能力は月二千噸位であらう、此の外にはスケルブを壓延する會社なく而して其の銑接は日本鋼管と住友伸銅鋼管の二會社の殆んど專業になつて居る然し横濱船渠株式會社は此の目的の設備を有して居る事も報せらる。

日本鋼管株式會社

本會社の鋼管生産公稱能力は六六、〇〇〇噸で一九三〇年上半年の生産高は四一、〇〇四噸であつた、一九二五年以來の生産高次の如し

一九二五年	二七、四三三噸
一九二六年	三三、六九九"
一九二七年	三七、〇二五"
一九二八年	五三、三二一"
一九二九年	六二、三一〇"
一九三〇年上半年	四一、〇〇四"

住友伸銅鋼管株式會社

本會社の鋼管生産公稱能力は二五、〇〇〇噸であつて一九三〇年上半年の生産高は六、七〇一噸であつた

會社には二工場あるも大阪の鋼管工場は一九二七年末閉鎖せられ其の鋼管壓延設備は尼崎工場へ移された、一九二五年以來の生産高次の如し

年次	尼崎工場	大阪鋼管工場	合計
一九二五年	六、〇二〇	二、八〇七	八、八二七
一九二六年	六、七〇八	—	九、八一〇
一九二七年	九、三六二	—	一三、四六六
一九二八年	一一、一三九	—	一一、一三九
一九二九年	一六、一八三	—	一六、一八二

一九二五年以來日本の鋼管生産高の合計次の如し

一九二五年	三六、二四〇
一九二六年	四二、五〇九
一九二七年	五〇、四九一
一九二八年	七四、四六〇
一九二九年	七八、四九二
一九三〇年	八八、三三八

鋼管の輸入—鋼管の輸入其の全供給高の百分比次の如し

年次	全供給高	輸入高	輸入高の全供給高に對する百分比
一九三〇年	一一六、五三八	二八、二〇一	二四・二%

一九二九年	一三九、三一八	六二、〇四九	四五・二
一九二八年	一一九、三一九	五三、八五九	四五・五

鋼管の輸入が今後著しき減少を示すであらうことは、日本の斯業が其の設備ミ能率ミを増加し居ることに依つて極めて明かである。

軌條及附屬品

日本に於ける軌條及び附屬品の生産業者は次の三者のみである。

「八幡製鐵所。日本鋼管株式會社。東海鋼業株式會社」

一九二九年に於ける軌條の生産高合計二五九、三三五噸の内八幡製鐵所の生産高二五四、七四三噸、日本鋼管の分一、二五五噸及び東海鋼業の分は三二三噸に過ぎなかつた、國有鐵道の使用レールを全部國産品に限定せる鐵道省の方針に依つて日本の軌條生産高は一九二六年以來頗る増加した。一九二三年以來の生産高次の如し。

一九二三年	九二、九二七	一九二七年	一六九、〇三二
一九二四年	七七、八八〇	一九二八年	一九九、二五二
一九二五年	一三一、九七七	一九二九年	二五九、四五五
一九二六年	一六六、五九七	一九三〇年	二八六、二二六

輸入は著しく減じ軌條は輕重双方共最早日本からの注文は殆んど望み得ない。

八幡製鐵所——繼目板其の他の軌條附屬品を生産するは八幡製鐵のみであつて民間會社に於ては軌條のみを壓延す。

日本鋼管株式會社——本會社の軌條生産高は漸減の傾向に在り次の如し

一九二三年	九,四三八噸	一九二七年	三,九二四噸
一九二四年	一〇,二七三"	一九二八年	三,五六四"
一九二五年	一一,一二二"	一九二九年	一,二五五"
一九二六年	六,四四六"		

東海鋼業株式會社——本會社の軌條生産高は微々たるものである。
九州製鋼株式會社——本會社は一九二九年に約三,〇三四噸の軌條を生産した、設備の詳細は不明であるが然し會社の年能力は次の如きものがある。

鋼塊生産能力	九〇,〇〇〇噸	條鋼生産能力	九〇,〇〇〇噸	厚板及び薄板	六〇,〇〇〇噸
一九三〇年の軌條輸入高次の如し					
重軌條	五,四二一噸				
輕軌條	六,八三五噸				
計	一二,二五六噸				

右の數量は重軌條全供給高(二五九,七七六噸)の僅に二%及び輕軌條全供給高(三八,六〇七噸)の一七・六%に過ぎない、輕重軌條合計供給高二九七,四八二噸の内輸入は僅に二二,二五六噸即ち四・一%である一九三〇年の軌條附屬品の輸入高は八八七噸で其の全供給高一七,二二八噸の五・一%に過ぎなかつた。一九二九年及び二八年に於ける軌條の輸入高を資源別に示せば次の通りである。

資源別	一九二九年	一九二八年	一九二七年
英國	六二二噸	三七二噸	六,〇四九噸
佛國	一,三三四	七,七〇一	一五,七三一
獨逸	一七,〇八〇	二六,三五九	四〇,五八九
白耳義	—	四二九	三,六〇〇
奧太利	—	—	—
和蘭	四六三	三〇四	四,四三四
瑞典	—	—	二,七六八
米國	一四,四二四	一〇,二一九	一五,六六六
其他	一三二	六八	一九
計	三三,四八五	四五,四五二	八八,八五六

線材

日本で線材を生産する製鋼業者は次の三者である。

- 一、八幡製鐵所

二、株式會社淺野小倉製鋼所
三、株式會社神戸製鋼所

最近三ヶ年の生産高、輸入高及び全供給高次の如し

年	生産高	輸入高	供給高
一九三〇年	一一二、四三一〇	六九、六八四〇	一九一、一一五〇
一九二九年	六七、七八九〇	一五七、四七四〇	一一五、二六三〇
一九二八年	五七、五八九〇	一七二、六四四〇	一一〇、一三三〇

一九三〇年に於ける輸入高は全供給高の三六・四%であつたが一九二九年に於ては六九・四%であつた此の二ヶ年間に於ける輸入の減少率は五二・三%で全供給高に於ける減少率一七・八%よりも頗る大である、此の兩年間に於ける全鋼材輸入高の減少率は五四・五%であつて全鋼材供給高の減少は一四・八%であつた、故に線材輸入高の減少率が特に激しかつたこと云ふことが判る。此の現象は例の如く日本の新業者が自給自足の方針に向つて益々初志の貫徹に努めたことに全く起因するものである。

八幡製鐵所——本製鐵所の線材壓延能力は年六〇、〇〇〇噸で一九三〇年の生産高は八三、八四五噸であつた
淺野小倉製鋼所——本製鋼所の線材生産高次の如し。

一九一八年	一、五八九〇	一九一九年	一、五二六〇
一九二〇年	六、九六九〇	一九二一年	一五、六三一〇

(?—譯者)

神戸製鋼所——本製鋼所は一九二七年に線材の製造に着手した其の生産高次の如し

一九二二年	一一、九〇二〇	一九二三年	一八、〇〇七〇
一九二四年	九、八九八〇	一九二五年	一一、九六四〇
一九二六年	六、二〇四〇	一九二七年	五、一四七〇
一九二八年	六、〇二五〇	一九二九年	三、五八二〇

線材の輸入——線材の輸入は前述の通り低減しつつあるが一九三〇年上半年の輸入高は三八、六一二噸であつた、過去三ヶ年間の輸入高次の如し

一九三〇年	五九、四八五〇
一九二九年	一五七、四七四〇
一九二八年	一一三〇、一三三〇

次表は工業別線材使用高を示す (單位噸)

造 建 鐵	道	一九二八年	一九二七年	一九二六年	一九二五年	一九二四年
鐵	道	三	一〇	一	四	一七三
建	築	二、一一一	一、四〇七	八三四	九、二二二	三八三
造	船	二	八	一五	七	五

機械	七七、七六九	三八、一〇五	三八、一六九	二九、八〇六	二九、八三四
瓦斯、水力、石油	一〇三	五〇	一	七二	一
鑛山	三七	一	一	四〇	一
其他	二二、一四八	一九、二七七	二四、一八六	一八、七八七	六、二二六
合計	一〇二、一七〇	五八、八五七	六三、二〇五	五七、八四四	三六、六四四

外人の觀たる日本の鐵鋼業 (其の六)

The Far Eastern Review, March, and April 1932. By Harold Huggins

目次

- 一、鋼板及鉄力板の生産と輸入
- 一、厚板薄板の主要製造業者と會社別生産高
- 一、日本に於ける製鐵壓延設備一覽表
- 一、主要鋼板生産業者別事情
- 一、厚板及薄板の販賣組合
- 一、亞鉛引薄板と其の主要生産業者
- 一、鐵合金と其の主要生産業者並に會社別生産高

- 一、特殊鋼と其の主要生産業者並會社別生産高
- 一、フォージングと主要生産業者
- 一、キャストイグと主要生産業者
- 一、リベット及びボルト
- 一、ホイリムと車軸
- 一、窓障子、鑄鐵管、鋼矢板
- 一、釘及び線と線材の供給高
- 一、釘及び線の輸入
- 一、地方別釘の生産と工場數及び能力
- 一、日本製鋼業に於ける原料別消費高調
- 一、世界國別製鋼高表

鋼板

日本に於ける厚板及び薄板の生産高は急速に増加し一九二九年の生産高は一九二六年のものに殆んど倍加するに至つた、各種薄板の一九三〇年の生産高は更に五六七、五二九噸に増加した、最近三ヶ年の生産高次の如し

一九二八年	四二九、六二九噸	一九二九年	五四二、九二五噸
一九三〇年	五六七、五二九噸		

右三ヶ年間に於ける輸入に就て見るに一九二八年には三四二、九三七噸であつたが一九三〇年には一五一、一八七噸に減じた、最も輸入の減少したのは〇・七耗以下の薄板であつた、即ち一九二八年には一八三、四六八噸を算したが一九三〇年には僅に二七、四四六噸を輸入したに過ぎない。一方厚板の輸入には殆んゞ變化はなかつたが然しながら兎に角内地で製造し得らるゝものゝ輸入は總べて之を防遏せんとするの傾向にある。鋼力板の生産に於ては日本は尙人後に在つて其の生産業者は八幡製鐵所のみである、其の輸入は一九三〇年に於ては一九二九年よりも減じたは云へ一九二八年に比し僅かの輸入減を示したに過ぎない、其の全供給高を示せば次の如し。 全供給高(内輸入高)

一九三〇年 九一、三四二噸(六八、九一二)
 一九二九年 九九、四四三 (八一、五六四)
 一九二八年 八八、五〇三 (七二、一一三)

現在日本に於ける厚板及び薄板の製造業者は次の八者である。

- (一) 八幡製鐵所 (二) 株式會社川崎造船所葺合工場 (三) 株式會社淺野造船所製鐵部
- (四) 徳山鐵板製造株式會社 (五) 東海鋼業株式會社 (六) 株式會社九州製鋼所
- (七) 中山薄鐵板株式會社 (八) 日本鋼業株式會社

右會社の公稱能力は九州製鋼所と中山薄鐵板工場とを除き次の如し。

製鐵所	厚板	中板	薄板
八幡製鐵所	一三〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇	四五,〇〇〇
川崎造船所	一一〇,〇〇〇	—	二〇,〇〇〇
淺野造船所	六〇,〇〇〇	—	—
徳山鐵板	—	—	三六,〇〇〇
東海鋼業	—	—	—
日本鋼業	—	—	七,〇〇〇
計	四三〇,〇〇〇	八五,〇〇〇	二八八,〇〇〇
兼二浦(三菱製鐵)	八〇,〇〇〇	—	—
合 計	五一〇,〇〇〇	八五,〇〇〇	二八八,〇〇〇

(本表に含まざる九州製鋼と中山薄鐵板工場能力の見積は合計約三〇,〇〇〇噸)

日本に於ける製板壓延設備

會社及工場名	型式	スタンの數	ロールの寸法		廻轉數(分間ニ付)	製造者名
			直徑(耗)	長さ(耗)		
八幡製鐵所	三重式	一	上下用八六四 中用五〇八	二、七九四 二、七九四	八七	米國モルガン會社
第一厚板工場	粗仕上	一	一、二四五	四、五七二	六四	モルガンメスター
第二厚板工場	三重式	一	上下用七六二 中用四五七	二、一三四	八〇	モルガン
第三鋼板工場	—	—	—	—	—	—

八幡製鐵所	第一中板工場	二重式	粗上	七六〇〇	一、八〇〇	七五	八幡製鐵所
"	第二中板工場	三重式	粗上	七五〇〇	二、〇〇〇	二二二	"
"	平鋼工場	三重式	粗上	四六〇〇	一、八〇〇	一〇四	クルツア
"	第一薄板工場	二重式(ハ)	粗上	七二〇	一、一七〇	三五	"
"	第二薄板工場	"	粗上	七六〇	一、一七〇	三五	"
"	鈹力板工場	"	粗上	六六〇〇	八八三〇	四三三	獨逸
川崎造船所	鈹合厚板工場	三重式	粗上	六六〇〇	八八三〇	四三三	住友製鐵所
"	鈹合薄板工場	二重式	粗上	七六〇〇	一一一七	四三三	住友製鐵所
淺野造船所	鈹合厚板工場	三重式	粗上	六六〇〇	一一一七	四三三	住友製鐵所
三菱兼二浦厚板工場	鈹合厚板工場	三重式	粗上	六六〇〇	一一一七	四三三	住友製鐵所
東海鋼業	薄板工場	三重式	粗上	六六〇〇	一一一七	四三三	住友製鐵所

八幡製鐵所の過去三ヶ年に於ける鋼板生産高次の如し。(單位噸)

厚さ〇・七耗以上鋼板	一九三〇年	一九二九年	一九二八年
" 七耗未満鋼板	一五五、三一九	一六五、七六二	一四八、一六二
珪素鋼板	二八、六〇五	二七、九三四	二五、九九七
縞鋼板	五、三四八	三、二八七	三、三七六
鈹力板	三、七五一	四、三五八	二、四九七
ユニバーサル平鋼	二二、四三〇	一七、八七九	一六、三九〇
合計	二二八、三六九	二二〇、〇〇四	一九八、三〇九

民間會社の生産は〇・七耗以上及び以下の普通鋼板のみであつた次の如し。
 〇・七耗以上鋼板 一六二、二七五 一七七、七五二 一五六、一五九

德山鐵板 薄板工場	二重式	粗上	七七一〇	一、一一七	三〇	住友製鐵所
大阪中山鐵板 薄板工場	"	粗上	七六〇	一、一一七	三〇	住友製鐵所
日本鋼業 八屋薄板工場	"	粗上	七二〇	一、一七〇	三五	住友製鐵所

民間會社の生産高が官營八幡製鐵所の分より大なる鋼材は此の鋼板ミ別にバー及びアングルの二鋼材あるのみである。

硅素鋼板

硅素鋼板は八幡製鐵所のみで製造せらる。一九三〇年の生産高は五、三四八噸で之を寸法別に示せば次の如し。

〇・三五耗	四、〇一五噸
〇・四三耗	一、三三三噸
計	五、三四八噸
綯鋼板	

八幡製鐵所一九三〇年の綯鋼板生産高三、七四五噸、之を主なる寸法別に示せば次の如し。

四・五耗	一、三六四噸
六耗	一、八六九噸

此の外四九四噸の耳付綯鋼板 (Untrimmed) の四・五耗の耳付綯鋼板 (Flanged chequered sheets、譯者) を生産した。

ユニバーサル平鋼

一九三〇年に於ける八幡製鐵所のユニバーサル平鋼の生産高は二、九〇五噸で之を主なる寸法別に示せば次の如し。

九耗	……七二〇噸	一一耗	……四五六噸	一九耗	……九〇五噸
二五耗	……二六四噸				

鋳付鋼板 (Flanged sheets、譯者)

八幡製鐵所は一九三〇年に於て五、九一四噸の鋳付鋼板を生産した之を主なる寸法別に示せば次の如し。

四・五耗	……一、八四一噸	六耗	……二、〇七五噸
------	----------	----	----------

耳付鋼板の一九三〇年に於ける生産高は二、六八八噸で主なる寸法は九耗であつた。此の外不合格品の鋼板五二九噸ミ一六六噸の二等品をも生産した。

株式會社川崎造船所

本會社は財的難件を有する古い會社である、其の葺合製板工場は恐らく現在に於ける會社の最も價值ある財産であらう。資本金は九千萬圓内拂込済七千四百二十五萬圓で一九二七年以來の欠損高五千三百萬圓に報ぜらる。又未償還社債五千九百萬圓借入金二千五百六十萬圓に證券の支拂ふべきもの五千萬圓以上を有す、目下會社は重要視すべき財的後援者を有せざるも然しながら遠からず三井の手に落ちるか傾向に在る。

葦合製板工場は日本に於ける最も重要な黒板工場であつて其の公稱年能力は厚板一二〇、〇〇〇噸、薄板二〇〇、〇〇〇噸である工場は一九二四年に設備せられ生産高次の如し (單位噸)

一九二四年	三九、五七四	一九二九年	一八〇、一四六
一九二五年	三七、〇九二	一九三〇年上半期	一一〇、四六七
一九二六年	四〇、八三六	内厚板	三五、五〇五
一九二七年	七七、四三五	中板	四、二〇〇
一九二八年	一二五、九八二	薄板	七〇、七六二

株式會社淺野造船所

本會社は厚板のみを壓延す其の生産高次の如し。

一九一八年	四、〇〇〇噸	一九二五年	二〇、五八四噸
一九一九年	二五、一一五	一九二六年	三三、三二九
一九二〇年	八、三〇九	一九二七年	四二、九二四
一九二一年	一一、二二〇	一九二八年	五二、六一六
一九二二年	一三、三一五	一九二九年	六四、三七九
一九二三年	八、四八〇	一九三〇年上半期	三三、一三〇
一九二四年	一一、八五九		

其の公稱能力は年六〇、〇〇〇噸である。

徳山鐵板株式會社

本會社は一九二八年二月に設立せられ大阪鐵板株式會社(目下鉛引薄板のみの製造に従事す)の徳山工場を引継げるものである、其の公稱資本五百萬圓、内拂込濟二百五十萬圓で黑板三六、〇〇〇噸の能力を有す。一九三〇年上半期の生産高は僅に四千五十七噸であつた、會社は多數製鋼業者の例に漏れず目下財的難關に遭遇して居る、生産高次の如し。

一九二七年	二四、四〇八噸	一九二九年	三一、一一〇噸
一九二八年	二六、七二三噸	一九三〇年上半期	四、〇五七噸

東海鋼業株式會社

本會社の公稱能力は厚板二〇、〇〇〇噸、中板一五、〇〇〇噸、合計三五、〇〇〇噸である
其の生産高次の如し

一九一八年	三、一九五噸	一九二六年	一六、七一七
一九一九年	五、二〇三	一九二七年	一七、八六六
一九二〇年	五、一八六	一九二八年	一九、四一九
一九二一年	二、二九四	一九二九年	二四、四二六
一九二二年	七、五三七	一九三〇年上半期	一八、七九四
一九二三年	九、七〇二	内厚板	七、六三〇
一九二四年	一二、四六一	中板	一一、一三六

一九二五年 一四、一〇六
九州製鋼株式會社

薄板 一一、〇二八

本會社の薄板壓延能力は年六萬噸である然しこは公表されたものではない、其の生産高の判明せるものは一九二九年の數字のみで二七、三五二噸であつた。

中山薄鐵板工場

本會社の財的詳細事項に就ては不明である、又能力も公表されてゐない

一九二九年から生産を始め同年の生産高は一〇、〇二〇噸であつた。黑板のみを生産す。

日本鋼業株式會社

本會社は一九一九年五月に設立せられ資本金二十萬圓全部拂込済であつて其の公稱能力は黑板七千噸である、生産高次の如し。

一九二五年	三、〇五五噸	一九二八年	六、五八〇
一九二六年	五、八四三	一九二九年	七、九一七
一九二七年	六、〇八八	一九三〇年上半年	一、五六五

三菱製鐵株式會社兼二浦工場

本會社は年八萬噸の厚板製産能力を有すれども目下一屯の鋼をも生産せず。

厚板及び薄板の販賣組合

現在日本には、厚板及び薄板の販賣を統制し且つ或る場合に於ては其の生産をも統制する四つの組合がある。次の如し

- 一、日本黑板薄物共販組合 一東十三枚物の薄板を統制す
- 二、日本黑板厚物共販組合 三枚以下十二枚物迄の板を統制す
- 三、中板共販組合 一・六耗乃至六耗の板を統制す
- 四、日本厚板共販組合 六耗以上の板を統制す

亞鉛引薄板

亞鉛引薄板の製造は小工場に限られ、而して其の小工場は大製鋼業者より黑板を輸入するか又は之を輸入す。其の生産數字は不明なるも次に掲ぐる主要亞鉛引板製造業者の能力は月約十二萬噸に達す。景氣の時は操業し不景氣の時には工場を閉鎖する數多の小製造業者がある。

亞鉛引薄板の主なる製造業者次の如し。

- 一、東京亞鉛鍍金株式會社 (東京府南葛飾郡砂町。設立年月 一九一八年七月 資本金一百萬圓(拂込六十五萬圓))
- 二、大阪鐵板製造株式會社 (大阪市此花區櫻島町、設立、一九二一年五月 資本金百五十萬圓全部拂込済)
- 三、大正鐵板鍍金合資會社 (東京府南葛飾郡龜井戸町)
- 四、東邦亞鉛鍍金株式會社 (東京府南葛飾郡大島町。設立一九二七年一月資本金七萬圓)

五、共立亞鉛鍍金會社

六、中山亞鉛鍍金合名會社

七、昭和鍍金會社

八、東亞鍍金合資會社

九、吾妻鍍金會社

一〇、中山亞鉛鍍金合資會社

右の内昭和鍍金、大正鐵板、東亞鍍金、吾妻鍍金の各會社は工場を閉鎖して居る。

亞鉛引薄板の輸入

目下本鋼材の輸入殆んど無し。

鐵合金ニ特殊鋼

日本に於ける特殊鋼の製造に關する詳細は不明であるが其の判明せる分次の如し。
日本には鐵合金の製造に従事するものに次の七社あり。

此外、鏡鐵、滿俺鐵、硅素鐵等の合金を一時生産せる電氣爐を有する電力會社があるが其の多くは目下生産を中止して居る。

- (一) 八幡製鐵所
- (二) 釜石鑛山株式會社
- (三) 日本曹達株式會社 (三工場)

- (四) 株式會社鐵興社 (二工場)
- (五) 日本鋼管株式會社
- (六) 大同電氣製鋼所

(七) 大垣電氣冶金工業所
生産する合金の主なるもの次の如し

- 一、滿俺鐵 (Ferro-manganese)
- 二、硅素鐵 (Ferro-silicon)
- 三、鏡鐵 (Spiegelisen)
- 四、クローム鐵 (Ferro-chrome)
- 五、硅素鏡鐵 (Silicon-spiegelisen)

其の生産高次の如し。

	一九二九年	一九二八年	一九二七年	一九二六年	一九二五年
滿俺鐵	一九、〇四七噸	一一、〇三六噸	一一、一九三噸	七、〇五八噸	六、〇六八噸
鏡鐵	一、一一〇	二、〇一一	二、一三八	一、八一	二、〇六六
硅素鐵	五、一四五	三、二五七	二、二四一	二、八五二	二、二八〇
硅素鏡鐵	六八	五三	四六	一	一
クローム鐵	七〇五	五七六	一九六	二〇一	四二
其他	一六〇	一五八	一九六	二八六	八六
合計	二六、三三五	一七、〇九一	一六、〇二二	一二、二〇八	一〇、五四二

八幡製鐵所

八幡製鐵所の製造する合金次の如し。

- 一、滿俺鐵
- 二、硅素鏡鐵

尙クローム鐵は一九二五年迄製造され、又一九二八年迄少量のタンゲステン鐵が製造された、一九二六年及び二七年には年一吨のモリブデン鐵が生産された、八幡製鐵所に於ける是等合金の生産高は決して大なるものではない、一九三〇年の生産高次の如し。

滿俺鐵	四五八吨
硅素鐵	二七三吨

此の生産高は一九二八年及び二九年のものよりも大であつたが然し電氣爐の生産品たる此の種合金の生産は民間工業家に委ねられて居るものゝやうである。

日本鋼管株式會社

本會社は合金の主要生産者で其の生産高次の如し

滿俺鐵	鏡鐵	硅素鐵
一九二九年	一一、五五五	九五〇
一九二八年	八、二一四	一、八五七
		一、五八七

本會社は一九二〇年に設立せられ日本に於ける苛性曹達並漂白粉の主要生産業者の一である、又本會社は電氣爐を備ふる三工場を所有し合金鋼を生産す、資本金三百六十萬圓内拂込百九十五萬圓で三井財團に屬す其の三工場次の如し。

- 一、會津工場——滿俺鐵、鏡鐵、硅素鐵
- 二、二本木工場——滿俺鐵
- 三、富山工場——滿俺鐵及び硅素鐵

右三工場別生産高次の如し

一、會津工場	一九二九年	一九二八年	一九二七年	一九二六年	一九二五年
滿俺鐵	一、三六四吨	九〇二吨	一、三〇〇吨	八四五吨	四九二吨
鏡鐵	九七	一	一	一	一九七

尙此の外年産百吨以下其の他の合金を生産す

日本曹達株式會社

一九二七年	七、八一九	二、〇六〇	四二八
一九二六年	五、二九六	一、五八八	六三九
一九二五年	五、九六四	一、六一九	二二七

硅素鐵	三五九	一七二	一四七	三六七	三七八
合計	一、八二〇	一、〇七四	一、四四七	一、二二二	一、〇六七
二、二本工場					
滿庵鐵	一九二九年 一、二三六	一九二八年 一	一九二七年 一	一九二六年 一	一九二五年 一
三、富山工場					
滿庵鐵	一九二九年 四二七	一九二八年 三七四	一九二七年 一	一九二六年 一	一九二五年 一
硅素鐵	一九〇	二〇六	一	一	一
合計	六一七	五八〇	一	一	一
株式會社鐵興社					
滿庵鐵	一九二九年 一、九三七	一九二八年 一、二四六	一九二七年 一、三二〇	一九二六年 六六三	一九二五年 二二三
鏡鐵	一六三	一四三	七三	一七〇	一五五
硅素鐵	一、五八二	九五四	八五六	六四五	四三二

本會社は一九二八年十月に設立せられ合金鋼製造會社としては比較的新しきものである。(資本金十五萬圓、全部拂込済) 福島縣に二工場を有す、其の小野新町工場に於ける生産高次の如し。

硅素鐵	六八	五三	四六	一	一
其他	二二	一四	二〇	一	一
合計	三、七七一	二、四一〇	二、三二五	一、四七八	六〇九
三、春工場					
株式會社大同電氣製鋼所					
滿庵鐵	一九二九年 六五九	一九二八年 一五二	一九二七年 一三〇	一九二六年 八九	
鏡鐵	一	一一	五	五三	
硅素鐵	一	一一三	一一三	二四四	
クロム鐵	三〇五	五七六	一九六	一四五	
合計	九六四	八五二	五六四	五三一	
大垣電氣冶金工業所					

本工場は新設の一小工場で、一九二九年に九六噸の「其他」の合金を生産したに過ぎない。
 本會社は一九一六年八月に設立された古い會社で鐵合金並特殊鋼を生産する電氣爐を有す(資本金二百八十萬圓全部拂込済)
 名古屋の熱田工場に十噸電氣爐、五噸電氣爐各一基を備へ鐵合金鑄物其他を生産す一方名古屋築地工場に於ては特殊鋼のみを生産す、熱田工場に於ける鐵合金の生産高次の如し。

本工業所は一九二九年に作業を開始せる新設會社で鐵合金を製造す。
一九二九年の生産高次の如し。

滿俺鐵	一、五〇〇噸	鏡鐵	一、〇五〇噸	クローム鐵	四〇〇噸
合計	二、九五〇噸				

右の内クローム鐵は日本に於ける本合金生産業者の生産高中本會社の四百噸を以て最高とす。

釜石鑛山株式會社

本會社も亦鐵合金を製造すれども其の生産高は極めて小である、一九二七年及び二六年に於て數噸のタンダステン鐵ミモリブデン鐵ミを生産したが其の後中絶した、こは恐らく日本に於ける需要が國內生産業者をして斯くの如き極めて困難な合金の製造に従事せしむる程十分でない爲であらう。

目下鏡鐵の需要は一般に減少の傾向あるを以て製造業者は滿俺鐵硅素鐵並に新合金のクローム鐵に注意を向けつゝあるもの、様である、本會社の生産高次の如し。

	一九二九年	一九二八年	一九二七年	一九二六年
滿俺鐵	三六九	七	六〇	八
硅素鐵	二六四	四九	三五一	六〇二
タンダステン鐵	一	一一	七	一四
モリブデン鐵	一	一	一	一

其他	一	五四	一	一
合計	六三三	一一二	四一九	六一三

註 モリブデン鐵に關し附言して置く、日本の古刀が實に驚くべき價値のものであつた理由は、有名な刀鍛冶の使用した鑛石に偶然若干のモリブデンが混入して居つた爲めである、刀身鋼に此の金屬が存して居つた爲め各片を六十四回以上も鍛鍊するこを得て驚歎すべき強靱なる鋼を製造するこが出来たのであつた。

藤田鑛業株式會社

本會社は合金の製造業者としては商工省の名簿に在らざるも然し遞信省は、電氣爐に於てクローム鐵を生産する電氣化學會社中に之を加へて居る、資本金三千萬圓、内拂込一千五百萬圓。

合金鐵の輸入——合金鐵の輸入次の如し

	一九三〇年	一九二九年	一九二八年
滿俺鐵	二、一三一	二、四六八	二、二二二
硅素鐵及び硅素鏡鐵	六〇	三九六	一、二七五
其他合金	五五九	三四四	二九一
合計	二、七五〇	三、二〇八	三、六八八

日本に於ける合金鐵の製造はほんの昨今着手せるばかりの觀があつて、日本に於て製造し得られぬ合金の

輸入は、茲數年間は、少くも日本の製造業者が需要を十分に満足せしめ得るまでは、恐らく増加するであらう。

特殊鋼

日本に於ける特殊鋼の製造は過去數年間に於て長足の進歩を遂げた、目下生産するもの次の如し。
各種の高速度鋼、鋸、球入軸承、齒車其の他の製造用特殊鋼。

目下特に優良特殊鋼の生産増加しつつあるが此の傾向は主として國産品のみを使用せしめんとする政府の政策に依つて育成されたものである、特殊鋼の主要製造業者次の如し。

- 一、八幡製鐵所
- 二、株式會社日本製鋼所
- 三、東京鋼材株式會社
- 四、日本特殊鋼合資會社
- 五、株式會社大同電氣製作所
- 六、株式會社小松製作所
- 七、昭和特殊鋼合資會社
- 八、日本鑄造株式會社

- 九、株式會社住友製鋼所
- 十、金子鑄造所

大阪製鐵所

- 一一、株式會社神戸製鋼所
- 一二、川崎車輛株式會社
- 一三、株式會社三菱造船所神戸工場
- 一四、長崎電氣製鋼所
- 一五、長崎工場

- 一六、株式會社米子製鋼所
- 一七、株式會社安來製鋼所
- 一八、株式會社唐津製鋼所

以上の外に日本製鋼所の廣島工場を加ふ。
各種特殊鋼の生産高合計次の如し。

一九二九年	一八、五二九	一九二六年	一八、九〇五
一九二八年	一五、九二九	一九二五年	八、八七七

八幡製鐵所
 一九二七年 一〇、九四二
 一九二四年 七、四一五

本製鐵所の特殊鋼生産高次の如し

一九二九年	三、七二二	一九二二年	三五八
一九二八年	二、七五九	一九二一年	六三八
一九二七年	一、五一七	一九二〇年	九八七
一九二六年	一、一四五	一九一九年	一、八五三
一九二五年	二二六	一九一八年	四、一八五
一九二四年	一〇七	一九一七年	三、六三二
一九二三年	七一		

株式會社日本製鐵所

本製鐵所は其の室蘭工場及び吳海軍工廠近くの廣島工場に於て特殊鋼を生産す、其の室蘭工場の生産高次の如し

一九二九年	七、一一二	一九二三年	五、〇九七
一九二八年	五、〇五五	一九二二年	三、八〇七
一九二七年	三、四九四	一九二一年	一〇、四六一
一九二六年	四、〇六五	一九二〇年	六三

一九二五年	一三、七五一	一九一九年	五、二八一
一九二四年	五、八三〇		

廣島工場に於ては一九二九年に僅に五八屯を生産したに過ぎない、本會社は他の民間會社の關知せざる兵器製造用特殊鋼—恐らくニッケル鋼—の製造に特に従事す。

日本鋼材株式會社

本會社は少量の特殊鋼を生産し一九二九年の生産高は僅に八二屯に過ぎない。

日本特殊鋼合資會社

本會社は一九一五年十一月に設立せられ資本金は百十六萬圓である高速鑽孔機、齒車、鋸、球入軸承等用の特殊鋼を生産するに同時に又此等の製品をも製造す。各種特殊鋼の生産高次の如し。

一九二九年	一、二八二	一九二四年	五五四
一九二八年	一、八〇四	一九二三年	四二二
一九二七年	一、三五七	一九二二年	九五五
一九二六年	一、二六三	一九二一年	九八九
一九二五年	一、一五七		

株式會社大同電氣製鐵所

本會社は各種の高速鋼を生産す其の生産高次の如し。

吾妻工場

一九二九年	一、三九一噸
一九二八年	八六三
一九二七年	八七三
一九二六年	六〇八
一九二五年	三三一
一九二四年	一五八
一九二三年	七五

築地工場

	八三噸
	五五三
	五四〇
	四一五
	九六
	一
	一

株式會社小松製作所

本會社の特殊鋼生産高は極めて小額である、會社の設立は一九二一年四月で資本金二百萬圓、拂込六十二萬五千圓、其の生産高次の如し。

一九二九年	五九噸	一九二六年	八三噸
一九二八年	一六六	一九二五年	八
一九二七年	九八		

昭和特殊鋼合資會社

本會社は新設會社であつて京都に工場を有す其の製造の詳細は不明であるが、製造し得らるゝものは殆んど皆製造し又製造せんとするものゝやうである、目下クローム鋼を生産す、其の生産高次の如し。

一九二九年	二〇六噸	一九二七年	五六噸
一九二八年	二五〇	一九二六年	二四三

日本鑄造株式會社

本會社は一九二〇年九月に設立され(資本金一百萬圓拂込四十萬圓)淺野財團に屬す、本來鋼鑄物の製造を主とする會社であるが又自家用として少量の特殊鋼をも生産す、一九二九年には三〇噸の特殊鋼を生産した。

株式會社住友製鋼所

本會社は一九〇一年六月に設立されたもので日本に於ける最も古い製鋼會社の一である(資本金一千二百萬圓、拂込九百萬圓)車輪、車軸、鑄物、フォーディング等の製造を専門とするれども又自家用として若干の特殊鋼をも生産す其の生産高次の如し。

一九二九年	一、〇八一噸	一九二四年	三七六
一九二八年	五五四	一九二三年	七五二
一九二七年	一五三	一九二二年	二三三
一九二六年	二九〇	一九二一年	六八二
一九二五年	八六八		

本會社は日本に於ける滿庵鋼の主要製造業者である。

金子鑄造所

本鑄造所は一九一七年四月に設立され資本金十七萬五千圓、大阪に在り、滿俺鋼及び耐酸鑄物を生産す、其の生産高次の如し。

一九二九年	七二六噸	一九二七年	九一五
一九二八年	六九五	一九二六年	八一五

株式會社大阪製鎖所

本會社は極めて少量の自家用特殊鋼を生産す、設立一九一六年十一月資本金三百萬圓、拂込百五十萬圓、生産高次の如し。

一九二九年	一九噸	一九二七年	二二九噸
一九二八年	一		

株式會社神戸製鋼所

本製鋼所に於ては高速度鋼を生産し、極めて高級の鑽孔機を製造す又特殊鋼を用ひて其の他の品を生産す、特殊鋼の生産高次の如し。

一九二九年	二、二九一噸	一九二五年	一、二二五
一九二八年	一、三三三	一九二四年	一、三〇二
一九二七年	一、一〇三	一九二三年	四八二

川崎車輛株式會社

本會社も亦自家用として少量の特殊鋼を生産す（一九二九年の生産高一六九噸）本會社は日本に於ける無錆鋼の最初の被免許人である。

一九二六年	八一八	一九二一年	二七三
-------	-----	-------	-----

株式會社三菱造船所（神戸工場）

資本金五千萬圓、拂込三千萬圓、神戸工場に於て少量の特殊鋼を生産す（一九二九年一六四噸）

株式會社米子製鋼所

本製鋼所に於ては、坩堝鋼、高速度鋼等を製造す。其の生産高次の如し。

一九二九年	一五八噸	一九二八年	一二九噸	一九二七年	一八五噸
設立	一九〇三年三月	現在資本	一、二五〇、〇〇〇圓	内拂込	一、〇九一、四七五圓

株式會社安來製鋼所

設立 一八九九年二月
資本金 一、〇〇〇、〇〇〇圓 内拂込六五〇、〇〇〇圓

生産品は鋸用鋼、高速度鋼、合金、發條等であつて生産高次の如し。

一九二九年	一五二噸	一九二八年	一六〇噸	一九二七年	一四〇噸
-------	------	-------	------	-------	------

株式會社唐津製鋼所

設立 一九一七年十月

資本 一、〇〇〇、〇〇〇圓 内拂込六二五、〇〇〇圓

生産品は鑄物、フォーディング及び少量の特殊鋼であつて其の特殊鋼の生産高次の如し。

一九二九年一四三噸 一九二八年一八六噸 一九二七年一四〇噸

以上諸會社の特殊鋼種類別實産高に關しては不明である。一體製造業者の多くは小會社であつて皆互に嫉視し居るが爲め種類別生産數字の入手頗る困難である。

其の他

一、フォーディング

フォーディングの主要製造業者(粗及び仕上)次の如し

- 1 八幡製鐵所
- 2 株式會社日本製鋼所
- 3 株式會社大島製鋼所
- 4 東京鋼材株式會社
- 5 日本特殊鋼合資會社

以上諸工場を生産高合計次の如し

一九二九年	三八、四五〇噸	一九二五年	二四、七四三
一九二八年	三一、九六八	一九二四年	二九、五八六
一九二七年	二五、四七五	一九二三年	二一、八四〇
一九二六年	二四、三三三		

多くの工場に於ては粗フォーディングを仕上げて之を自家用の機械製造に使用す、其の特に著しき會社次

- 6 株式會社大同電氣製鋼所
- 7 株式會社住友製鋼所
- 8 株式會社神戸製鋼所
- 9 川崎車輛株式會社
- 10 株式會社三菱造船所(神戸)
- 11 株式會社米子製鋼所
- 12 日本製鋼所廣島工場
- 13 株式會社唐津製鋼所
- 14 三菱造船所長崎電氣製鋼所
- 15 長崎工場

の如し

日本製鋼所、大島製鋼所、三菱造船所、住友製鋼所、川崎車輛會社

二、キャストインダ

鋼鑄物の主要製造會社次の如し

- 1 八幡製鐵所
- 2 日本製鋼所
- 3 釜石鑛山株式會社
- 4 大島製鋼所
- 5 日本鑄鋼株式會社(東京)
- 6 日本鑄造株式會社
- 7 大同電氣製鋼所
- 8 小松製作所
- 9 昭和特殊鋼合資會社
- 10 住友製鋼所
- 11 日本鑄鋼株式會社(大阪)

- 12 株式合資會社羽室鑄鋼所
- 13 大阪製鐵株式會社
- 14 共立電氣鑄鋼所
- 15 神戸製鋼所
- 16 川崎車輛株式會社
- 17 三菱造船所(神戸)
- 18 米子製鋼所
- 19 日本製鋼所廣島工場
- 20 淺野小倉製鋼所
- 21 戶畑鑄物株式會社
- 22 唐津製鋼所
- 23 三菱造船所長崎工場—電氣製鋼所
- 24 " 長崎工場

以上諸工場の鑄物生産高合計次の如し

一九二九年

四九、二二四 吨

一九二七年

四三、一四五 吨

一九二八年	四八、六七五噸	一九二六年	四一、六五二
一九二五年	三六、一八八	一九二三年	三〇、〇一一
一九二四年	二七、一三九		

三、リベット及びボルト

本品の小製造業者数多あるも、其の主なるものは八幡製鐵所と日本鋼業との二者である、一九三〇年に於ける八幡製鐵所の生産高次の如し

ボルト及びナット	六二八噸
リベット	五七三"
ドームリング	一三"
ナット	三九"
リング	三〇"
四、外輪、車軸 (Wheel rims & Axles)	

本品は数多の工場に於て生産さるゝも其の主なるもの次の如し

八幡製鐵所、住友製鋼所、川崎車輛、三菱造船所神戸工場

一九三〇年に於ける八幡製鐵所の生産高次の如し。(オイルリムとあるはタイヤの誤りか? 譯者)

オイルリム	四、三八一噸
-------	--------

アクスル	二、〇一六"
------	--------

五、窓障子 (Window Sashes)

本品は東京市外大島町東京鋼鐵製作所及び日本特殊鋼合資會社大島工場に於て製造せらるゝ、此の二會社は亦發條をも製造す。

六、ペンストック (Penstock)

本品の製造業者は三菱造船所(長崎及び神戸工場)のみである一九三〇年に於ける神戸工場の生産高は一、二五八噸であつた。

七、鑄鐵管

本品の主要製造業者は大阪の栗本鐵工所と尼崎の久保田鐵工所とであるが久保田鐵工所は世界に於ける殆んどあらゆる同業者と競争してスラバヤ水道工事に要する水管の供給契約を獲得して以來世界的に有名になつた。

八、鋼矢板

八幡製鐵所は一九三一年三月自己意匠の鋼矢板を市場に賣出して好評を博した、其の生産能力は月二千噸である、此れが爲め鋼矢板の輸入は喰止められ従つてシーメンズシユクカート製鋼會社、ベスレム製鋼會社等の外國會社は一大打撃を蒙るに至つた。

釘 及 び 線

一九二九年以來日本の釘輸入は終熄し、國內製造業者は今や内國の需要を十分に供給し得るに同時に遠からず輸出し得るに至るであらう次表は釘及びワイヤー製造用材の供給高を示す。

年次	八幡製鐵所	民間製鐵所	國內生産高合計	輸 入	供給高合計
一九二四年	二九、一七七	九、八九八	三九、〇一五	八八、二四二	一二七、二五七
一九二五年	三六、二三二	一二、九六四	四九、一九六	五一、三一九	一〇〇、五一一
一九二六年	二八、七七九	六、〇二四	三四、八〇三	一一七、九七一	一五二、七七四
一九二七年	四九、〇三二	五、三九五	五四、四二七	一〇九、〇九〇	一六三、五一一
一九二八年	五〇、七六九	六、八二〇	五三、五八九	一七二、六四四	二三〇、三三三
一九二六年三月線材の關稅は從價一五%から一八%に引上げられた、尙一九二三年九月十七日から一九二四年三月卅一日迄は大震災の結果無稅ミなつた。釘及び線の輸入次の如し。					
	釘	亞鉛鍍金釘	計		
一九二四年	三七、三〇一	一、九〇一	三九、二〇二		
一九二五年	五九一	一、四〇九	二、〇〇〇		
一九二六年	八〇六	一、四五八	二、二〇四		
一九二七年	五〇〇	一、七九七	二、二〇七		
一九二八年	九五三	一、九七四	二、九二七		

釘及び線の一九二四年の輸入は、關稅の無稅ミ需要が多かつた爲め特に大であつた。釘の關稅は一九二六年三月百斤に付一圓九十錢から二圓四十錢に引上げられた。一九二六年は關稅引上の結果輸入は減じて國內生産高は増加した。

線及び釘の消費高合計次の如し。

年次	線	亞鉛鍍金線	計
一九二四年	二、〇四八	一三七、八〇九	一三九、八五七
一九二五年	六七二	二二、〇六六	二二、七三八
一九二六年	一、四一三	三五、三三〇	三六、六四三
一九二七年	一、三三七	一〇、七一一	一二、〇四九
一九二八年	二、四四七	七、〇一七	九、四六四

釘の生産状態次の如し。

地方別	工場	機械數	能力	原料使用高
九州	一	一	四〇、〇〇〇	三二、〇〇〇
大阪	三〇	八一〇	四六、〇〇〇	三八、〇〇〇

釘工場の最大なるものは九州の安田製釘所（安田商事株式会社に屬す）であつて其の生産能力は日本に於ける全製釘能力の殆ん半に達す其の原料は八幡製鐵所供給の製釘材のみを使用す、大阪に於ける其の他の製造業者は主として輸入線に依頼す。

製線能力次の如し

地方	製線工場		能力	
	亜鉛鍍線	鋼線	亜鉛鍍線	鋼線
廣島、名古屋、その他	一〇	—	六、〇〇〇	五、〇〇〇
東京	七	—	一七〇	八、五〇〇
大阪（兵庫？）	五〇	—	一、五〇〇	八三、五〇〇
大 阪	—	—	一〇四、〇〇〇	—
東 京	—	—	—	—
大 阪	一二	三	八五、〇〇〇	四〇、〇〇〇
東 京	一	一五	一五、〇〇〇	三五、〇〇〇

工場合計四〇、生産能力一、五〇萬噸、鋼線七萬五千噸

釘の製造は大抵大阪地方にて行はる、淺野小會製鋼所に於ては自ら製線材料を製造して線を生産す、又鐵筋コンクリート道路用網に使用する線の製造業者もある。

線の消費高は目下年約二十一萬噸であるが其の生産高は工場の大多数が極めて小工場であるが爲め決して安定せるものではない。

日本に於ける主要製釘製線業者次の如し（省略）
日本製鋼業に於て消費された原料次の如し。（單位噸）

原料	一九二九年		其他	合計
	製鉄用	製鋼用		
鐵 鑛 石	一、六一八、三八四	一七四、六六八	—	一、七九三、〇五二
滿 庵 鑛 石	七七、〇七〇	四七、〇四四	—	一三四、一一四
石 灰 石	四二一、五〇八	二四九、〇〇六	二七五	六六〇、七八九
炭 用 炭	—	—	—	—
其他 石 炭	—	—	—	—
骸 炭 用 炭	—	—	—	—
其他 石 炭	—	—	—	—
骸 炭 用 炭	—	—	—	—
其他 石 炭	—	—	—	—
鐵 銑 鐵	—	—	—	—
合 金	—	—	—	—
鐵 滓 及 ダスト 等	—	—	—	—
屑 鐵	—	—	—	—
砂 鐵	—	—	—	—
木 炭	—	—	—	—
鐵 鑛 石	—	—	—	—

世界國別製鋼高次表の如し

(單位噸)

國別	一九二九年	一九二八年	一九二七年
滿俺鑽石	六八、〇八〇	四一、〇二〇	一〇九、一二〇
石 灰 石	四三八、五二六	二〇一、四六〇	六四〇、四六〇
骸炭用炭	1	1	四七四
其他の石炭	二、一一四	一、七九七、八八九	一、七九七、八八九
骸炭	一、一五三、五四一	五六八、二三九	一、五九九、六二一
銑 鐵	1	三六、九〇四	二九、六〇六
合 金	七三	一、〇四一、八六七	一、三二〇、〇五一
鐵滓及ダスト等	二二六、七七一	1	一、〇六九、一三四
屑 鐵	二四、二五一	一、〇三〇、〇四七	一九、二七四
砂 鐵	一、四三九	二六八	一、八四三
木 炭	一、〇四六	七一五	二、七三九
合 家 國	五六、九九二、〇〇〇	五二、三六八、〇〇〇	四四、六五二、〇〇〇
加 奈 陀	一、四九八、〇〇〇	一、二五九、〇〇〇	九二一、〇〇〇
英 國	九、九七七、〇〇〇	八、六六一、〇〇〇	九、二四四、〇〇〇
佛 蘭 西	九、六七七、〇〇〇	九、四九七、〇〇〇	八、二二九、〇〇〇
白 耳 義	四、一七〇、〇〇〇	三、九三三、〇〇〇	三、七〇三、〇〇〇
ルクセンブルク	二、七〇七、〇〇〇	二、五六六、〇〇〇	二、四六九、〇〇〇

伊 太 利	二、一八四、〇〇〇	一、九六二、〇〇〇	一、五九四、〇〇〇
西 班 牙	九六五、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇	六七〇、〇〇〇
瑞 典	六八五、〇〇〇	五七六、〇〇〇	四九八、〇〇〇
獨 逸	一六、四五九、〇〇〇	一四、五一三、〇〇〇	一六、三〇六、〇〇〇
奧 太 利	六五〇、〇〇〇	六三六、〇〇〇	五五九、〇〇〇
ポルチユガル	五四三、〇〇〇	四八五、〇〇〇	四七一、〇〇〇
チエコスロバキヤ	二、一八四、〇〇〇	二、〇三二、〇〇〇	一、八七四、〇〇〇
波 蘭	一、四四二、〇〇〇	一、四三六、〇〇〇	一、二四五、〇〇〇
露 西 亞	四、六七三、〇〇〇	四、二五七、〇〇〇	三、七二〇、〇〇〇
ザール地方	二、二三五、〇〇〇	二、〇七二、〇〇〇	一、八七四、〇〇〇
豫 州	六五七、〇〇〇	四六九、〇〇〇	四五五、〇〇〇
英 領 印 度	五七九、〇〇〇	四一六、〇〇〇	五八四、〇〇〇
日 本	二、二九三、〇〇〇	一、九〇六、〇〇〇	一、六八五、〇〇〇
其 他	三三五、〇〇〇	三三五、〇〇〇	二二三、〇〇〇
合 計	一一〇、七〇五、〇〇〇	一一〇、一六九、〇〇〇	一〇〇、九九七、〇〇〇

(譯者一三宅)

英國の新輸入關稅 (半製品に苛重)

The Iron & Coal Trades Review, April 22, 1932.

本記事に關し譯者附言「關稅諮問委員會の建言せる新關稅は本記事通り四月廿五日より實施された旨四月廿九日の「アイアン・エンド・コール、トレッド・レビュー」誌に報ず、而して鉄鐵には追加せず従來通り從價一割の儘となせるは、三三%の關稅の半製品及び二%關稅の其の他の製品に比し統計上輸入數量の少なき爲めであつた。これが爲め大陸の競争者は今後鉄鐵を襲ふの懼れあり特に目下高爐の吹下ろしを準備しつゝある「サウスウエールズ」地方を襲ふものと見らるゝのみならず既に其の實證の擧げらるゝものがある、故に恐らく斯業者は鉄鐵關稅の引上に關し遠からず諮問委員會に建議するに至るであらうと報ず。

輸入關稅諮問委員會に於ては、既に實施中の一般的一割關稅の追加税に關し政府に建言する所があつた、而して「追加輸入税 No. 1 Order, 1932」なる法律の發布を見るに至つたのである。

委員會の一般計畫は、完全なる製品には同率の追加税を課し特別の考慮を要する事情の生ずる或る品物に對しては比較的低率の、及び奢侈品或は半奢侈品に對しては比較的高率の追加税を賦課せんとするものである。委員會に於ては此の稅率が或る工業の急場に充分應し得るものとは認めないが然し若し輸入關稅法の一般計畫が相當の注意を以て且關稅管理に過重の重荷を負はすことなく實施せらるゝならば此の稅率を取らねばならぬ云ふ意見を有して居る、保護の一般方略に就て見るに、委員會に於ては、或る一定期間に對し殆んど禁止的のものに企圖された從價五〇%の變則的輸入關稅論は之を斥け又三三%の關稅に就ては特殊の

事情の下に在る選擇品に適用し極めて小範圍の工業のみを庇護すべきものであることを指摘して居る。

是等の要素を考慮して委員會は大部分の製品に對し一〇%の追加税即ち合計二〇%の關稅を建言し尙比較的低率の關稅が適當と思はるゝ其の他の少數製品に對しては合計一五%を又奢侈品及び半奢侈品に對しては合計二五%或は三〇%の關稅を建言したのである。

二〇%の關稅を賦課せんとするものには次の如きものを含む。

或種の金屬器具、多數の鐵鋼材、非鐵金屬製品、及物類、機械器具、(農業用機械器具を除く)電機具、一五%の關稅を賦課せんとするものには次の如きものを含む。農業用機械器具、金屬扉、窓枠、浴槽等の如き建築材料及び機械調帶。

二三の場合に於て委員會は合計三三%の比較的高率な關稅を建言して居るがこは主として同様な品物に對する現行關稅を調和せしめんが爲めである。前述の通り委員會に於ては、一切の機械に對し一般的に一〇%の追加税即ち合計二〇%の關稅を建言した、然しながら彼等は、現在國內にて得られざる極めて特殊な機械のあることを認め斯の如き機械に對しては適切な場合に於て無稅に取扱ひ得るの準備を定め置かんことを進言して居る。

委員會は鐵鋼に關し次の如く指摘して居る。

「鐵鋼は多數工業の用材たるのこ又半製品の方面に於て目下熾烈な競争に遭遇しつゝあるのこで此れに對

する關稅の賦課には特別の困難がある」云。抑も斯業に對する誤らざる關稅の處置問題は深甚の調査を要するものであるが委員會に於ては次のやうに言つて居る「先づ第一に鐵鋼業の繁榮を保持することは吾人の經濟的進展に國家安全に對し必須缺くべからざる要素である次に極めて低廉な價格で法外な輸入が従來行はれつゝあると同時に國內のストックは夥しき高に上つて居る」云。

斯の如き事情に在るが爲め委員會に於ては永久的の性質を帯びる計畫を提供し得る迄、輸入防遏の目的を以て半製品に對し最少三ヶ月の期間 23% の追加稅即ち合計 33% の關稅を賦課せんことを進言したのである。

異常輸入條例に依り商務省から發布した法令に依つて賦課された關稅は諮問委員會の進言に依る新關稅の賦課と共に自然廢止せらるゝものである。新關稅は四月廿五日月曜の夜半から實施せらるゝことになつて居る。鐵鋼機械其他の品物に對する新關稅率の詳細を次に掲ぐ。

從價 33% の關稅を賦課せらるべき品目次の如し。

- (一) 鏡鐵及滿俺鐵
- (二) 次の品目の鐵鋼（銑鐵を除き合金鋼を含む）
 - (イ) 鋼塊（木炭銑から製造されたものを除く）
 - (ロ) ブルーム、ビレット、及びスラブ（木炭を以てする攪鍊爐に依つて木炭銑から生産された鍊鐵

を除く）

- (ハ) シートバー及びティンバー
- (ニ) バー、ロッド、アングル、セーブ及び各種の形物（組立てられたる否かを問はず）
- (ホ) 鍛造物（ドロップフォージングを含む）（粗又は加工）
- (ヘ) 鑄物（粗又は加工）重さ一ハンドレッドウエート以上のもの
- (ト) 蹄 鐵
- (チ) ガーダー、ビーム、ジョイスト、及びピラーズ（組立てられたる否かを問はず）
- (リ) 各種のフープ及びストリップ
- (ヌ) 各種の厚板、薄板

右は同法律第二條に規定するものであつて以上列擧せる品目に對する追加稅は本法の施行日より三ヶ月を経過せる後は之を廢止することになつて居る、故に若し別に法律の制定されざる限り是等の鋼材に對する關稅は一〇%に復歸するものである「三ヶ月」の制限は以下掲ぐる何づれの鋼材にも適用されない。

次の鐵鋼材には從價二〇%の關稅が賦課せられる筈である。

- (イ) チューブ、パイプ、及び各種のチューブ附屬品
- (ロ) 各種の鐵道及び軌道建設材料

尙各種の品物に對する關稅次の如し

- (ハ) 發條及び發條鋼
 - (ニ) ワイヤー、ワイヤーネツチング、ワイヤーネル、ケーブル及びロープ（被覆電信電話線を除く）
 - (ホ) スクリウ、釘、鋏、螺釘及びスパイク
 - (ヘ) リベット及び座金
 - (ト) ボールト、ナット
 - (チ) 錨、小錨 (grapnel) 及び附屬品、鎖及び船綱 (ships' cable)
- 一、鐵製又は鋼製（錫鍍金銀を含む）の鍋釜類（浴槽を除く） 二〇%
- 一、鐵又は鋼の浴槽 一五%
- 一、扉、窓枠及び開障子 (Casement) 一五%
- 一、ストーブ、火格子、家庭割烹用又は加熱用竈及び部分品並附屬品 二〇%
- 一、一部又は全部アルミニウム、銅、鉛、ニッケル、錫、亞鉛から製せられたもの及び是等の金屬の一を含む合金から製せられたもの並に其の部分品（シート、ストリップ、ロッド、プレート、インゴット、棒、ワイヤー及びチューブ、機械器具、科學及び醫療器具及び部分品等を除く） 二〇%
- 一、全部又は主として金屬から製せられた家具 一〇%

- 一、刃物類 一〇%
- 一、錠 (lock) 南京錠 (padlocks) 鍵 (keys) ボールト (bolts) 鎖 (latches) 留釘 (hasps) 蝶番 (hinges) 一〇%
- 一、熊手 (forks) シヤベル (shovels) 鋤 (spades) 大鎌 (scythes) 小鎌 (sickles) 及び農具並部分品 一五%
- 一、其の他の器具並部分品 一〇%
- 一、電線及びケーブル（被覆せるもの）電氣カーボン、電燈用具及び取付品電池及び蓄電池、電鈴装置 一〇%
- 一、犁 (ploughs) 播種器 (planters & seeders) 刈禾機 (reapers) 縛機 (binders) 羊毛大剪刀及び剪毛機 (sheep shearers & clipping machine) 打穀機 (threshers) 農業用牽引車及び其の他農具並部分品 一五%
- 一、其の他一切の機械及び部分品（球入軸承、轉子軸承及び部分品機械調帶を除く） 二〇%
- 一、球入軸承、轉子軸承及び部分品 三三⅓%
- 一、機械調帶（コンベヤー及びエレベーターバンドを含む） 一五%
- 一、次に掲ぐる化學製品 二〇%

硝酸、酸化アルミニウム（水化又は無水の）但し abrasives, Ammonia Liquor, sulphate of ammonia; Nitrate of ammonia; Sodium nitrate; sodium chloride; tin oxide; Zinc oxide 等を含みず。

（譯者一三宅）

（昭和七年六月十二日著在ロンドン松山商務參事官電報）

關稅諮問委員は最近大陸品銑鐵相場崩落の結果、英國品を壓迫し國內に休爐續出の懼れあるを以て、應急的に銑鐵（木炭銑鐵を除く）輸入税を三三%引上を勸奨したるが、同時に從來附加税の適用なかりし Spring steel 及び「ハンドレッドウェイト」以下の castings にも三三%税適用、木炭鍊鐵其の他は附加税を廢止し、一般一割税に引下を勸奨し、尙左記品目を緊急必要上無税品目に加ふるべしとなり、右何れも六月十四日より實施の旨發令せられたり。

原料金剛砂、水銀、粗製酒石、酒石酸鹽、ケルプ（イヲデン原料）。

五ヶ年計畫に依る露西亞の鐵鋼及石炭生産高に就て（不満足なる結果）

The Iron & Coal Trades Review Feb. 5, 1932.

鐵、石炭は勞農露西亞當局が歐洲及び亞米利加の産業の生産高に對し「對等又は凌駕」の目的を以て計

畫した産業五ヶ年計畫の基礎を成すものである。計畫の最初三年間中に於て三十億ルーブル以上の資本を石炭及び冶金工業に投下した。

計畫實行の最初二ヶ年間即ち一九二九年と一九三〇年に於ては可成り良好な結果を收めたものである。石炭の生産高は一九二八年の三五、七〇〇、〇〇〇噸から一九三〇年には五六、〇〇〇、〇〇〇噸に増加し、銑鐵及び鋼の生産高は同じく一九二八年の三、三〇〇、〇〇〇噸及び四、〇〇〇、〇〇〇噸から一九三〇年には五、〇〇〇、〇〇〇噸及び五、五〇〇、〇〇〇噸に増加した。

ソヴェエトの生産高を戦前のそれと比較し見るに、戦前の増進率は現在に優つて居る、戦争直前十五ヶ年間に於てドネツ炭田の生産高は三倍半に増大し一九一三年の産炭高二五、〇〇〇、〇〇〇噸に達した。一九三一年の生産高は三六、〇〇〇、〇〇〇噸であつた。南露の銑鐵生産高は戦前十年間に二倍したが一九一三年から一九三一年に至る十八年間に於ける全露西亞の生産高は四、二〇〇、〇〇〇噸が四、七〇〇、〇〇〇噸に増大したに過ぎない。

然しながらソヴェエトは、石炭、鐵鋼の生産増加に努めたもので一九三一年初頭に於ては生産高は一層増大する希望に満ちて居つた。

昨年ソヴェエトは、炭鑛業並鐵鋼工場の擴張に多額の資本を投下し生産プログラムを擴大し、石炭八千六百五十萬噸、銑鐵八百萬噸、鋼八百八十萬噸の生産計畫（一九三一年）を立てたが実績は失敗に終り、石

炭は五千二百七十萬噸、銑鐵は四百七十萬噸を生産したに過ぎない、此の失敗は其の他のソヴェエト産業に著しき影響を與へ、特に金屬作業工業に對して然りであつた。失敗の原因に數多あるが輸送の無能は其の一原因を成したものである。或る時は利用し得べき數多の貨車を残したが、此れに積込べき貨物なく或る時は貨物あつて貨車の用意なき状態を現出した、又移動労働者に就て不平があつた“Tyum”逃亡者なる特殊語は斯くの如き掠鳥的移動者を敘景する爲めに創作されたものである。炭坑に稼ぐ労働者は時々一團となり逃げて出すところがある、要するに一般的不取締に歸着するもので斯の如き阻碍が計畫の維持を失敗に導いたのであつた。

石 炭

目下露西亞に於ては亞細亞の炭田開發に注意を向けつゝありきは云へドネツツ盆地は依然として同國炭鑛業の中心地を成すものである、昨年全露の産炭高五二、七〇〇、〇〇〇噸の内三六、〇〇〇、〇〇〇噸はドネツツ盆地から生産されたのである、次はクズネツツ盆地で其の産炭高五、五〇〇、〇〇〇噸、第三位はウラルの炭田で三百萬噸を生産したが、かの有名なカラガンダ炭田の生産高は五十萬噸に過ぎなかつた。

クズネツツ炭田はウラルの東方約千三百哩の西比利亞に在つて、附近に鐵鑛石を産しない、故に石炭はウラル地方の製鐵所に運ばれて居る。カラガンダ炭田 (Kareganda) はウラル工業中心地を距る數百哩中央亞細亞のキルギイス (Kirghis) 草原に在つてクズネツツ炭田から餘り遠くない。ソヴェエト地質學者はカラガンダ

炭田の炭量は頗る豊富なりと云つて居る。今の町は約十萬人の人口を有してゐるがこは十八ヶ月以内に出現したものである。住民の多くは住家を持たない、然し彼等の爲めにキネマ劇場等の設備がある。

採炭は大いに機械化されて居るに傳へらる、昨年ドネツツ盆地の産炭高の七割四分は採炭機を以て生産された、然し同炭田に於ける坑夫の數は一九三〇年の一七七、〇〇〇人から一九三二年十一月一日には三六八、〇〇〇人に増加した。一九三二年一月十一日發行の *Economicheskaya Zhizn* 誌の報ずる所に依れば一九三〇年に於ける一人當り月産炭高は一四・八噸であつたが一九三二年には一三・五噸に減じた。

ソヴェエト政府の一九三二年産炭計畫は九千萬噸で更に八一〇、〇〇〇、〇〇〇ルーブルの資本を炭鑛業に投下する筈である。クズネツツカラガンダ炭田の開發に努力するものを見らる。本年最初三週間の結果から見ればあまり良好ではない日産高は二十萬噸を越へてゐない(露西亞の年作業日數は三百日に足らない)ソヴェエト當局は失敗に屈せず、次の五ヶ年内には年二億五千萬噸の石炭を生産するに努力する旨を言明してゐる。

銑 鐵 鋼

石炭と木材の不足は一九三二年に於ける鐵鋼業不成功の主因を成すものであつたが、鐵道の不満足状態も其の一原因に數へねばならぬ、又或る場合作業の中止は實に馬鹿々々しい理由に基くものがあつた、例へば昨年三月十五基の平爐が操業を中止したのは耐火煉瓦の不足に原因したものであつて或る一工場に於ては四

基の平爐を修繕する爲め一基の完全なる平爐を解體した程煉瓦の不足を告げたのであつた。(ソヴィエト雑誌 Technika 一九三一年十二月二十九日参照)

ソヴィエト産業界の一大問題は一九三二年に於て鉄鐵の生産高を一千萬噸に増加することである、本年中斯業には更に多額の資本を投下する筈になつて居る、新に鑄鐵爐二四基、平爐六四基、電氣爐一二基、分塊工場七、薄板工場三一を建設する計畫である。從來南露西亞は鉄鐵業の中心地であつて昨年の全生産高中七割四分は同地方より生産されたものであつた。共産黨は漸次其の作業を東部工場へ即ちウラル及びシベリアに移動せしむる方針を取つて居るが其の見積に依れば、將來南露の生産高は全生産高の六割位に止まり一方ウラルの生産高は増加して全生産高の一割八分乃至二割五分になり又シベリアの生産高は〇・二乃至七・三%となるであらう(“Econonicheskaya Zhizn”, Jan. 4, 1932 参照)

本年最初數週間の実績は又石炭同様あまり良好ではなく其の日産額は約一萬六千噸に過ぎない、然しソヴィエト當局は五ヶ年以内には年産額を二千二百萬噸に増加するやうに言つて居る。

斯業の前途は豫測し難い、一月のソヴィエト諸雜誌には、石炭及び鐵鋼不足の爲め機械工場に於ては部分的作業を行つて居る旨の記事を満載してゐる、機械工場に働く労働者は、炭坑並に鐵鋼工場に働く同胞に對し屢々生産増加を歎願して居る有様である、結局ソヴィエトは恐らく石炭・鐵鋼の生産高を幾分増加するに至るであらうが然しこは或る他の産業を犠牲にして達成せらるゝであらう。(譯者三宅)

合衆國鐵鋼業の賃銀引下及び此れに伴ふ生産高並價格の變動關係に就て

「スチール」五月十六日所載

合衆國に於ける殆んど總べての主要鐵鋼會社に於ては「ユ・エス・スチール、コーポレーション」の例に倣ひ五月十五日より賃銀及び俸給を約一割五分引下げた。

今や賃銀、價格の双方共奔落せる以上若し一九二一―二二年に於ける斯業の經驗が繰り返すものこそれば茲五六ヶ月以内には必ずや鋼塊生産高は増加し始め又鋼價は昇騰傾向を取るものを見らる而して賃銀率は十二ヶ月以内には少くも一部原狀に復歸するであらう。

目下生産、賃銀及び價格の三要素は鋼の需要が復活し始め而して間もなく價格も賃銀も原狀に復した直前の一九二一年に於けると同様の事情を現出して居るのである。

鋼價は一年以上に亘り一九二一年に於ける最低ポイント以下の率に奔落し居るが爲め、一九三一年十月一日の一割引下の後を承け此の五月十五日より更に一割五分の賃銀引下が發表された、然しながら今次の引下は一九二一年の賃銀引下當時程價格に低落影響を及ぼさないであらう。一九二一年に於て斯業は三度賃銀を引下げたが其の都度鋼價は下落した、一九二一年に於ける三度の賃銀切下歩合は二六%に達したが、今回二度の引下率は二四%に達した。

一九二一年五月の第一次賃銀引下に伴ひ鐵鋼の一ヶ月間に於ける綜合價格は屯一弗の低落を示し七月の第二次引下に伴ひ又二弗二〇仙の低落を、續いて八月の第三次引下後には更に六〇仙の低落を示した、斯の如く價格は賃銀調整の期間中安定傾向を保持せなかつた。而して賃銀の引下は合計一時間當り一〇仙に達し一方綜合價格は一屯當り八弗の低落を示したのであつた。

昨年十月の賃銀一割引下後價格は低落傾向を續けた。三月と四月に微弱な反撥を現はしたが、然し現在の綜合價格は昨年十月一日のレベルより屯一弗の低落を示して居る。

一九二一年七月の第二次賃銀切下直後に於て鋼塊生産高は増加し始めた、又同年八月の第三次切下も亦生産高に對し新來の刺戟を與へたやうであつた。(切下當時價格は依然として尙底値に在つた)。

生産高は九月から十月迄に於て三八%の増加を示し爾來十二月の季節的減退を除き一九二二年の夏まで増大傾向を辿つた。

價格は工場の生産増大に伴ひ一九二二年二月から即ち第三次賃銀切下後五ヶ月にして強氣に轉じ、爾來上廻りを續け而して賃銀の二割引上げが行はれた九月に至つて最高點に達したのであつた。

一九二一年及び其の他の不況期間に於ける經驗から引證し得べき唯一の事實は「賃銀を引上げ得る以前に於て業務は必ず數量を増進し而して若干の利益を齎らすこと」である故に今次の賃銀引下は業務を促進する一時的の便法であつて結局は勞資双方の利益に歸着するものと見てよい。

一九二一年に於ける三度の賃銀引下率は合計二六%に又今次の二度の引下率は二三・四%に達した、然しながら第二次引下後に於ける十時間作業職工の現在一時間當り賃銀率は三三仙七であるが一九二一年に於ける第三次引下後の同種職工の賃銀率は三〇仙であつた。

一日十二時間作業制度は一九二三年八月に廢止せられ一日八時間制度に改められて一時間當り五〇仙の賃銀が支拂はれた。而して右の賃銀率は一九三一年十月一日迄實施せられ同日四五仙に引下げられた。今次の一割五分引下に依り同様職工の一時間當り賃銀率は三六仙四分の三となる。故に八時間制度の勞働者は一日二弗九四仙即ち一九二一年の最低ポイントに於ける十時間作業に於て受けた賃銀より僅に六仙丈け少ない賃銀を貰ふわけである。今次の賃銀一割五分引下に依つて鋼製品の生産費に少くも屯六〇仙の節約を齎らすであらう此の數字は現在の低作業率に基き、實際作業の衝に當る製鋼作業者が内輪に見積つたものである。

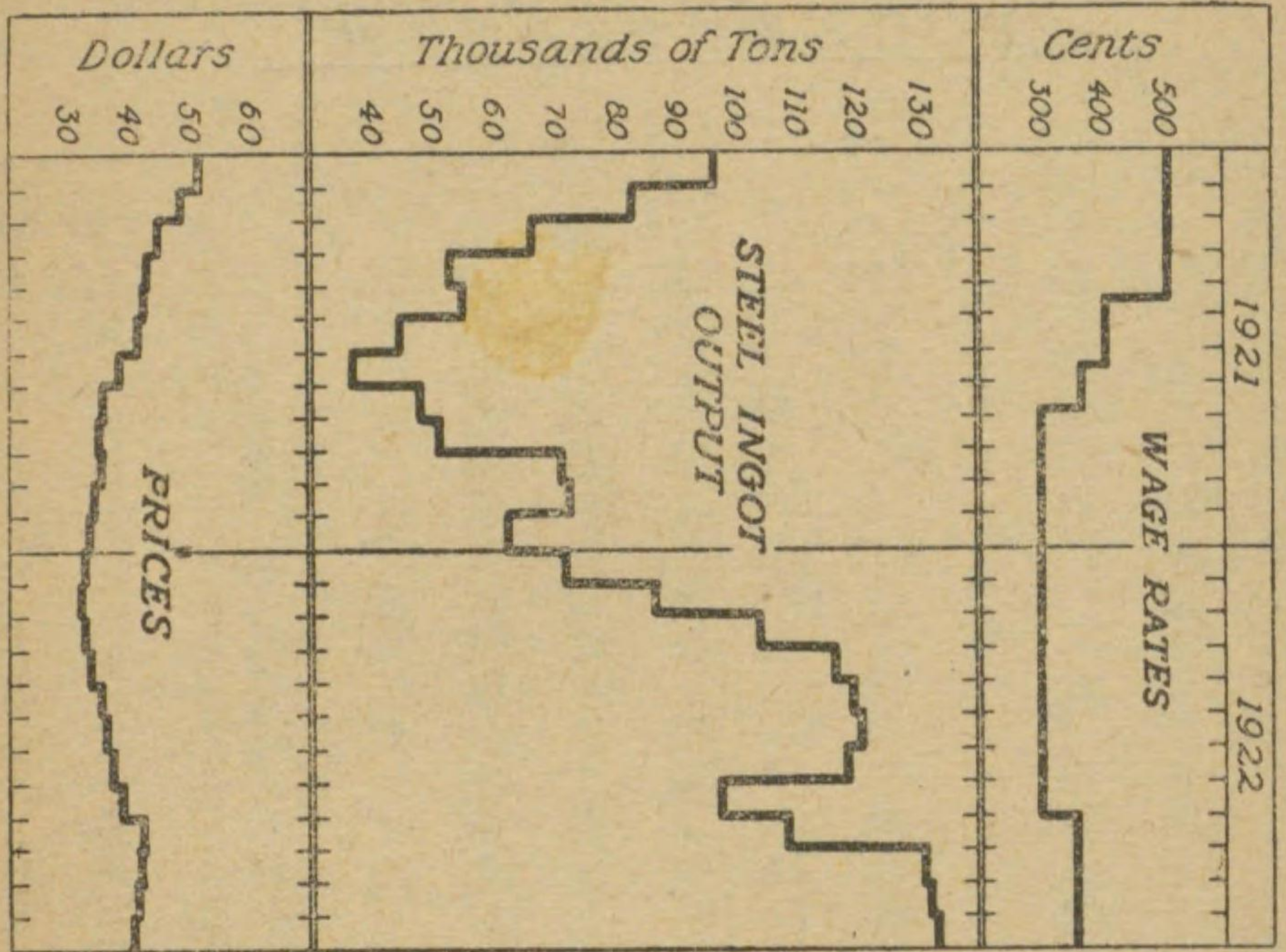
一九三二年一月四日刊行本誌一三二頁に記載せる通り原料から鋼塊一屯を生産する迄の直接勞力は一人約四時間一四を要し、而して當時の賃銀率を以てすれば勞力費は合計約一弗六四仙を計上す、今回の賃銀一割五分引下に依り勞力費は二四仙六を低減することとなるが、此の數字は前週或る一大獨立製鋼會社の發表した節約高と合致して居る。

右會社の鋼塊からシートバー又はピレットを造る迄の勞力費は屯當り三五仙であつて、賃銀一割五分の引下に依り五仙二五を節約することとなる。又ピレットを普通棒鋼に壓延する勞力費は屯二弗であつて此の場

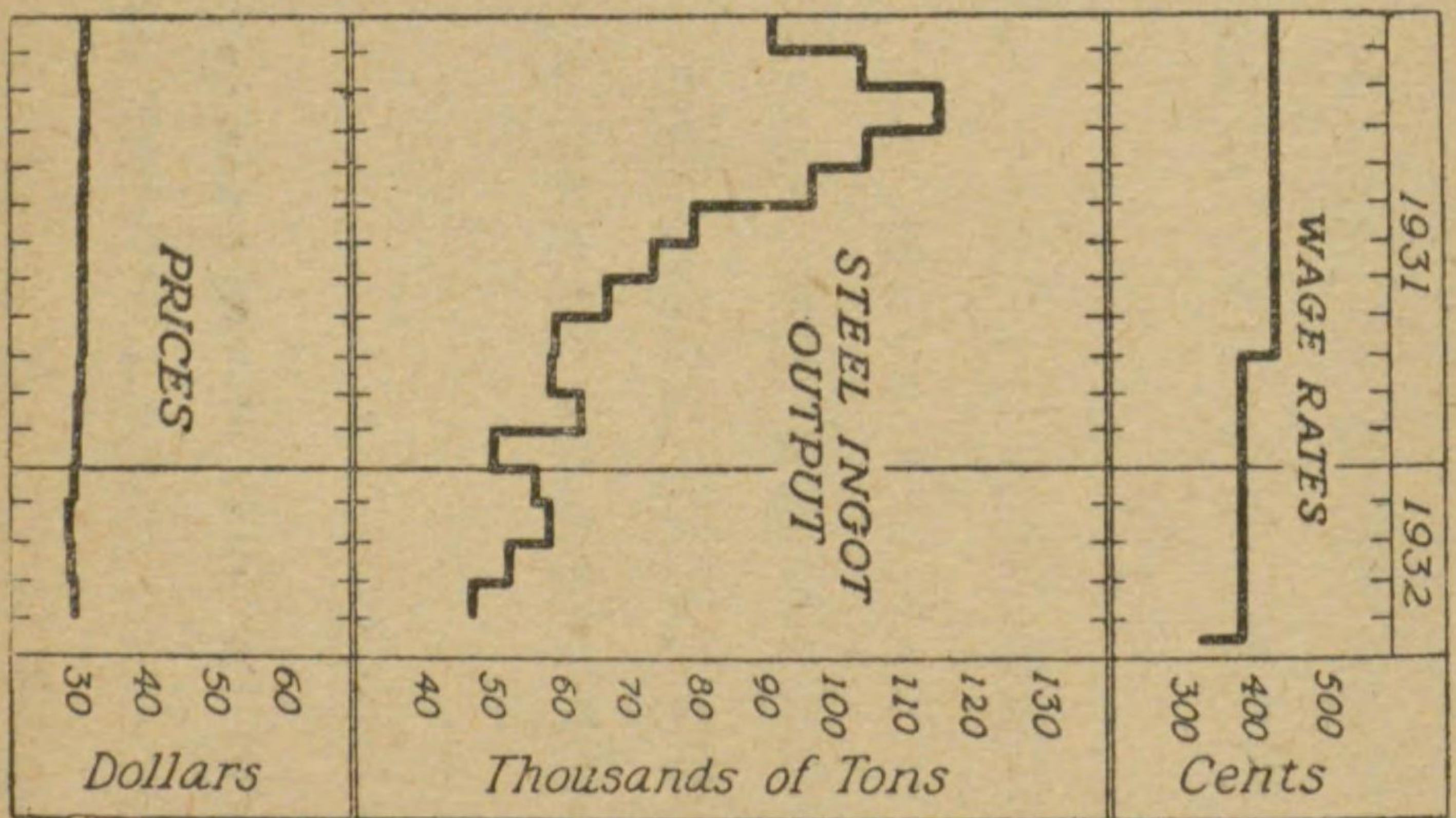
合の節約高は三〇仙で此の二種目と前記の節約高二四仙六を合せ原料から棒鋼迄の勞力費の節約高は合計五九仙八三なる。一體鋼材を製造する場合の費用は設備と作業の如何で製品のみならず工場に依つて大差あるものである、特に之等の勞力費が週毎に極度の變動を示さんとする場合に於て然りである。節約高の見積は生産高が少しも低減しない時の假定に基くものであつて、若し低減する場合は一單位の勞力費は増加するものである。

昨年「ユ・エス・スチール・コーポレーション」に於ては八月に俸給を引下げ十月に賃銀を切下げたにも拘らず同年の給料支拂高は一九二九年よりも屯當り三弗三八仙を増加した。即ち生産高の減少に伴ひ費用の増加を示したのであつた。(譯者 三宅)

賃銀引下と生産高並價格の變動



TREND of steel wage rates, daily output of steel ingots, and steel price composite, 1921-22 and 1931-32. Chart at the left shows the reaction of prices and output following wage reductions 11 years ago; chart at the right, the parallel movement of these three factors so far on the downward slide. In 1921 production stepped upward immediately following the second and third wage reductions. This gave volume and lifted prices. Within 12 months wages were restored 20 per cent. The effect of wage reductions on current prices should be less drastic than in 1921, because they already have been deflated more than in that year.



白耳義の鐵鋼業

——(一九三〇年中の設備、原料消費高其の他に就て詳述せるもの)——
The Iron and Coal Trades Review, April 29, 1932

一、銻 鑛 爐

一九三〇年白耳義には銻鐵を生産する工場十六を數へ同年末に於ける操業高爐數は五五基で一年前より四基を減じた。高爐に備役せる職工數は七、一四四人であつた。高爐の骸炭消費高は四、二〇九、九五〇噸で内三、三六六、六五〇噸は一部輸入炭を以て國內にて生産されたものである。高爐の鐵鑛石消費高は九、〇一九、二〇〇噸で内七、四三一、七四〇噸は佛蘭西から一、一四六、三六〇噸はルクセンブルクから二九二一八〇噸は瑞典から二五、五二〇噸は西班牙及び北アフリカから輸入したもので一二三、四〇〇噸は自國産のものである。

滿俺鑛石の消費高は一二九、四四〇噸に達し内六四、八四〇噸は英領印度から二八、六三〇噸はアフリカから一七、七六〇噸は露西亞から四、一二〇噸はブラデルから輸入したもので、屑、鐵滓等の大部分は國內にて購入したものであつた。

一九三〇年の銻鐵生産高は前年の四、〇四〇、五三〇噸に對し三、三六五、二四〇噸に減じた其の内譯次

含 磷 鑄 物 銻	一二六、八四〇噸
ヘマタイト鑄物銻	五七、三八〇
可 鍛 銻	九三、二九〇
塩 基 性 銻	三、〇六三、九三〇
特 殊 銻	二三、八〇〇
二、製 鋼 所	

の如し。

白耳義の製鋼所は之を次の三種に區別す。

- (一) 自家製の銻鐵を以て生産する製鋼所
- (二) 主として鋼塊を生産し銻鑛工場を有せざる製鋼所
- (三) 銻鑛工場を有せず専ら鑄物を生産する鋼鑄物工場

(一)に屬する製鋼所一四を數へ其の設備次の如し

混銻爐一九、キユボラ二四 塩基性轉爐(一二乃至二五噸の能力を有するもの)五二 同じく小

型轉爐(能力一屯半乃至二屯)四 平爐(能力七乃至二五屯)二〇 電氣爐四

其の備役職工數五、二八四人 自國産銻鐵の消費高三、一一八、三一〇噸、輸入銻鐵の消費高一二〇、七

四〇噸、鑛石の消費高一、六二〇噸、屑の消費高二九六、五〇〇噸であつた。又其の燃料の消費高に就て見るに、骸炭五二、六四〇噸、石炭六一、二三〇噸、鎔鑛爐瓦斯五一六、二六〇、〇〇〇立方米、骸炭爐瓦斯八八、一九〇、〇〇〇立方米を消費した。尙電流の消費高は合計七一、三七〇、〇〇〇キロワット時に達した。其の製鋼高次の如し。

塩基性轉爐鋼塊

二、八八五、五四〇噸

平爐鋼塊

二五二、三三〇

電氣爐鋼塊

一五、八八〇

是等の製鋼所に於ては鋼塊の外一六、四三〇噸の鋼鑄物をも生産した。

(二)に屬するもの三 其の備役職工數六五九人設備次の如し

キユボラ一

小型轉爐二 平爐九

其の銑鐵の消費高は一六、八〇〇噸で大部分は外國銑であつた、屑の消費高は九二、二二〇噸に達したが鑛石は使用する所なかつた。生産高は一一五、六八〇噸の鋼塊三、三一〇噸の鋼鑄物三であつた。

(三)に屬する製鐵所の一九三〇年中に操業せるもの一七工場其の設備次の如し

キユボラ三三

酸性轉爐四

小型轉爐四三

平爐七

電氣爐三

其の備役職工數は五、五一五人、銑鐵消費高四三、七五〇噸(大部分輸入銑)、鑛石消費高八五〇噸、屑の

消費高五八、〇一〇噸に達し而して六五、〇〇〇噸の鋼鑄物を生産した。

斯の如く一九三〇年に於ける白耳義の製鋼高は合計三、二六九、四三〇噸(鋼塊)三、八四、七四〇噸(鋼鑄物)に達した。鋼塊生産高の内二、八八六、〇〇〇噸は轉爐鋼三六八、〇〇〇噸は平爐鋼及び約一六、〇〇〇噸は電氣鋼であつた。

三、鍊鐵

一九三〇年中鍊鐵を生産せる工場は僅に三工場で全部 Indiana 州に在つて其の備役職工數は一五九人、攪鍊爐數十二基(一九一三年は一〇基)であつた。其の銑鐵消費高は一三、一〇〇噸(輸入銑の六分の一)石炭消費高は八、八六〇噸(殆んど全部自國産のもの)で鍊鐵の生産高は一〇、四七〇噸であつた。

四、壓延工場

白耳義に於ける壓延工場を次の二種に分つ

(一) 自家製の鋼を使用する工場

(二) 外部より半製品を購入する工場

(一)に屬するもの一九三〇年に於て一九工場を數へ其の備役職工數一六、四〇六人即ち全壓延工場職工數の三分の二以上に達した。其の設備次の如し

分塊機

一五台

其の生産高次の如し

形鋼壓延機	四七台
線材壓延機	五台
鋼板壓延機	二〇台

半製品

五二八、三二〇噸

鋼製品

一、二九四、八六〇噸

鐵製品

一四、七二〇噸

(二)に屬する工場二五を數へ其の設備次の如し

形鋼壓延機

一九台

鋼板壓延機

六六台

其の消費高次の如し

ブルーム及びビレット

一三八、〇一〇噸(内半數以上は輸入品)

シートバー及びフラットビレット

二二六、七〇〇

アイアンフォーゼンダ

九、八三〇

屑

一二三、一七〇

其の生産高次の如し

鋼製品

三〇五、九〇〇噸

鐵製品

一〇八、〇一〇

一九三〇年中の備役職工數は合計七、三一七人であつた。

本邦石炭埋藏量の調査

商工省鑛山局に於ては昭和四年度より同六年度に至る三ヶ年間に亘り本邦内地に於ける石炭埋藏量の調査中なりしが今般右調査を輯録大成したる「石炭埋藏量調査概要」を鑛山局より發表せり。其の中より埋藏炭量に就き拔萃せば次の如し。

埋藏炭量——炭層の厚さは純炭部概して二尺以上、及び一尺以上二尺未満のもの、二種に分類し時には一尺未満のものを加へたり、又炭層の深度は箇所により異なるも概して疎水準以上、地下一、〇〇〇尺迄、地下一、〇〇〇尺—二、〇〇〇尺間、及び地下二、〇〇〇尺—四、〇〇〇尺間の四段に分類し算出せるも其の内容大體左の如し。

1、純炭部一尺以上の炭層に付ては大體最近疎水準以下四、〇〇〇尺迄です。

口、純炭部一尺未満の炭層に付ては從來稼行せるもの又然らざるも將來稼行の見込あるものは最近疎水
準以下一、〇〇〇尺迄ミシ之を疎水準以上地下五〇〇尺迄並に地下五〇〇尺一、〇〇〇尺間に分つ
但し特別なる場合には深度の限界を増減せり。

炭量は豫め鑛區含炭地又は炭鑛毎に炭層別ミシ左の三種に類別して理論的炭量を算出せり。

イ、現存炭量 稼行炭鑛の採掘區域内は勿論未着手鑛區又は未稼行部分なるも試錐の成績又は確實な
る磐厚の存在等によりて炭層の状態判明せる區域内の炭量

ロ、推定炭量 地質構造の關係上炭層の存在が疑なく且つ露頭又は接續せる炭層の現状により其の廣
表、厚薄を略推定し得べきもの、即ち前項に掲ぐるものに比し稍正確を缺くもの

ハ、豫想炭量 炭層の状態不明なるも附近に存在せる炭層の状況より其の存在を想像し得べきもの

實收炭量 理論炭量に對する實收炭量は各炭田の地質、炭層及び現在の技術其の他の條件を考慮し現存炭
量に對しては各炭鑛別の實收率により計算せしものを炭田別に示し、推定炭量に對しては之を一括し各地方
別に實收割合を見込み概算し之を集計せり。

本邦内地各地に分布する石炭及び亞炭田に於て地下に埋藏すべき理論炭量並に既採掘炭量、不可掘炭量及
び實收炭量を一括して示せば左の如し (單位千噸)

一、既採掘炭量	埋藏炭量	實收炭量
		一、〇二五、〇〇〇

二、不可掘炭量	一、〇五〇、〇〇〇
三、未採掘炭量	一六、六九一、〇〇〇
現存炭量	五、九六〇、〇〇〇
推定炭量	四、〇四六、〇〇〇
豫想炭量	六、六八五、〇〇〇

六、四八二、〇〇〇	四、二一六、〇〇〇	二、二六六、〇〇〇
-----------	-----------	-----------

次に以上埋藏炭量を炭種別に述べれば大體無煙炭(煽石を含む)七億二千萬噸、瀝青炭百五十五億噸、亞
炭四億七千萬噸なるが之を炭量種別に示せば左の如し (單位千噸)

炭種	無煙炭及煽石	瀝青炭	亞炭	合計
既採掘炭量	二九、八八八	九八四、一三〇	六、九六五	一、〇二〇、九八三
不可掘炭量	三九、三三二	九九一、六七三	一八、八五九	一、〇四九、八六四
未採掘炭量	七一八、七八二	一五、四九九、〇九一	四七三、四七〇	一六、六九一、三三三
現存炭量	四五四、七四五	五、四三九、九〇五	六五、七六五	五、九六〇、四一五
推定炭量	一三一、九四四	三、七八〇、九七五	一三二、五九二	四、〇四五、五〇一
豫想炭量	一三二、〇九三	六、二七八、二一一	二七五、一一三	六、六八五、四一七

(一)北海道 本道の石炭は全部瀝青炭にして其の炭量左の如し (單位千噸)

一、既採掘炭量	埋藏炭量	實收炭量
		一、三三二、二八一

(二)東北地方 本地方には双葉、石城の兩炭田(福島)及び青森、秋田、岩手、山形縣下の諸炭田存在し是等炭田の炭量を集計すれば左の如し (單位千噸)

一、既探掘炭量	一七八、二六九	實收炭量	二、三三三、〇〇〇
二、不可掘炭量	八、〇〇九、〇八二		一、四三〇、〇〇〇
三、未探掘炭量	二、〇三二、八二五		八八三、〇〇〇
現存炭量	一、七六六、六九九		
推定炭量	四、二〇九、五五八		
豫想炭量			

(三)關東及び中部地方 本地方には茨城、長野、新潟、福井縣下の諸炭田存在し、其の炭量を集計すれば左の如し (單位千噸)

一、既探掘炭量	五七、八七五	埋藏炭量	六四、六七五
二、不可掘炭量	九二四、八五九		
三、未探掘炭量	一五一、七二四		
現存炭量	一五七、六七三		
推定炭量	六一五、四六二		
豫想炭量			

一、既探掘炭量	七、八七一	實收炭量	一九、二八一
二、不可掘炭量	二九一、三五六		
三、未探掘炭量	五六、八七六		
現存炭量	一三一、二二八		
推定炭量	一〇三、二五二		
豫想炭量			

(四)近畿、中國及び四國地方 本地方には山口縣下の宇部及び大嶺兩炭田を始め京都、三重、奈良、和歌山、島根、岡山、及び香川(小豆島)の各府縣下に小炭田存在し其の炭量を集計すれば左の如し (單位千噸)

一、既探掘炭量	九三、一一四	埋藏炭量	六四、二〇七
二、不可掘炭量	八六五、八三五		
三、未探掘炭量	四八六、九四九		
現存炭量	二〇一、五五五		
推定炭量	一七七、三三二		
豫想炭量			

(五)九州の炭田、附沖繩縣下の炭田―筑豊炭田外十二炭田を集計すれば左の如し (單位千噸)

一、既探掘炭量	六九三、八七七	埋藏炭量	七三三、五七五
二、不可掘炭量			

三、未探掘炭量	六、二二六、七四一
現存炭量	三、一六六、二七六
推定炭量	一、六五五、七六四
豫想炭量	一、三〇四、七〇一
實收炭量	三、三二六、〇〇〇
	二、二四四、〇〇〇
	一、〇七二、〇〇〇

(六) 亞炭田 最上北村山(山形) 宮城(宮城) 東春日井及び愛知(愛知) 並に土岐(岐阜) 等の亞炭量を初めし東北、關東、中部及び近畿地方に分布する諸亞炭田の炭量を集計すれば左の如し (單位千噸)

一、既探掘炭量	一八、八五九	埋藏炭量	六、九六五
二、不可掘炭量	四七三、四六〇	實收炭量	九一、〇〇〇
三、未探掘炭量	六五、七六五		三八、〇〇〇
現存炭量	一三二、五八二		五三、〇〇〇
推定炭量	二七五、一一三		
豫想炭量			

以上地方別炭田を更に細別すれば左表の如し (單位千噸) (地圖参照)

炭田別	既探掘炭量	不可掘炭量	埋藏炭量			合計	現存炭量に對する實收炭量
			現存炭量	推定炭量	豫想炭量		
天	—	七、〇一八	五、四七四	三八、二一六	一八、〇二〇	四六八、〇〇〇	三八、六〇五

一、北海道の炭田

二、東北地方の炭田

中川	七	—	殘	二、一〇三	二、一〇三	殘	一、四、四三	四八
苦前	—	—	九、四六八	二、四、三三四	二、六、四九九	殘	三〇、三〇一	五、八四一
留萌	一、三三八	—	殘	五、七三三	三、四、八二八	殘	三、四、九二二	二九、五七三
雨龍	兎	—	殘	二、八三五	二、八、六六八	殘	二、七、〇一八	四、四三三
石狩	二、三、五六一	—	一、六、八、一一三	一、三三、八七	二、五、一、八七三	殘	五、八、三、八三三	一、〇、一一五
樺戸	—	八六	殘	四、九八九	九、五、五五	殘	一、四、五五四	—
山部	—	三	—	三、四一	一、三	殘	五、〇三	—
勇拂	—	三、六八一	一、〇、九八一	一、五、二六	八、五、七六	殘	一一、二、八五	七、六六六
白糠	一、五、六六	七、七〇〇	殘	六、六六七	一、七、〇〇三	殘	三、〇、七、九八	三、二、八八
尺別	九、九五	四、四五九	殘	三、八二	三、六、一四	殘	二、九、九七三	三、五、〇〇
釧路	五、九、九三	一九、六六三	殘	六、五七六	八、二、四一	殘	一、七、五、五三〇	二、四、九五
茅沼	八、八七	一、六、五三	殘	一一、一〇九	四、〇、一、二四	殘	六、七、三、五九	一一、二、九二
合計	一三、二、六一	一七、二、六九	殘	一、七、六、六九	四、二、〇、九、五八	殘	七、八、六、一、四八	一、四、九、七六

青森縣秋田縣及 岩手縣下の炭田	既探掘炭量		不可掘炭量		埋藏炭量		現存炭量 に對する 實收炭量
	計	合	計	合	計	計	
下北	1	6	1,341	3,365	1,773	6,358	803
扇田	5	6	1,333	3,422	1,434	19,049	63
荒瀬	5	6	3,648	1,285	4,933	4,933	1
平鹿	不明	1	1,577	1,577	1,577	1,577	1
久慈	3	1	4,561	5,138	5,138	5,138	1
門司	1	3	1,599	4,661	4,661	4,661	1
山形縣下の炭田	10	1	2,263	2,263	2,263	2,263	1
最上北村山	385	333	1,507	6,399	2,454	3,360	83
西田川	330	4,136	3,050	16,539	12,701	3,181	2,122
石城	695	4,339	4,557	3,386	7,943	6,661	2,997
石城双葉及白河炭田	695	4,339	4,557	3,386	7,943	6,661	2,997
双葉	695	4,339	4,557	3,386	7,943	6,661	2,997
白河	695	4,339	4,557	3,386	7,943	6,661	2,997
合計	695	4,339	4,557	3,386	7,943	6,661	2,997

三、關東及び中部地方の炭田		信越の炭田		福井縣下の炭田		その他の産炭地（茨城、東京、新瀉、埼玉、山梨、岐阜各府縣下）探掘、價値少き爲炭量計上せず		四、近畿、中國及び四國地方の炭田	
茨城炭田	既探掘炭量		不可掘炭量		赤谷	長野	計	石徹白	羽生無
	計	合	計	合					
茨城	18,421	7,433	5,189	39,351	70	55	3,033	997	55
赤谷	7	9	70	203	64	49	24	997	55
長野	273	300	575	1,342	575	4,622	6,880	400	400
計	3,377	309	645	1,648	5,566	7,887	475	475	475
福井縣下の炭田	1	1	1	1	1	1	1	1	1
石徹白	3	3	3	3	3	3	3	3	3
計	3	3	3	3	3	3	3	3	3
合計	19,821	7,871	5,868	43,338	103,153	29,156	8,391	8,391	1

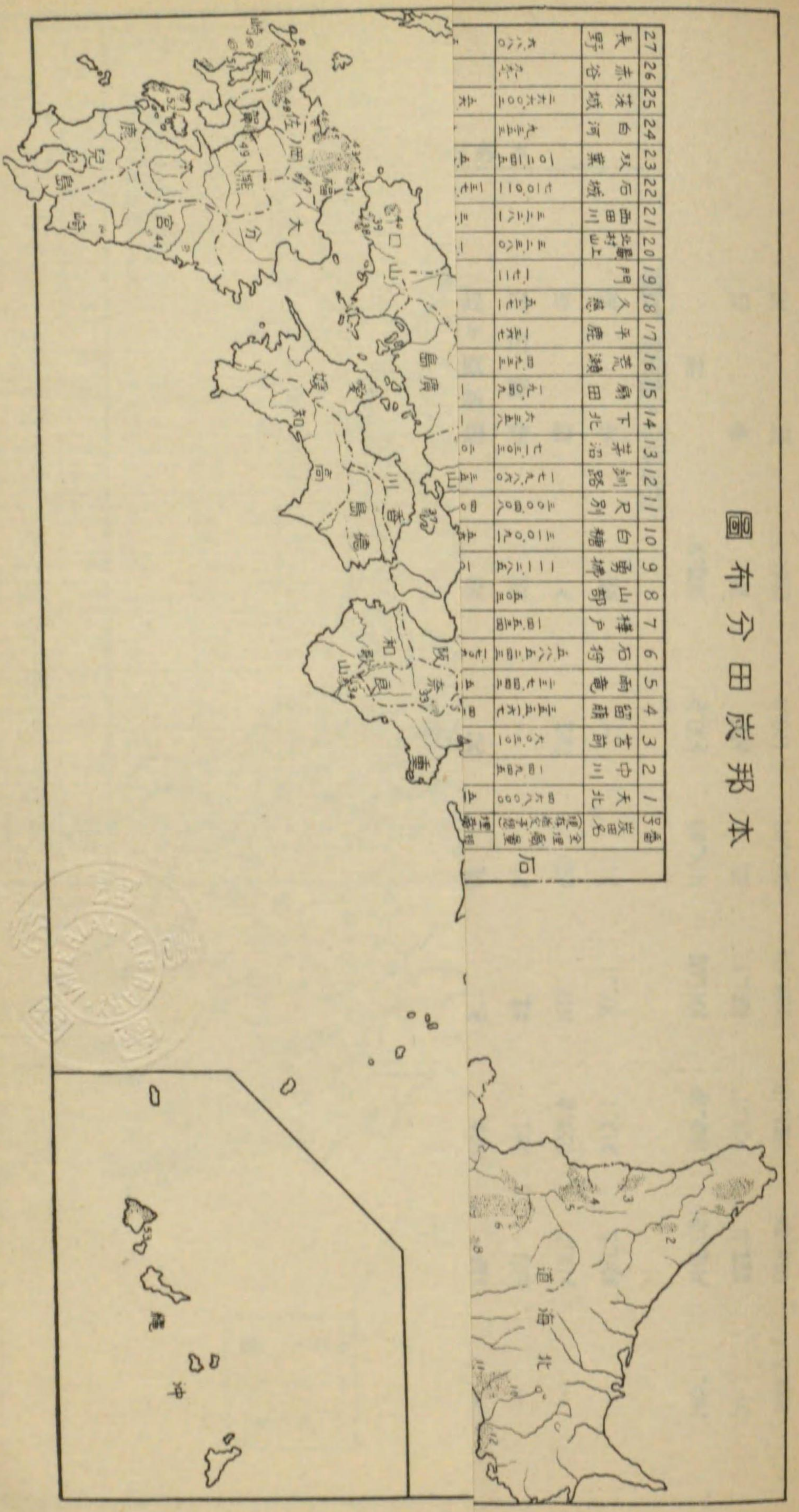
近畿地方の炭田	既探掘炭量		不可掘炭量		埋藏炭量		現存炭量 に對する 實收炭量
	計	合	計	合	計	計	
志高	2	5	32	48	133	89	1

應の集	六、亞炭田		埋藏量		炭量		現存炭量に對する實收炭量
	既探掘炭量	不可掘炭量	現存炭量	推定炭量	豫想炭量	合計	
小倉	一、二二六	五三三	五、四三六	二、二五三	一三〇	七、八二二	三、九一〇
筑豊	四、五七三	二、四三九	一、七四九	七、八三三	五三三、六六	三、〇七、四九〇	一、三三七、七四三
宗像	無、堀二、八六六	一三、一八二	一三、四三九	八〇、一三九	五九、二六四	二七、八四三	八、九三、七
早良	二、五〇〇	四	六、〇七	一	四六	六、五三三	四、九七五
糟屋	三、七九七	三、五、九四四	一三、九、五三二	五、二、七〇	四八、三三二	二、四、〇、〇一〇	一〇、一、七、七三
朝倉	八、四〇一	三、五、一〇八	一、九、七、七八八	一〇、五、九〇	三三	三、〇、三、七〇	一一、一、三、五
唐津	四、六二二	二、七、六六	一、七、一、三三	四、六、七〇	二、六、七、六八	四、〇、九、五、八九	一〇、七、五、七
三浦	七、三、一、六六	九、四〇	一、六、六、六八	一〇、六、六、六八	二、三、一、八、六八	三、九、六、一、四四	八、一、四、八
北松	二、八、二、四三	一、六、九、五、四四	四、〇、三、〇、五八	一、九、一、〇、四〇	二、三、〇、七、五	八、四、八、二、三	三、〇、一、四、〇〇
西彼杵地方	五、五、五、二	一、四、七、七、四	一、五、八、三、〇、九	八、六、二、五、二	二、三、一、七、四四	四、六、六、三、〇、五	八、三、四、四、六
天草	無	九、五、四、二	一、八、三、五、七	一、三、三、九、三	一一、四、〇、〇	四、三、一、七、〇	一一、〇、〇、四
宮崎地方	探掘價値少きに依り計上せず						
沖繩縣下	一、三、九、一	一、七、九	三、一、〇、六	一、一、二、六	一	四、四、四、一	二、五、五、四
合計	七、三、三、七、五	六、九、三、八、七	三、一、六、二、七、六	一、六、五、五、七、四	一、三、〇、四、七、一〇	六、二、六、七、四、一	二、二、四、一、八、三
東北地方の亞炭田							

炭田別	九州の炭田附沖繩縣下の炭田		埋藏量		炭量		現存炭量に對する實收炭量
	既探掘炭量	不可掘炭量	現存炭量	推定炭量	豫想炭量	合計	
高嶽	無	一	二	一〇	一〇三	一〇三	一
明根	二	一	一	六	五	一一	一
會根	二	一	四	七	五	一二	一
九重	一、三、六	二〇三	一、一、四、六	二、三、五	四、六、七	八、一、七	一
計	一、二、九、三	二〇三	一、四、六、三	三、七、二	六、四、六、四	一、一、六、三	一
松江、大賀及小豆島炭田							
松江	三	三、二、六	三、三、九	五、五、七〇	一一、六、五	二〇、五、四	一
大賀	二	二、〇〇	二、〇〇	五、二	三、七、三	一四、三、八	一
小豆島	三	一	一	三、七	五、四	八、八	一
計	七、三	三、五、六	三、三、九	六、四、六、八	二、五、八、九	三、五、七、五	一
宇部炭田附津布田炭田							
宇部	四、九、六	七、三、四、八〇	一、八、一、九	一、六〇、四、一八	一、三、五、一、七	四、八、三、七、九	一
津布田	一	四、七、五	八、九	六	一	九、三	一
計	四、九、七	七、三、四、八〇	一、八、一、九	一、六〇、四、一八	一、三、五、一、七	四、八、三、七、九	一
大嶺炭田	七、六、八	七、三、九、五	一、九、〇、五、七	一、六〇、四、一八	一、三、五、一、七	四、八、三、七、五	一
計	七、六、八	七、三、九、五	一、九、〇、五、七	一、六〇、四、一八	一、三、五、一、七	四、八、三、七、五	一
合計	六、四、〇、七	九、三、一、二、四	四、六、四、九	二〇、一、五、五	一、七、三、三	八、五、八、五	三、五、七、八、七

北	上	鹿	平	宮	最	左	豐	相	計	上	高	飯	其	岐	士	可	計	愛	東		
北	上	鹿	平	宮	最	左	豐	相	計	上	高	飯	其	岐	士	可	計	愛	東		
上	鹿	平	宮	最	左	豐	相	計	上	高	飯	其	岐	士	可	計	愛	東	春	日	井
103	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
2,326	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3,105	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645
8,455	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1,365	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645	5,645
1,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110	8,110
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110	1,110
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36

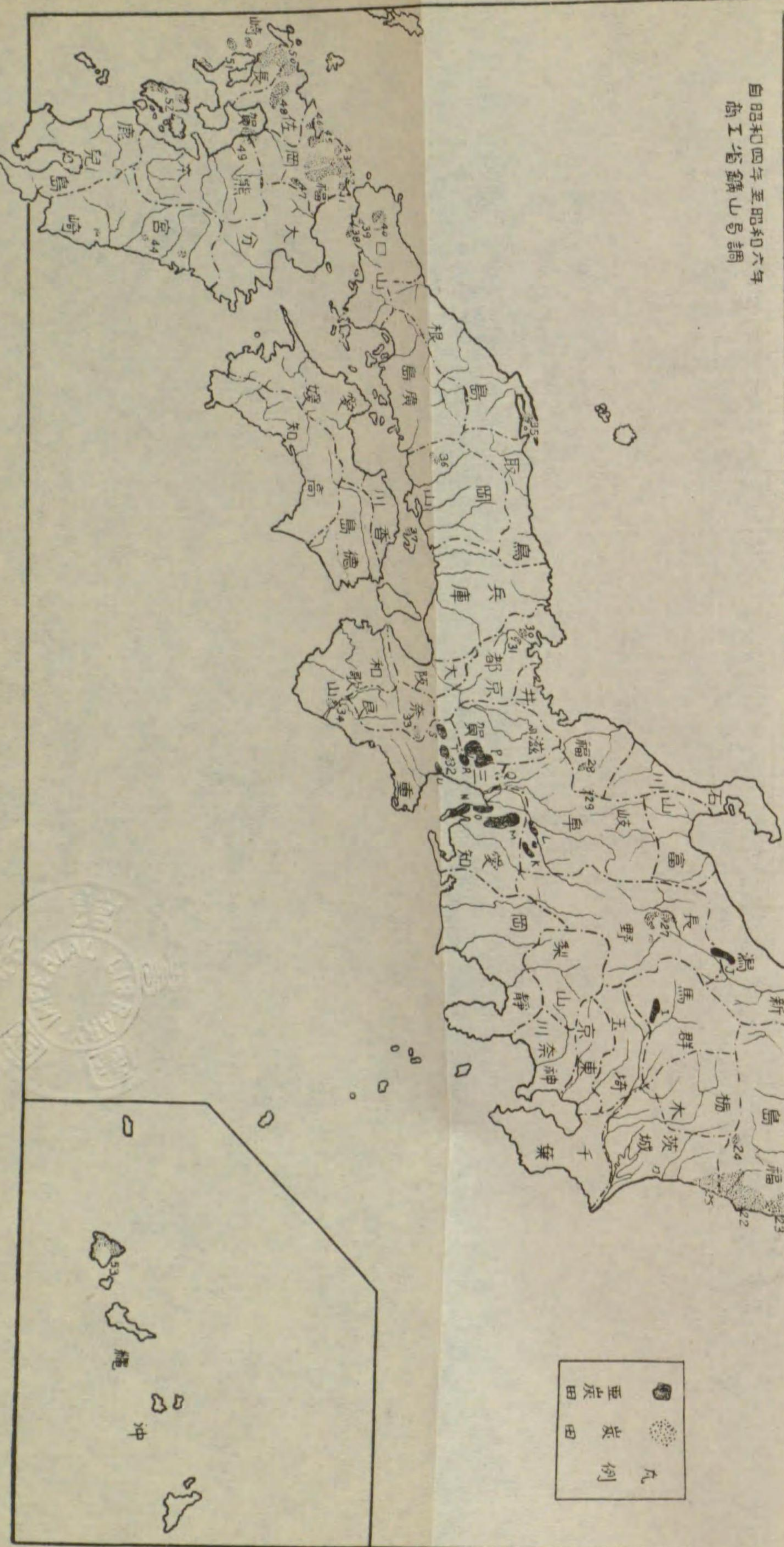
本邦炭田分布圖



北	平	宮	最	左	相	上信越地方の亜炭田	飯	高	飯	其の他新潟縣下の亜炭産地	岐阜縣下の亜炭田	土	可	愛知縣下の亜炭田	東	春	日	井
上	上	北	北	澤	馬	計	崎	崎	山	炭質不良若は探掘價値少きに依り計上せず	計	岐	兒	計	日	井	井	
101	不明	不明	不明	不明	不明	1,477	710	710	不明	表一	表一	304	710	1,110	1,110	1,110	1,110	
3	3	3	3	3	3	3,835	3	3	3	表一	表一	5,100	5,100	5,592	5,592	5,592	5,592	
1,335	1	1	1	1	1	3,048	21	21	21	表一	表一	5,877	5,877	10,977	10,977	10,977	10,977	
3,025	5,683	5,683	5,683	5,683	5,683	6,104	6,103	6,103	6,103	表一	表一	1,498	1,498	18,496	18,496	18,496	18,496	
8,555	1	1	1	1	1	3,048	4,979	4,979	4,979	表一	表一	3,355	3,355	7,583	7,583	7,583	7,583	
1,335	3,025	3,025	3,025	3,025	3,025	3,048	3,048	3,048	3,048	表一	表一	1,500	1,500	15,000	15,000	15,000	15,000	
3,025	5,683	5,683	5,683	5,683	5,683	3,048	4,979	4,979	4,979	表一	表一	5,877	5,877	10,977	10,977	10,977	10,977	
1,335	3,025	3,025	3,025	3,025	3,025	3,048	3,048	3,048	3,048	表一	表一	1,500	1,500	15,000	15,000	15,000	15,000	
3,025	5,683	5,683	5,683	5,683	5,683	3,048	4,979	4,979	4,979	表一	表一	5,877	5,877	10,977	10,977	10,977	10,977	
1,335	3,025	3,025	3,025	3,025	3,025	3,048	3,048	3,048	3,048	表一	表一	1,500	1,500	15,000	15,000	15,000	15,000	
3,025	5,683	5,683	5,683	5,683	5,683	3,048	4,979	4,979	4,979	表一	表一	5,877	5,877	10,977	10,977	10,977	10,977	
1,335	3,025	3,025	3,025	3,025	3,025	3,048	3,048	3,048	3,048	表一	表一	1,500	1,500	15,000	15,000	15,000	15,000	
3,025	5,683	5,683	5,683	5,683	5,683	3,048	4,979	4,979	4,979	表一	表一	5,877	5,877	10,977	10,977	10,977	10,977	
1,335	3,025	3,025	3,025	3,025	3,025	3,048	3,048	3,048	3,048	表一	表一	1,500	1,500	15,000	15,000	15,000	15,000	
3,025	5,683	5,683	5,683	5,683	5,683	3,048	4,979	4,979	4,979	表一	表一	5,877	5,877	10,977	10,977	10,977	10,977	

本邦炭田分布圖

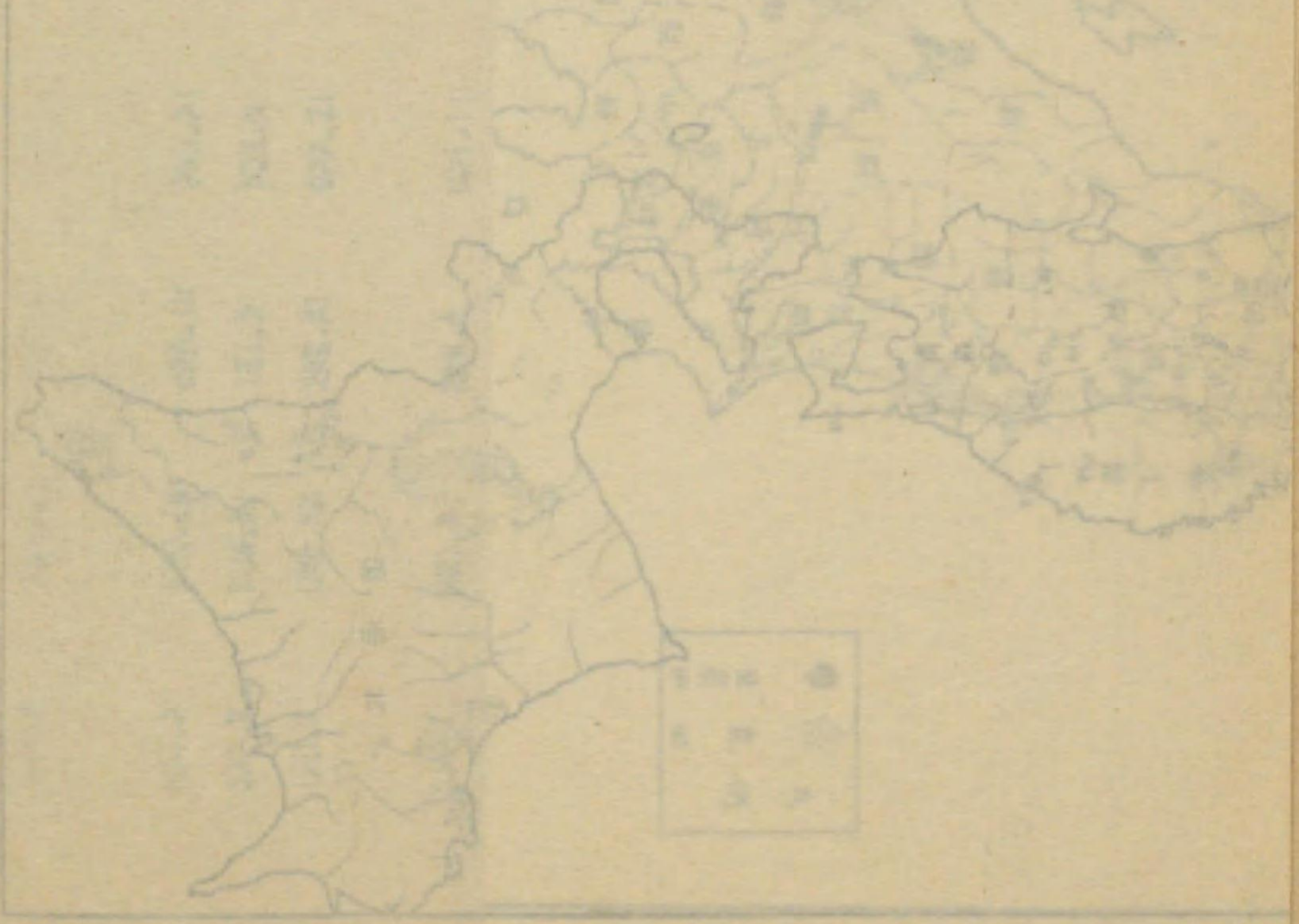
番号	産地名	産地種別	面積(町)	産出量(千石)	備考
1	大北	石炭	29	29,283	石炭
2	中川	石炭	29	29,283	石炭
3	留前	石炭	30	30,313	石炭
4	雨竜	石炭	32	32,323	石炭
5	石狩	石炭	34	34,333	石炭
6	樽戸	石炭	35	35,343	石炭
7	山部	石炭	36	36,353	石炭
8	山部	石炭	37	37,363	石炭
9	勇柳	石炭	38	38,373	石炭
10	白糠	石炭	39	39,383	石炭
11	列	石炭	40	40,393	石炭
12	北	石炭	41	41,403	石炭
13	井	石炭	42	42,413	石炭
14	下	石炭	43	43,423	石炭
15	荒	石炭	44	44,433	石炭
16	平	石炭	45	45,443	石炭
17	鹿	石炭	46	46,453	石炭
18	久	石炭	47	47,463	石炭
19	門	石炭	48	48,473	石炭
20	門	石炭	49	49,483	石炭
21	西	石炭	50	50,493	石炭
22	西	石炭	51	51,503	石炭
23	双	石炭	52	52,513	石炭
24	白	石炭	53	53,523	石炭
25	赤	石炭	54	54,533	石炭
26	赤	石炭	55	55,543	石炭
27	長	石炭	56	56,553	石炭



愛知	知多	滋賀、三重縣下の亞炭田	蒲生	古野	白川野登	島ヶ原新居	友生	高茶屋	合計	備考
二,一〇九	四	三,四〇〇	一四七	一九	四	二五	二	三三〇	六,六五	無は無煙炭を示し、扇は扇石を示す
三,〇八一	三,八五	九,〇〇五	一	四〇〇	一	二九	一	一八,八五九	一,〇四九,八六五	
三,二五二	三	三,三二二	一八	二四七	一九	四〇	二	六五,六五	五,九〇〇,四五	
三,〇五九	一,二四三	四〇,二八五	一,一〇六	五二	四	二九	三	一三,五九二	四,〇四五,五一	
三,九三三	一,一六八	六,九三二	一,八二九	七,五〇〇	一七三	七八二	一四	一〇,六三三	六,六八五,四一七	
五,七〇〇	二,四四四	一六,四三九	三,〇四三	八,三三九	三三七	九四一	一四	三,九六八	一六,六九一,四三三	
六,三三三	一八	二,八五六	一	一	一	一	一	一	四,三三三,四九三	

愛知	知多	滋賀	三重	蒲生	古野	白川野登	島ヶ原新居	友生	高茶屋	合計	備考
二,一〇九	四	三,四〇〇	一四七	一九	四	二五	二	三三〇	六,六五	一,〇四九,八六五	無は無煙炭を示し、扇は扇石を示す
三,〇八一	三,八五	九,〇〇五	一	四〇〇	一	二九	一	一八,八五九	一,〇四九,八六五		
三,二五二	三	三,三二二	一八	二四七	一九	四〇	二	六五,六五	五,九〇〇,四五		
三,〇五九	一,二四三	四〇,二八五	一,一〇六	五二	四	二九	三	一三,五九二	四,〇四五,五一		
三,九三三	一,一六八	六,九三二	一,八二九	七,五〇〇	一七三	七八二	一四	一〇,六三三	六,六八五,四一七		
五,七〇〇	二,四四四	一六,四三九	三,〇四三	八,三三九	三三七	九四一	一四	三,九六八	一六,六九一,四三三		
六,三三三	一八	二,八五六	一	一	一	一	一	一	四,三三三,四九三		

愛知、知多、滋賀、三重縣下の石炭埋藏地



統計及雜報

印度のタタ鐵鋼會社最近事情

Iron and Coal Trades Review Feb. 12, 1932

印度駐在英國主席商務官 Thomas M. Ainscough 氏のタタ鐵鋼會社に關する本國政府宛報告次の如し（一九三一年三月三十一日に終る會計年度中の生産狀態並在ジャムセドブル工場設備要項）

一、銑鐵產額

一九三一年三月卅一日現在高爐數五基、銑鐵產額七一四、三二九噸、工場使用銑鐵高六〇二、二二三屯、工場用として生産せる滿俺鐵六、九四五屯。

二、平爐及び轉爐

一九三一年三月卅一日現在數酸性轉爐三基平爐十基、鋼塊產額平爐鹽基性鋼二四三、八七五屯二聯式鹽基性鋼三八〇、六六四屯

三、壓延工場

一九三一年三月卅一日現在數、分塊工場二、軌條工場二、厚板工場一、小形棒鋼工場四、薄板工場九、三五吋粗ロール工場一、半製鋼生産高一分塊工場五三三、六一四屯、シートバー及びビレット工場一ビレット

一一七、四〇六屯、シートバー及びスリバーバー七一、一九九屯、ティンバー及び平五七、四五一屯、鋼材生産高一軌條五〇封度以上一級品一一一、七一五屯、軌條三〇封度以下一、八四五屯繼目板（一級品）六、二八五屯、枕木（一級品）二、二三七屯、アングル、チャンネル及びT形鋼五二、七三二屯、ビーム三一、一八四屯、丸、角、平、八角形及びタイバー七三、六二二屯、厚板三四、七三七屯、薄板 $\frac{1}{8}$ 吋以下二三、〇四〇屯、亞鉛引薄板二六、四五〇屯、販賣用アルーム、ビレット二、八〇一屯計三六六、六四七屯外に販賣用タイバー、スリバーバー六七、〇六一屯合計四三三、七〇八屯

かねて改造擴大中であつたD熔鑪爐は一九三〇年十一月一日から操業を開始した。

タタ鐵鋼會社は同年度に於て七五〇、〇〇〇磅の利益を擧げた内五八五、〇〇〇磅を工場原價償却費に一五、〇〇〇磅を炭坑の同費目に充當した、配當は第一及び第二優先株に仕拂はれた、不景氣にも拘らず鋼塊及び鋼材の生産高は會社從來の記録を破つた、之れに反し印度鐵鋼會社は世界銑鐵價格の低落に禍せられ極めて難境の年を送つた。

露西亞に又新製鐵所計畫さる

The Far eastern Review, April, 1932

マグニトゴルスク工場に亞ぐ一大製鐵所が目下南露の鐵鑛床中心地クリヴオイロツグ（Krivoi Rog）に建設中である、尙本製鐵所の必要品を供給せんが爲め骸炭工場耐火煉瓦工場、ボートランドセメント工場及び

構造用鐵を生産する工場も又近く建設さるゝであらう。

其の第一次計畫として鉄鐵一、二〇〇、〇〇〇噸、ソルテットアイアン (Rolled Iron) 八〇〇、〇〇〇噸以上、グレイビーム (Grey beams) 四五〇、〇〇〇噸を生産する筈になつて居るがグレイビームの生産に於ては本工場は世界第一位を占むるものであらう。設備豫定次の如し。

熔 鐵 爐 四 基	各基容積九三〇立方メートル
平 爐 一 八 基	各基能力一五〇噸
ブルームینگプレス	二

第一及び第二熔鐵爐はこの十一月に、第三熔鐵爐は一九三三年七月に、第四熔鐵爐は一九三四年八月に入さるゝことになつて居る尙是等の完成後更に工場は擴張せられ熔鐵爐は八基に増加し平爐工場は、第二、第三工場の増設を見るに至るであらう。

第一次建設費は約三二〇、〇〇〇、〇〇〇ルーブルであるが全建設費は六〇〇、〇〇〇、〇〇〇ルーブルに達するものと見らる、尙従業員住宅の建設費として七百萬ルーブルの經費を要する見込みである。

工場敷地は一〇平方キロメートルで目下建設工事に五千人の労働者を使役してゐるが完成の曉には工場の備役人員は八千人以上に上るであらう。 — "Tass Service," —

インド製鐵業の現在及び將來

(昭和七年二月十五日附在ボンベイ栗原領事報告)

インドの製鐵界は各國同様世界的工業並貿易不振の爲め多大の打撃を被り、之が打開の途を發見せんこと、に腐心し居る模様なるが先般 Mysore Engineers' Association に提出されたるインド製鐵業の現在及び將來に對する評論は本邦當業者にも相當興味ある所と思せらる其の大意を抄譯すれば左の如し。

印度の製鐵業

(一) 貿易並製造工業界不振の影響を受けて世界の製鐵業者は米國を除き何れも多大の打撃を蒙り、爲めに歐洲各國に於ては此の影響を免れんが爲めに組織の變更等を行ひ來れり。

一九二九年には世界は鐵及び鋼製産額に著しき増加を見たるが、特に鉄鐵は世界大戰以來始めての激増を示せり。即ち一九二九年の鉄鐵及び鋼の總製産額は夫々九千八百八萬噸及び一億一千九百四萬噸にして一九一三年の七千七百七十二萬噸及び七千四百八十三萬噸に比し其の増加の著しきを見る。米國は最大製産國にして鉄鐵四千四百七十七萬噸及び鋼五千七百八十三萬噸を製産、之に對しインドは僅に百三十五萬噸及び五十七萬噸を産出したるに過ぎず。

(二) インドに於て始めて近代的設備に依り成功したるものはベンゴール・アイアン・カムパニーにして、右は一八八九年バラカル・アイアン・ワークス・カムパニーの事業を引受けたるものなり。當社工場は東イン

ド鐵道のクルチ（アサンソール附近）に在り、年額四十萬噸の鉄鐵製産能力ある五基の高爐（Blast furnace）及び六萬噸の製造能力ある枕材製造所を有す。

右より後れて設立されたるも現在最も著名なるはタタ製鐵會社にして、ベンゴール・ナグプール鐵道沿線ビハール・オリッサ州のジャムシエドプールに存在し、其の設備は最も近代的にして、五基の高爐其の他最新式装置及び各種附屬工場を有す。總製産額は關稅調査會の豫想に據れば一九三四年に鋼六十萬噸及び餘剩鉄鐵製産額六萬噸に達する見込みなり。

之に次いで重要なものに鉄鐵のみを製産するインデイアン・アイヤン・エンド・スチール・カムパニーあり、高爐二基を有し年五十萬噸の製造能力を有す。

約三年前右インド製鐵會社とベンゴール製鐵會社の事業は兩社の株交換に依つて合併せられたり。爾來インド製鐵會社のマネーヅング・エゼントたるマーティン會社に買収せられたり。尙タタ製鐵會社は此等兩社との間にインド内外に於ける鉄鐵の販賣に關し或種の諒解を遂げたり。

(三) インド内に於ける鉄鐵の販賣高は、一九二九年に至る過去四年間は約十四萬噸に達し、一九二九年にはインド鐵道の鉄鐵消費高七萬噸に及びたるも、翌一九三〇年には著しく減少して其の額二萬噸にも達せざりしなるべく、以後は更に減少したるものと察せらる。目下の綿業其の他の不況に依り、インドの總消費額は九萬噸を超えざるべし。

對外的には日本の需要が將來増加する共、當分十萬噸以上には出でざるべし。米國は日本に次ぐ得意先にして約七萬噸のインド鐵を輸入し來れる處、インド鐵を排斥せんが爲に、關稅の引上を以て常に脅威を加へつゝあるを以て、對米輸出増加を圖るは困難なるべく、其の他の諸國に對する輸出可能性は更に少しと謂ふべし。斯くして現在の製産率を以てするも、約三十五萬噸に對する市場發見は益々困難となりつゝあり。

インドに於ける鉄鐵製産額と鋼鐵製産能力との間の不均衡は、鉄鐵及びパイプに對する地方市場を混亂せしめたり。現在の貿易及び財界の狀況に於ては其の需要は不定にして、安値必しもインド製鐵類の需要増加を誘致せず。今日の需要に對しても激烈なる競争ありて、價格は次第に低落しつゝあり。インド内地市場の狀況斯の如く對外輸出亦脅威を受け居る今日、之が對策としては二つの方法あるのみ。一は生産制限、他の一は内地需要を充たす爲に鋼を製造することなり。但し前者は鋼の製造開始に至る迄の一時的便法に止めざるべからず、一日たりも必要以上に生産制限を續行することは當國の利益に非ざればなり。

(四) タ、製鐵會社の現在の設備を以てすれば、一九三四年には六十萬噸の鋼を製造することを得。インドの鋼製品輸入額は一九二九年には百六萬七千五百六十六噸、一億八千八百三十萬「ルピー」に達し尙此の外一億七千九百三十萬「ルピー」の機械類の輸入を見たり。右の數字は明にインドに製鋼事業擴張の餘地充分なるを示すものと謂ふべし。

唯本事業遂行上主要なる障害をなすものは、資金の缺乏と保護關稅繼續の不確實なることなり。インド政

府は一九三三―三四年度には恐らく調査を行ひ、保護關稅を當インドの利益の爲に繼續せしむべしと信ずるも、此は必しも右不安を一掃するものに非ず又製鐵業者の要望する程度の保護を與へらるゝことを保證するものにも非ず。

(五) 元來鐵工業は關係する所世界的なるが、其の狀態の變化極めて迅速なるを以て、長時日の調査を経て後始めて立法手段を講ずるが如き悠長なる方法は時宜に適したる救済を與ふること能はず。若しインドの製鋼業擴張が現在のインド製鐵業不振に對する唯一の救済方法たりせばインド政府は直に此の目的達成の爲に手段を講ずべきなり。關稅調査會は前回報告中に於て、其の提案は今後開始さるべき事業に對し妥當なるものみなせるが、手近に市場あり且幾多の大惠あるにも拘らず、新規事業の開始を見ざりしは、敍上の不安に近年鋼商賣の不況に對し許與する所充分ならざるを示すものなり。

故に現在製鐵業の實際必要とする所のは十五年乃至二十年の長期保護にして、之を本工業と接觸を保つ永久委員會の支配下に置き、狀態の變化に伴ひ一定の範圍内に於て之に相當する様之に變更を加へ得る權能を附與すべきことなり。インド製鐵業の近き將來は必しも赫々たりとは言ひ得ざるも、若し海外市場に依頼する現在の狀態を棄て、内地市場の需要に應ずる爲に一步を進めば、極めて有望なること自然の利に顧みて瞭なる所なり。

各製造家間の協調に各方面に對する政府の廣量にして且時宜に適したる保護は、本工業を瓦解より免れ

しめ、却て鞏固にして利益ある基礎の上に本工業を建設することを得しむべし。

一九三二年露西亞の鐵鋼生産計畫

The Far Eastern Review, April, 1932.

勞農露西亞一九三二年鐵鋼生産計畫は九百萬噸に決定された、因に昨年の実産高は約五百萬噸であつた。本年の増産計畫は次の二方法に依り遂行することになつて居る。

- 一、現在高爐の効率増進に出來得る限り努力し以て二百萬噸の鉄鋼を増産す。
- 二、残りの二百萬噸乃至三百萬噸は本年中に於て作業の一部を開始する手筈になつて居る二十六基の新高爐から生産す。新高爐中二基は既に一月から作業を開始して居る、即ち一はウラル地方マグニトゴルスク製鐵所の新高爐で、他はドネツ盆地のカダイエブスク製鐵所の新高爐である。

鐵鋼業に對する一九三二年の投資豫定額は十億八千萬ルーブル(九億二千七百萬弗)に達し其の大半は本年作業を開始せんとする新高爐の完成費に向けらるゝ筈である。新高爐二十六基の生産高は概算二、七九〇、〇〇〇噸で、其の生産能力は合計七、三七〇、〇〇〇噸に達するであらう。

マグニトゴルスク製鐵所に於ては年能力合計二、一四八、〇〇〇噸の高爐六基の作業を行ふ筈で、其の本年の鉄鋼生産高は九七八、〇〇〇噸に達するものと見積らる。又クズネツク製鐵所に於ては年能力合計一、二

二六、〇〇〇噸生産高六〇〇、〇〇〇噸の高爐四基の作業を開始するであらう。一方マリウポル(Mariupol)製鐵所に於ては六〇八、〇〇〇噸の能力を有する二基の高爐を完成し八七、〇〇〇噸の鉄鐵を生産するであらう。其の他の工場に於ける新高爐の一九三二年の能力ミ生産高豫定次の如し

工場名	能力	生産高
Zaporozhye	608,000噸	145,000噸
Krivoy Rog	304,000	15,500
Makayevka	264,000	180,000
Konstantinovka	125,000	94,000
Alchevsk	608,000	87,000
Kadievsk	85,000	83,000
Moscow Region Mill	242,000	142,000
Kamenskoye	608,000	234,000
Kosogorsk	240,000	130,000
Lipetsk	304,000	15,000

以上の工場はモスコウ地方の工場ミ Kosogorsk 及び Lipetsk 工場ミを除けば全部ウクライナに在り
 二十六基の新高爐中十六基は新工場のものに屬し残りは舊工場に在つて擴大及び再建中のものである
 一九三二年の鉄鐵生産計畫噸數の中約三割は新高爐から生産さるゝことになつて居る。各基能力三五八噸

の八大高爐はウラルークズネツク地方に在り。

製鋼方面に於ても亦急速なる發達を示し多數の平爐並壓延工場の完成を急ぎつゝあるが恐らく本年の製鋼高は昨年の五百三十五萬噸から九百四十五萬噸に増加するものと期待せらる。

ケリアピンスク鐵合金工場に於ける生産状態は質量共に善化しつゝあつて、一九三一年八月には僅に九九噸の生産を示したに過ぎなかつたが、同年十一月には一、〇〇〇噸となり十二月には一、一四〇噸に増加した。同工場に於ける一九三二年即ち本年の生産計畫は次の通りである

硅素鐵	一四、〇〇〇噸	クロム鐵	二、〇〇〇噸
高級製品	六〇〇噸		

露西亞の獨逸鋼材三十萬噸購入契約締結

Iron Age 5, May, 1932

露西亞は獨逸鋼材三十萬噸購入プログラムの内未契約の分一五〇、〇〇〇噸の購入に關し獨逸製鋼所組合と契約を締結した、購入鋼材三〇〇、〇〇〇噸の内譯次の如し

ピレット	一〇、〇〇〇噸
形物	三三、〇〇〇
バ	一一五、〇〇〇
プレート	一三三、〇〇〇

尙露西亞は此の外二〇〇、〇〇〇噸の鋼材を獨逸に注文するものと見らる

獨逸と瑞典との鐵鑛石賣買契約價格と契約噸數の減額

Iron and Coal Trades Review, Feb. 26, 1932

獨逸鑛業時報の報ずる所に依れば昨年十一月及び十二月の兩月に對する鑛石引渡高の減額に關しウェスト
ファリアの鐵鋼工場と瑞典のグレンゲスベルク會社との間に取結ばれた契約はこの程延長せられたが恐らく
本年一月及び二月分迄適用せらるゝことになるであらう

(譯者謂ふ——グレンゲスベルク會社との賣買契約は一九四二年迄の長期契約でこれが爲獨逸の製鐵業
者は經濟難の今日苦しい重荷を背負つて居る次第である、工場には鑛石のストック夥しく従つて屑鐵の
低廉なるものあるにも拘らず鑛石に投下せる資本の一部を回収せんが爲め屑を使用せず専ら鑛石を使用
して居るこいふ)

瑞典の採鑛業者が其の買手に與へた救済は契約に定めた引渡噸數の約二分の一の減額と價格の値下とであ
る、現在引渡されつゝある鑛石に對しては契約面の高價格に依らずして現在市價と殆んご同じ價格で仕拂ふ
ことになつて居る、尙同紙の報ずる所に依れば、獨逸と瑞典の當事者間には近く新に協商せらる所あるべく
獨逸側に於ては瑞典側の了解讓歩を期待してゐるも獨逸側の願望に瑞典が全く應諾するかは確かでない、然
しながら、問題の重大性に鑑みれば兩者間に或る程度の解決を見るべきものと見料せらる、獨逸の消費者は

瑞典供給者側の難境をも認めねばならない、瑞典のキルナ (Kiruna) 鑛山に於ては新年以來一週僅に三日の
作業を行ひつゝある状態であつて、ナーヴィク (Narvik) 港の鑛石ストックは二百萬噸に及んで居る有様で
ある、又グレンゲスベルク會社の鑛石輸出高は、著しき減少を示し昨年は三、五〇三、〇〇〇噸を算したに
過ぎなかつた、(一九二九年九、五四六、〇〇〇噸、一九三〇年七、九五二、〇〇〇噸) 又ナーヴィク港の
みの輸出高に就て見るに昨年の輸出高は一九三〇年の四、八九九、〇〇〇噸に對し二、一四一、五〇〇噸に
減じ一方ルーリア (Lulea) 港昨年の輸出高は前年の二、〇五五、七〇〇噸から九五二、一〇〇噸に激減した。
尙同紙には一九三一年に於ける前記兩港からの仕向地別鑛石輸出高の興味ある表を掲げて居る。次の如し

仕向地別	ナーヴィク港	ルーリヤ港
獨逸	一、五五九、七〇〇	三二六、八〇〇
チエコスロバキヤ	—	四六一、六〇〇
英國	二八四、一〇〇	四九、九〇〇
合衆國	一六四、五〇〇	二八、七〇〇
白耳義	一〇一、八〇〇	—
和蘭	二二、四〇〇	四五、九〇〇
波蘭	—	二四、九〇〇
其他	九、〇〇〇	一四、三〇〇
合計	二、一四一、五〇〇	九五二、一〇〇

尙鐵礦石の輸出高は瑞典のみならず其の他の諸國に於ても同様程度の減少を示した、例へば西班牙に於けるビルバオ地方からの輸出高は昨年比し五十萬噸を減じ佛蘭西諸港からの輸出高も著減した、又北米に於ける大湖地方からの引渡高は、一九三〇年の四千六百五十萬噸、一九二九年の六千五百三十萬噸に對し昨年は僅に二千三百五十萬噸に激減した。

ブレトリアに大製鐵所の建設

——(南阿一般の繁榮策)——

南阿ではブレトリア附近に大製鐵所の建設を計畫してゐるが之は二十五年前からの懸案であつてブレトリア商業會議所は其の建設に努めて來たのであつた、南阿の事業としては非常に有望なものであつて是によつて南阿に必要な諸製品を得る許りでなく南阿一般に職を興へ惹いては南阿全産業の繁榮を計らんとするものである、此の南阿大製鐵所出現の曉には其の製鐵所面積内だけで約二十五哩の鐵道が敷設される筈である、そして其の生産額は年額十五萬噸あまりになるべく其の他諸種の副産物がみれることとなる。豊富な動力も原料品もを有してゐる南阿のこゝであるから必ずや該事業は成功するものと思はれる

(日刊工業 5. 11. 1932)

鐵鋼工業界は事業擴張の様

——(カーネギー社でも従業員を増加)——

近頃中央西部地方の鐵鋼工業界では今後相當の期間に亘つて作業の擴張が行はれること云ふ風聞が流れてゐる、カーネギー鐵鋼會社ではヤングスタウン、マクドナルド、ファレル及びニュー・カッスル等の諸工場に於て既に事業擴張し隨つて従業員を増加する準備に忙しいヤングスタウン鐵板鐵管會社でも亦生産擴張を企畫中であること、而してこの擴張は決して一時的のものではなく半永久的でさへあるさうである、之らの新擴張事業の振向け先は千種萬別であるが其の内には農具、鐵道線路、自動車工業等を含むものである、鐵管製造業者は製油工業と關聯して最近に活氣付くであらうと樂觀してゐる、殊に最近の價格の騰貴は主に原油工業に負ふものである、尙相當多量の注文が東テキサス油田からある模様、更にスチール・バー及び針金製品も今後益々増需の傾向でありその船積高も上つてゐる

(日刊工業 5. 11. 1932)

メキシコの鐵工業(一九二九年)

(昭和七年四月十日附在メキシコ壟斷特命全權公使)

一九二九年中メキシコ國の鐵工所に於ける生産品價格は二千二百八十八萬九千三百六十「ペソ」に達したるが、此の内ヌエボレオン州に於ける鐵工所に該當するものは一千六百四十一萬四千九百九十五「ペソ」即ち全價格の七三%九八にして、聯邦區に該當するものは四百八十七萬二千二百八十一「ペソ」即ち全價格の二二%九六に相當す。聯邦區、グアナフアート、ソノラサン・ルイス・ポートシー其他に於ける鐵工所に於て

は製鐵業よりも寧ろ各種修繕業に従事するに反し、ヌエボ・レオン州に於けるものは製鐵修繕共に一頭地を抜く。

一九二九年度中前記鐵工所に於て生産せられたる品物は左の如し。

- (一) 鐵 (イ)砂の鑄型に依り製出せられたる鐵板 (ロ)其他
- (二) 鋼鐵 (イ)鐵板、レール (一萬四千八百三十七屯、此の價格百六十七萬二千三百三十七「ペソ」)
- (ロ)釘其他鐵道用材料(一萬五千五百二十二屯、此價格二百六十二萬九千四百八十七「ペソ」)
- (ハ)針金。

- (三) 地金
- (四) 薄板 (眞鍮、青銅、銅、亞鉛、鉛アルミニウム等)
- (五) 寢臺用材料 (眞鍮、青銅、鐵及びアルミニウム)
- (六) 管、辨栓 (青銅、亞鉛)
- (七) 其他の各種金屬製品

而して前記諸鐵工所に於て消費せられたる國產原料の數量を示せば左の如し

鐵	六八、二九三「トン」
鋼	但此の内ヌエボ・レオン州に於て四八、〇〇〇「トン」、聯邦區に於て一六、〇〇〇「トン」。
	八、二七三「キロ」

亞鉛	一〇三、三八〇
銅	一七五、一一六
青銅	四四八、八二八
鉛	三九六、二五八
亞鉛	三三三、五二六
アルミニウム	一一、八八五
アンチモニー	六、五一六
錫	三、三七六
石	二、五二〇

右原料の總價格は三百九十萬三千四百四十一「ペソ」なるが、此の内ヌエボ・レオン州並聯邦區に該當するものは夫々二百五十九萬五千六百四十一「ペソ」、並一百四萬四千七百八十三「ペソ」にす。鐵工所に輸送せられたる原料品の總價格は二十五萬九千九百三十一「ペソ」にして、之に對する生産費は聯邦區に於て十八萬三千七百七十一「ペソ」、ヌエボ・レオン州に於ては六萬七千二百二十二「ペソ」を要す。

英國鐵鋼業統制會社組織

(昭和七年五月三十一日著 在ロンドン松山商務參事官電報)

支那市場に於ける發展協調を目的とし、今般英國鐵鋼業者 Dorman Lang; Metropolitan Vickers; Electric export; Baccok and Wilcox; Beyer peacock Caellanders; Cable and Construction; John Thornycroft; Edgar Allen

Tilbury, Contracting and Dredging 等メンバーとなり、Dorman Long and Associates China なる統制會社組織せられ、之をして註文引受の任に當らしむることなれり。

一九三一年印度の銑鐵輸出入

Iron and Coal Trades Review, March 18, 1932.

一九三一年に於ける英領印度の銑鐵輸出入高次の如し

輸入	一九三一年	一九三〇年
	一、二八三屯 (殆んど全部英國より)	三、一〇六屯
輸出	三、一八、六九四屯	五〇二、六二九屯

一九三一年の輸出先別屯數次の如し

英國	五、一、六〇〇屯
獨逸	一、四、五五二屯
日本	一、五七、二一六屯
合衆國	六〇、二二一屯
其他	三五、三〇五屯

一九三一年加奈陀の骸炭産額

一九三一年に於ける加奈陀の骸炭産額は合計一、八三五、六二二屯(一九三〇年一、三八五、九九四屯)に達した、其の輸入高は七三三、二七四屯(一九三〇年一、〇六一、〇四〇屯)輸出は二〇、九八〇屯(一九三〇年二九、八〇一屯)差引消費高二、五四七、九一六屯(一九三〇年三、四一七、二三三屯)を算した骸炭一、八三五、六二二屯を生産するに二、五三四、四〇一屯の瀝青炭を使用したの内五六一、五四七屯は加奈陀炭一、九七二、八五四屯は輸入炭を使用した

一九三一年に於ける佛蘭西の滿俺鑛石輸入高

昨年(一九三〇年)に於ける佛蘭西の滿俺鑛石輸入高は四八二、七四六吨(一九三〇年七一五、〇五三屯)に達し内一三五、〇二四吨は英領印度より、三〇、九六五吨は其の他の亞細亞諸國より三、八九三吨はブラヂルより、一、五九〇吨は西班牙より一三六、九七九吨は露西亞より、三一、〇七〇吨は英領西アフリカより、三〇、七六五吨は獨逸より三、四四二吨は瑞西より、殘餘は其の他の國より輸入した。

一九三一年中ルクセンブルクの鐵鑛石産額

一九三一年に於けるルクセンブルクの鐵鑛石生産高は一九二九年の七、五四六、九八九屯(一九三〇年の六、六〇八、二五九屯)に對し四、七八〇、八七四吨に減じた、此の生産高の著減は鐵鋼業の不振を輸出鑛石に對する輸出税の高きを基因せるものであつた。

一九三一年中に於ける日本の印度銑輸入

一九三一年に於ける日本の印度銑輸入高は九月卅日迄に於て合計一一〇、〇〇〇噸に達したが一九三〇年及び一九二九年の數字に比すれば著しく減少した、(一九三〇年二〇〇、〇〇〇噸、一九二九年四〇〇、〇〇〇噸) 銑鐵の輸入價格は低落して九月には二五圓をなつたが其の後ルービイの下落に伴ひ一層低落し最近には二一圓乃至二二圓の低相場を現出するに至つた。

一九三一年中佛蘭西の壓延鋼材生産高

一九三一年中に於ける佛蘭西の壓延鋼材生産高次の如し

販賣用半製品	一、三二九、〇〇〇噸
タイヤ	五六、〇〇〇"
車軸其他のフォーデンク	七四、〇〇〇"
軌條	三九二、〇〇〇"
枕木	一一六、〇〇〇"
軌條附屬品	三三、〇〇〇"
ジョイスト其他の形物	七三三、〇〇〇"
線材	二九〇、〇〇〇"
ワイヤー	一六七、〇〇〇"
フーパー	二一八、〇〇〇"

チユーブ用半製品	五四、〇〇〇噸
チユーブ	一五〇、〇〇〇"
特殊棒鋼	一五四、〇〇〇"
市場向棒鋼	一、九二七、〇〇〇"
鋸力板	九〇、〇〇〇"
薄板五耗未満	五八五、〇〇〇"
厚板五耗以上	三一〇、〇〇〇"
平鋼	六〇、〇〇〇"
鋼材合計	五、四〇八、〇〇〇"

一九三一年中佛蘭西の鐵鑛石産額

一九三一年十二月の佛蘭西鐵鑛石生産高は十一月の二、七一九、三八一屯に對し、二、六九四、六七九噸に達し月末現在山元ストックは前月の四、一四九、八六六屯に對し四、一四〇、九八五噸に達した生産高の年間合計は前年の四八、五二二、〇〇〇噸に對し三八、四八一、〇〇〇噸に減少した。

一九三一年中日本の鋼材供給高

次の數字は一九三一年中に於ける日本の鋼材供給高を示す。

品目	一九三一年	一九三〇年
鋼	六六一、八四二噸	七七七、七五七噸

厚板、薄板	六四六、〇八六	七二〇、一五九
軌條及び附屬品	一一八、二五七	三二七、六〇〇
タイヤ及車軸	一二、五六九	一六、四七三
線材	二四〇、九五九	一九一、一二六
鋼管	七四、〇〇五	一一六、五二六
其他	八、一六六	一一、二四四
合計	一、七六一、八八四	二、一五二、八七五

右の数字に見る通り一九三一年に於ける日本の鋼材供給高合計は前年に比し約四十萬噸を減じて居るが更に之を一九二九年の分に比較するときは八十萬噸の減少を示して居る、一九三一年の供給高一、七六一、八八四噸の内官營八幡製鐵所の生産高六六三、〇〇〇噸、民間會社の生産高八九六、〇〇〇噸輸入高二〇二、〇〇〇噸で、鋼材の輸入高は一九三一年に於て著しく減少した、こは主として日本製造業者の外國品輸入防遏に對する努力に依つて齎らされたるものであるが又斯業の不振も其の一原因を成すものであつた、或る特殊品を除き鋼材は各品共殆んゞ日本に於て製造せられ輸入に仰ぐの必要なきに至つた、鋼材の輸入高は百萬噸以上に達したることもあつたが一九二九年には七十萬一千噸に減じ一九三〇年には三十七萬二千噸に著減し更に昨年には二十萬二千噸に激減した、目下日本に於ては、他の鋼材に比し比較的輸入數量の多い鋼管、線材、及びシートパイルの生産増加に懸命の努力を傾けつゝあるのである、然しながら金輸出再禁後市價に二割乃至三割の騰貴を示せる爲め投機商人の發する各種鋼材に對する輸入注文が増加しつゝあることを記して置く。

一九三二年一月の佛蘭西鋼材生産高

一九三二年一月中の鋼材生産高次の如し

販賣用半製品	九二、〇〇〇
鋼材合計	三一三、〇一〇
内譯	
タイヤ	四、〇〇〇
車軸其他のフォーゼンク	四、〇〇〇
軌條	二五、〇〇〇
枕木	五、〇〇〇
軌條附屬品	四、〇〇〇
ジョイスト其他形物	三三、〇〇〇
線材	一八、〇〇〇
ワイヤ	一一、〇〇〇
フープ及ストリップ	一八、〇〇〇
管用半製品	三、〇〇〇
チューブ	一一、〇〇〇
特殊棒鋼	七、〇〇〇
市場向棒鋼	九四、〇〇〇

鐵力板	四、〇〇〇噸
薄板五耗未滿	四九、〇〇〇
厚板	二〇、〇〇〇
平鋼	二、〇〇〇

以上アイアン・エンド・コール、トレード・レビュー一九三二年三月十八日所載

獨逸に於ける地方別、種類別鐵礦石生産高

一九三〇年に於ける獨逸鐵礦石採掘業は殆んご全部門を通して其の採掘高前年より減少せり、主要鐵礦石の價格亦低下し採掘鐵礦石（選鐵せるものを含む）全體の價額は一九二九年の一四五百萬馬克に對し一九三〇年は一一一百萬馬克に過ぎず又一九三〇年に於ける採掘鐵坑は全部にて二二二坑（其の内鐵礦坑一五九）に對して一九二九年は二二八坑なり

同業組合の健康保險に加入せる勞働者數は約三〇、〇〇〇人（内鐵礦坑の勞働者一三、二〇〇人）にして前年に比し殆んご六、〇〇〇人減少せり。

一九二七年以來減少の一途を辿りつゝありし鐵礦石の採掘高は一九三〇年には更に低下して約五七四萬噸となり前年より約一〇%だけ少なし。

鐵礦石全採掘高の鐵分含有量は一、八四五、〇〇〇噸にして乾燥鐵量の約三五%に相當す外國鐵礦の輸入高は國內採掘高よりも更に減少せり、即ち一九二九年の一七百萬噸に對して一九三〇年は一三、九百萬噸なり、

茲に注意すべきは外國鐵礦は平均して國內鐵礦より高品位なることなり。

採掘高減少の第一位はジーゲルランド及びラインルディール地方なり（次表を見よ）リンデネルマルクを含むタウヌス地方は協定に依る大制限をなしたる爲め採掘高は前年の三〇%に減少せり、この結果フォーゲルスベルグ地方は國內に於ける鐵礦採掘の重要な地位を占むるに至れり。

地方別並種類別鐵礦石生産高次の如し

獨逸に於ける地方別鐵礦採掘高表

	一九二九年	全採掘高に對する%	一九三〇年	全採掘高に對する%
ジーゲルランドウイデル菱鐵礦地方	二、一九一、二九四	三四・四	一、八四八、六七二	三三・二
バイネーザルツギツテル地方	一、五五八、三二八	二四・四	一、五三四、四五五	二六・七
ナツサウオパーヘツセン地方 (ライン及びディール地方)	六九二、五八四	一〇・九	五八三、四一五	一〇・二
バイエールン地方	六一五、五一八	九・七	五七五、七七三	一〇・〇
フォーゲルスベルグ玄武岩鐵礦地方	五四九、三二七	八・六	六三三、八八七	一一・一
ハルツ地方	二八六、一九七	四・五	二九二、五三九	五・一
タウヌス地方(リンデネルマルクを含む)	二七〇、九〇八	四・二	八一、一一八	一・四
チウルゼツクス地方	一六四、〇六二	二・六	一七九、六五七	三・一
其の他の地方	四五、四五九	〇・七	一一、六八九	〇・二
計	六、三七三、六七七	一〇〇・〇	五、七四一、二〇五	一〇〇・〇

種類別鐵礦採掘高表

種類	數		平均含鐵分(乾燥數量に對する)
	一九二九年	一九三〇年	
褐鐵礦(含滿侖分一二%以下)	三,二二九,〇八六	三,〇六四,八二八	三四・九八
褐鐵礦(含滿侖分一二%乃至三〇%)	一八一,九七〇	八〇,二八二	二四・四六
滿侖鐵礦(滿侖分三〇%以上)	四七五	二,三四九	—
赤鐵礦	六五二,九二九	四八八,二八二	三八・九九
菱鐵礦	二,一〇九,〇六八	一,八四一,一〇一	三五・三三
磁鐵礦	一八,七二六	—	五〇・七五
粘土菱鐵礦	八,〇四九	二,四六二	三一・七三
河鐵礦(Flusseisenstein)	一一六,五一一	一〇三,七一九	三一・六〇
沼鐵礦	五〇三	四〇五	四二・三八
其の他の鐵礦	一四六,三六四	一五七,七七七	三五・五一
計	六,三七三,六七七	五,七四一,二〇五	三五・二七

備考—ジューケルランド地方の諸鐵山に對しては、月十萬噸以上の生産並販賣と小くとも五百人の鐵夫の傭役とを條件として、補助金仕拂はる。一九三二—三三年度に於て聯邦政府、プロシヤ州政府並ヘッセン州政府が此の費目に支出する金額は合計八十六萬馬克に達す(譯者)

(アイアン・エンド・コーク、トレード・レビュー一九三二年一月十五日所載記事參照)

Stahl und Eisen 21 April, 1932

米國一九三一年骸炭生産量

米國鑛山局調査に依れば一九三一年の骸炭生産量は三三、七二八、五〇四噸にして一九三〇年に比較して二九・八%の減少なり、此の原因は製鐵業の不振にあり一九三一年の鉄鐵生産は一九三〇年に比し四一・八%の減少を示せり、左に一九三一年—一九三二年の各年骸炭生産量を示す。

年次	副産物製炭		合 計	
	ビトハイヴ骸炭	ビトハイヴ骸炭割合	副産物製炭	ビトハイヴ骸炭割合
一九三三	一一,七二四,七〇〇	三三・五八四,八三〇	四六,二九九,五三〇	七二・五
一九三四	一一,二一九,九四三	三三・三三五,九七一	三四,五五五,九一四	六七・五
一九三五	一四,〇七二,八九五	二七,五〇八,二五五	四一,五八一,一五〇	六六・二
一九二六	一九,〇六九,三六一	三五,四六四,二二四	五四,五三三,五八五	六五・〇
一九二七	二二,四三九,二八〇	三三,一六七,五四八	五五,六〇六,八二八	五九・六
一九二八	二五,九九七,五八〇	三〇,四八〇,七九二	五六,四七八,三七二	五四・〇
一九二九	二五,一三七,六一一	一九,〇四二,九三六	四四,一八〇,五五七	四三・一
一九三〇	三〇,八三三,九五二	二〇,五一一,〇九二	五一,三四五,〇四三	四〇・〇
一九二一	一九,七四九,五八〇	五,五三八,〇四三	二五,二八七,六二二	一一・九
一九二二	二八,五五〇,五四五	八,五七三,四六七	三七,一二四,〇二二	一一・一
一九二三	三七,五九七,六六四	一九,三七九,八七〇	五六,九七七,五三四	三四・〇
一九二四	三三,九八三,五六八	一〇,二八六,〇三七	四四,二六九,六〇五	一一・二
一九二五	三九,九二二,一五九	一一,三五四,七八四	五一,二六六,九四三	一一・一

次に一九三二年各月の生産量を示す

目次	副産物炭	ビーハイヴ炭	合計	鉄鑛出產量
一月	三、〇九二、一五三	一六三、〇〇〇	三、二五五、一五三	一、七二四、二六六
二月	二、八九七、八六六	一六二、九〇〇	三、〇六〇、七六六	一、七〇六、六二一
三月	三、二五六、二八九	一四九、三〇〇	三、四〇五、五八九	二、〇三二、二四八
四月	三、一四六、四九〇	一〇八、六〇〇	三、二五五、〇九〇	二、〇一九、五二九
五月	三、一二五、五七一	九三、九〇〇	三、二一九、四七一	一、九九四、〇八二
六月	二、七一一、一七三	八七、三〇〇	二、八〇二、四七三	一、六三八、六二七
七月	二、五六八、七二六	七五、九〇〇	二、六四四、六二六	一、四六三、二二〇
八月	二、四四二、八二四	六九、五〇〇	二、五一二、三二四	一、二八〇、五二六
九月	二、三二〇、一七六	七七、八〇〇	二、三九七、九七六	一、一六八、九一五
十月	二、三八九、〇五六	一〇五、四〇〇	二、四九四、四五六	一、一七三、二八三
十一月	二、二七六、二八三	九八、三〇〇	二、三七四、五八三	一、一〇三、四七二
十二月	二、二三三、九九七	八二、〇〇〇	二、三一五、九九七	九八〇、三七六
合計	三二、四五四、六〇四	一、二七三、九〇〇	三三、七二八、五〇四	一八、二七五、一六五
平均	二、七〇四、五五一	一〇六、二五八	二、八一〇、七〇九	一、五二二、九三〇

次に一九三二年の副産物生産量を見るに大略次の如し

タール	四三三、六四六、〇〇〇ガロン
硫安	一、一〇三、四五七、〇〇〇封度
瓦斯	五一九、二七四、〇〇〇百萬立方呎
粗輕質油	一一八、一九六、〇〇〇ガロン

一九三二年合衆國主要製鋼會社の損益

アイアン・エーヂ 一九三二年三月廿四日所載

主要製鋼會社二十七社の缺損合計千四百六十二萬二千五百二十六弗、之に對し一九三〇年は一億六千八百三十萬六千四百六弗の益金。小會社の記録は慘鼻を極む。

製鋼及び壓延作業に従事する二十七社の一九三一年中に於ける損益状態に就て見るに一九三〇年の益金一六八、三〇〇、六四六弗に對し昨年は合計一四、六二二、五二六弗の純缺損を示した。次表に示す二十七社は合

衆國製鋼能力の少くも九割五分を占むるものであつて其の内益金を報ずるもの僅に十社に過ぎない。
 一九三〇年に於ては、前記二十七社の内益金を報じたるもの十八社を數へ缺損は一例を除き二流會社のみに限られて居つた、一九三一年の益金には、ユ、エス、スチール、コーポレーションが報じた一九、三四一、六五九弗の再び見るここの出來ない特別收入を含んで居る、同社は作業状態から見れば益金を擧ぐることは殆んど不可能を考へらるゝのである。若し此の數字が前年との比較に含まるゝとすれば昨年の純缺損額は三三、九六四、一八五弗に達するであらう、一流製鋼會社十社の内昨年益金を報じたるもの僅に四社、内、ユ・エス・スチール、コーポレーション及びベスレーム製鋼會社の二社は収益頗る減退し漸やく優先株の配當を行ひ得るに過ぎなかつた、前年は右一流會社の内一社のみが缺損を報じ他の多くは普通株に對し可なりの配當を行つた。

概して言へば、主として鋼板類の生産に従事せる二流會社の状態は最もじめなものであつた、然しながら鉄力板のみを製造するマッキースポート鉄力板會社と鉄力板の大生産能力を有するグラナイトシチイ製鋼會社は別物であつた、昨年中鋼材の内利益を擧げ得たのは殆んど鉄力板のみ言つてよい、レバブリック製鋼會社、ヤングスタウンシート・エンド・チューブ會社の如き一流會社は大缺損を報じて居る、因に昨一九三一年に於ては一九三〇年より良好な業績を示せるものは一社もない。

一九三二年と一九三〇年とに於ける製鋼會社の損益状態比較表

會社名	損		益		一株當り所得	
	一九三一年	一九三〇年	一九三一年	一九三〇年	一九三一年	一九三〇年
Aome Steel Co.	三三二、〇二七	九四〇、九四九	一〇八	二、七四	一〇八	二、七四
Allegheny Steel Co.	五〇、二二八	一、六一〇、二九二	一、五〇優	二、二五	一、五〇優	二、二五
American Rolling Mill Co.	缺三、〇九八、四四五	一一四、〇九四	—	〇、〇三	—	〇、〇三
Atlantic Steel Co.	缺 一〇五、八〇五	缺 六七、二七六	—	—	—	—
Bethlehem Steel Corpn.	一一五、七四五	二二二、八四三、四〇六	〇、二優	五、二六	〇、二優	五、二六
Colorado Fuel & Iron Co.	缺三、三六三、二〇六	二九八、六四八	—	〇、四一	—	〇、四一
Continental Steel Corpn.	缺 四〇六、五八四	缺 三七、九〇八	—	—	—	—
Crucible Steel Co. of America	缺二、〇一六、五一七	四、〇四五、一一二	—	四、五九	—	四、五九
Eastern Rolling Mill Co.	缺 五一四、八八八	缺 三二〇、九五五	—	—	—	—
Follansbee Bros. Co.	缺 八四九、九九二	缺 四五一、九七〇	—	—	—	—
Granite City Steel Co.	三三三、三〇九	七〇〇、七一六	一、一三	二、三九	一、一三	二、三九
Gulf States Steel Co.	缺 九七六、三三〇	缺 八一五、三三四	—	—	—	—
Inland Steel Co.	一、二六三、六〇〇	六、四九八、九六七	一、〇五	五、四一	一、〇五	五、四一
Jones & Laughlin Steel Corpn.	缺二、二八三、四五九	九、〇九三、二八七	—	八、六四	—	八、六四
Laclede Steel Co.	一四八、四一六	四五一、五七七	〇、七一	二、一九	〇、七一	二、一九
Ludlum Steel Co.	缺 九九、一四四	缺 四三三、六九七	—	—	—	—
Midvale Co.	七五〇、一一六	一、四〇三、七二八	三、七五	七、〇一	三、七五	七、〇一

Meekesport Tin plate Co.	一九五二、〇二八	二、五〇三、八九七	六・五一	八・三四
National Steel Corpn.	四、四四三、三三三	八、四一五、八二二	二・〇六	三・九一
Otis Steel Co.	缺一、五七一、三四二	八六八、七二九	一	〇・〇七
Republic Steel Corpn.	缺九、〇三四、一五三	缺三、五二二、〇〇三	一	一
Sharon Steel Hoop Co.	缺一、三九六、九九五	缺 七五二、八〇三	一	一
Superior Steel Corpn.	缺 四九二、三七二	三五八、九二四	一	一
Seulim Steel Corpn.	缺 四九九、二八九	一六三、六九二	一	一・六三優
United States Steel Corpn.	一三、〇三八、一四一	一〇四、四二一、五七一	三・六二優	九・一一
Wheeling Steel Corpn.	缺三、三三三、三三九	二、六五〇、八八七	一	九・六三優
Youngstown Sheet & Tube Co.	缺七、〇四〇、八九九	七、〇三六、一三三	一	五・一七

一九三一年合衆國の軌條生産高

(アイアン・エンド・コイル、トレッド・レピウ 一九三二年四月廿二日)

亞米利加鐵鋼學會刊行特別統計時報に依れば、合衆國に於ける一九三一年中の軌條生産高は合計一、一五七、七五一英屯(一九三〇年一、八七三、二二三屯)に達し内一、一三五、五五一屯は平爐鋼から八一三屯は轉爐鋼から一五屯は電氣鋼から及び二一、三七二屯は古軌條から再製したものである。石の數字中には電鐵及び街鐵用のガーダー並丁軌條を含む。尙生産高を重量別に擧ぐれば次の如し

一ヤード五〇封度未滿軌條 五〇、〇八九屯

五〇封度以上八五封度未滿 二五、五二四屯
 " 八五封度以上一〇〇封度未滿 一一三、三九八"
 " 一〇〇封度以上一二〇封度未滿 四九五、七五二"
 " 一二〇封度以上 四六二、九八八"

尙合金鋼軌條の生産高は、八五封度乃至一二〇封度の滿俺鋼軌條五三三屯であつた

一九三一年中佛蘭西の鐵鋼生産高

(アイアン・エンド・コイル、トレッド・レピウ 一九三二年四月十五日)

佛蘭西昨年の操業高爐數は一月一三五基、十二月九〇基平均一一八基を算した。鉄鐵の生産高は合計八、二二七、〇〇〇噸即ち月平均六八五、〇〇〇(一九三〇年月平均八三六、〇〇〇屯)であつた。其の内譯次の如し

鹽基性鉄	六、三六〇、〇〇〇噸
含磷鑄物鉄	九五四、〇〇〇"
含磷フォーヂ鉄	一一、〇〇〇"
半含磷鉄	一二七、〇〇〇"
ヘマタイト鑄物鉄	二八九、〇〇〇"
ヘマタイトフォーヂ及ベセマー鉄	二九七、〇〇〇"
鐵合金及スピーゲル	一七九、〇〇〇"

鋼の生産高は合計七、八〇九、〇〇〇噸即ち月平均六五一、〇〇〇噸（一九三〇年月平均七八七、〇〇〇噸）であつた、其の内譯次の如し

鋼塊	七、五六八、〇〇〇噸
鑄物	二四一、〇〇〇噸
尙之れをを製法別にすれば	
鹽基性轉爐鋼	五、四五三、〇〇〇噸
平爐鋼	二、〇九〇、〇〇〇噸
電氣鋼	一五六、〇〇〇噸
酸性轉爐鋼	九八、〇〇〇噸
坩堝鋼	一一、〇〇〇噸

一九三二年一月露西亞の石炭鐵鋼生産高

(アイアン・エンド・コール、トレード・レビュー 一九三二年四月十五日)

露西亞ドネツ盆地の一月に於ける石炭日産高は平均一四〇、六一〇噸を算し一九三一年一月より二九、八〇〇噸を増加した、モスコウ地方に於ける平均日産高は前年二月に比し五九・三%の増加を示し尙ウラル地方の分は二八・一%を増加した。一月中の鉄鐵生産高は昨年十二月の四三一、四〇〇噸に對し四九三、五〇〇噸に増加した、一方一月中の鋼生産高も亦昨年十二月の四六六、四〇〇噸に對し五一五、六〇〇噸に増加した又一月中の壓延鐵鋼材の生産高合計は、昨年十二月の三六三、〇〇〇噸に對し四一三、七〇〇噸に達した

一九三二年一月及び二月中の佛蘭西鐵鑛石産額

(アイアン・エンド・コール、トレード・レビュー 一九三二年四月二十九日)

一月及び二月中佛蘭西諸鑛山の鐵鑛石生産高次の如し	
一月	二、四九三、二二八噸
二月	二、二二六、一八八噸

最近三ヶ年英國鋼材生産高

(單位千噸)

品目	一九二九年	一九三〇年	一九三二年
タイヤ、車輪、車軸 其他のフォーヂング	二四三・三	二二七・八	一四三・二
ボイラー用鋼板	八一・〇	五九・〇	三三・一
厚板 ¾吋	一、三六〇・〇	一、〇四〇・八	五三三・八
薄板 ¾吋以下	五九五・二	四四四・五	三八一・二
鉄力板及び黒板	八七九・八	八一四・四	七一七・四
亜鉛引薄板	八四二・九	五七九・六	四四六・九

附表	製鐵所	年	鋼材			
			ヤド	鋼管	其他	計
製鐵所	製鐵所	昭和二年月平均	5.45	3,196	59,303
		昭和三年 "	6.64	3,889	67,019
		昭和四年 "	6.47	884	78,570
		昭和五年 "	7.47	699	75,515
		昭和六年 "	5.70	679	51,609
		昭和七年 1月	5.32	264	54,740
		2月	5.36	813	62,859
		3月	6.07	566	67,196
		4月	6.17	243	62,781
		5月	6.59	330	72,163
		6月				
		7月				
8月						
9月						
10月						
11月						
12月						
計						
民間製鐵所	民間製鐵所	昭和二年月平均	1.50	4,193	1,832	50,730
		昭和三年 "	1.38	5,626	1,835	66,076
		昭和四年 "	2.22	6,544	1,455	78,383
		昭和五年 "	2.73	7,288	1,331	72,362
		昭和六年 "	2.13	5,307	1,196	74,231
		昭和七年 1月	2.37	6,336	1,125	78,810
		2月	2.21	7,457	774	97,375
		3月	2.22	8,689	1,437	95,923
		4月	2.15	8,411	2,413	95,599
		5月				
		6月				
		7月				
8月						
9月						
10月						
11月						
12月						
計						

備考 本表中には
鮮滿の4

合 計	發條鋼	冷間壓延ストリップ	フープ及ストリップ	線材	形丸平	枕木及び繼目板	トラムレール	レール五〇封度未満	レール五〇封度以上
七六二四・七	七二・九	五八・八	三三八・八	二四八・一	二、一五三・四	七五・二	三四・四	六三・六	五七七・三
六、二二〇・〇	七一・四	五三・二	二二一・一	一三三・〇	一、七六四・三	八一・五	三〇・七	六〇・九	四二七・八
四、六八九・〇	五二・四	五〇・〇	一八三・三	二二六・一	一、三九四・四	八〇・五	二二・七	三七・一	三八五・九

(アイアン・エンド・コイル、トレード・レピウ一九三二年三月十二日)

製鐵所並民間製鐵會社鐵鋼材生産高月別表

單位 吨

附 表	製 鐵 所	銑鐵	普通鋼			半製品				普通鋼 壓延鋼材									
			鋼塊	鑄鋼	計	販賣向 鉄鋼	販賣向 延片	販賣向 シート	販賣向 スケル ブ	計	鋼板		棒鋼	形鋼	軌條	ワイヤ ロッド	鋼管	其他	計
											厚 耗 以 下	其他							
	昭和二年月平均	58,524	87,326	220	87,546	5,638	81	5,719	1,710	12,555	13,640	11,821	14,535	1,845	3,196	59,303	
	昭和三年 "	69,741	91,087	307	91,394	4,446	623	5,069	2,340	13,499	15,094	13,493	17,140	1,564	3,889	67,019	
	昭和四年 "	65,614	109,476	346	109,822	7,755	537	8,292	3,836	15,025	17,158	13,425	23,095	5,147	884	78,570	
	昭和五年 "	72,109	107,438	351	107,789	6,139	65	6,204	4,219	14,279	12,386	12,872	24,353	6,347	699	75,515	
	昭和六年 "	63,378	77,350	371	77,721	4,479	7,218	970	12,667	5,406	10,164	7,936	10,576	8,878	7,970	679	51,609	
	昭和七年 1月	64,332	67,791	292	68,083	3,323	6,517	1,611	11,451	4,815	8,286	6,984	17,771	8,088	8,532	264	54,740	
	2月	63,032	89,993	442	90,435	5,190	10,203	2,013	17,406	5,581	8,323	6,230	16,311	16,721	9,436	(短尺條鋼)	813	62,859	
	3月	65,151	102,601	313	102,914	6,113	11,708	2,642	20,463	6,178	10,202	6,290	13,380	20,189	10,807	566	67,196	
	4月	66,475	101,807	274	102,081	6,754	15,992	673	23,419	5,618	8,634	8,242	14,440	16,574	8,217	243	62,781	
	5月	67,429	115,793	497	116,290	5,525	13,625	961	20,111	6,217	11,108	12,348	7,860	23,675	10,059	330	72,163	
	6月																		
	7月																		
	8月																		
	9月																		
	10月																		
	11月																		
	12月																		
	計																		
	昭和二年月平均	15,162	46,433	2,191	48,624	28	255	283	5,446	8,994	23,965	5,505	345	450	4,193	1,832	50,730	
	昭和三年 "	19,998	60,365	3,829	64,194	15	15	6,435	12,913	30,493	7,865	341	568	5,626	1,835	66,076	
	昭和四年 "	23,201	76,934	3,779	80,731	54	54	12,270	14,913	34,341	8,226	132	502	6,544	1,455	78,383	
	昭和五年 "	23,955	75,126	2,746	77,872	60	630	690	14,424	13,191	24,302	7,789	261	3,773	7,288	1,331	72,362	
	昭和六年 "	23,093	75,391	2,232	77,623	80	119	199	16,543	12,548	25,875	5,821	198	6,743	5,307	1,196	74,231	
	昭和七年 1月	22,662	72,496	2,026	74,522	15,929	11,730	31,546	5,777	6,367	6,336	1,125	78,810	
	2月	23,018	93,274	2,966	96,240	20,158	16,520	36,330	7,315	8,621	7,457	774	97,375	
	3月	22,765	92,532	2,953	95,485	21,503	12,775	34,881	7,166	9,472	8,689	1,437	95,923	
	4月	21,570	93,546	2,931	96,477	14	14	22,410	14,207	34,113	6,410	7,635	8,411	2,413	95,599	
	5月																		
	6月																		
	7月																		
	8月																		
	9月																		
	10月																		
	11月																		
	12月																		
	計																		

備考 本表中には満鮮を含まず 製鐵所に於て借入作業中の東洋製鐵會社並九州製鋼會社の生産高は製鐵所に含む
 鮮滿の4月迄の合計銑鐵生産額 176,641 吨

レール五〇封度以上	五七・三
レール五〇封度未満	六三・六
トラムレール	三四・四
枕木及び欄目板	七五・二
形、丸、平	二、一五三・四
線材	二四八・一
フープ及ストリップ	三三八・八
冷間壓延ストリップ	五八・八
發條鋼	七二・九
合計	七、六二四・七
レール五〇封度以上	四二七・八
レール五〇封度未満	六〇・九
トラムレール	三〇・七
枕木及び欄目板	八一・五
形、丸、平	一、七六四・三
線材	二二三・〇
フープ及ストリップ	二二一・一
冷間壓延ストリップ	五三・二
發條鋼	七一・四
合計	六、二二〇・〇
レール五〇封度以上	三八五・九
レール五〇封度未満	三七・一
トラムレール	一三三・七
枕木及び欄目板	八〇・五
形、丸、平	一、三九四・四
線材	二二六・一
フープ及ストリップ	一八三・三
冷間壓延ストリップ	五〇・〇
發條鋼	五二・四
合計	四、六八九・〇

(アイアン・エンド・コイル、トレード・レビュー一九三二年三月十二日)

各國銑鋼月別生産統計

(單位千噸)

國際聯盟刊行 "Monthly Bulletin of Statistics" に依る 但し日本の分は鑛山局調に依る

年次	獨逸		白耳義		加奈陀		西班牙		合衆國		佛蘭西		伊太利		日本		ルクセンブルク		波蘭		英國		露西亞		ザール		瑞典		チエツコス ロバークヤ		合計	
	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼	銑	鋼		
1913年月平均	(a) 910	994	207	206	85	88	37	32	2,592	(f) 2,564	756	581	37	78	(b) 20	(f) 21	212	98	(e) 869	649	380	430	114	173	61	62	6,280	5,976
1920 "	532	650	93	104	82	93	21	13	3,069	3,461	279	226	7	64	61	70	58	49	(d) 4	6	680	768	10	14	54	59	39	42	(e) 61	81	5,050	5,703
1921 "	655	772	73	64	50	57	29	31	1,389	1,628	287	258	5	59	55	74	81	64	5	10	221	314	10	15	75	79	26	20	48	76	3,009	3,521
1922 "	766	943	134	130	32	41	17	19	2,271	2,927	440	378	13	87	58	76	140	117	40	84	415	498	16	30	96	109	22	29	28	60	4,488	5,528
1923 "	412	525	179	191	74	75	33	40	3,363	3,682	456	442	20	102	67	80	117	100	43	95	630	718	32	61	77	88	24	26	68	98	5,595	6,323
1924 "	653	820	237	240	50	56	41	45	2,614	3,117	641	556	25	122	69	92	180	157	28	57	619	696	63	95	112	122	43	46	82	113	5,457	6,634
1925 "	841	1,016	212	212	48	64	44	53	3,058	3,737	709	622	40	158	78	108	197	174	26	65	530	625	128	177	121	131	36	43	97	123	6,195	7,308
1926 "	803	1,028	281	278	64	66	41	51	3,277	3,794	786	718	43	157	95	125	213	187	27	66	208	305	204	260	135	145	39	44	91	112	6,308	7,336
1927 "	1,091	1,359	309	307	60	77	49	56	3,036	5,675	775	696	41	143	107	140	228	206	52	104	617	770	252	310	148	158	35	44	105	141	6,905	8,190
1928 "	984	1,205	321	325	88	105	46	65	3,167	4,222	832	792	42	175	128	159	231	214	57	119	560	722	281	357	161	173	33	51	131	164	7,062	8,645
1929 "	1,117	1,354	337	342	91	117	58	77	3,580	4,599	864	808	56	188	130	191	242	225	59	115	643	816	360	409	175	184	41	60	139	179	7,892	9,663
1930 "	808	962	283	282	63	86	50	72	2,659	3,326	842	784	45	148	141	191	206	189	40	103	525	618	418	474	159	161	38	52	120	153	6,397	7,601
1931 "	505	691	269	260	36	57	40	48	1,547	2,108	685	651	42	121	117	153	171	170	29	86	318	438	398	409	126	128	32	46	97	127	4,412	5,493
1932年 1月	358	400	247	242	10	25	988	(g) 1,485	490	469	40	94	120	140	150	146	12	30	335	437	494	516	112	111	23	37	51	61	(h) 3,430	(h) 4,229
2月	330	448	244	247	11	29	980	1,483	458	463	37	99	118	183	150	156	9	35	329	488	423	460	116	125	24	44	47	63	(h) 3,276	(h) 4,360
3月	314	435	249	250	18	44	983	1,433	471	464	39	113	134	195	151	153	9	39	341	470	482	492	109	118	29	56	43	59	(h) 3,290	(h) 4,310
4月	336	521	245	254	17	37	866	1,260	459	457	43	108	134	195	159	161	322	440	112	124	21	48	43	53	(h) 3,223	(h) 4,222

- 備考 1. 1913年の獨、佛の生産高は現在領域の分にして銑鐵には鐵合金を含む
2. (a).....ルクセンブルクを除く。1922年以降波蘭領上部シレジアを除く (b).....日本の銑鐵は朝鮮、滿洲を含む
- (d).....1921年は波蘭領上部シレジアを除く (e).....鐵合金を含む (f).....鑄物を除く
- (g).....1930年に於て總産額の94.51パーセントを産したる諸製鋼所の分 (h).....概算
3. 銑は銑鐵、鋼は鋼塊及鑄物

製鐵所並民衆限代高

年次	獨逸	白耳義	加奈陀	西班牙	合衆國	佛蘭西	伊太利	日本	ルクセンブルク	波蘭	英國	露西亞	ザール	瑞典	チエツコス ロバークヤ	合計										
1913	910	994	207	206	2,592	2,564	756	581	37	78	20	21	212	98	869	649	380	430	114	173	61	62	6,280	5,976
1920	532	650	93	104	3,069	3,461	279	226	7	64	61	70	58	49	680	768	10	14	54	59	39	42	61	81	5,050	5,703
1921	655	772	73	64	1,389	1,628	287	258	5	59	55	74	81	64	221	314	10	15	75	79	26	20	48	76	3,009	3,521
1922	766	943	134	130	2,271	2,927	440	378	13	87	58	76	140	117	415	498	16	30	96	109	22	29	28	60	4,488	5,528
1923	412	525	179	191	3,363	3,682	456	442	20	102	67	80	117	100	630	718	32	61	77	88	24	26	68	98	5,595	6,323
1924	653	820	237	240	2,614	3,117	641	556	25	122	69	92	180	157	619	696	63	95	112	122	43	46	82	113	5,457	6,634
1925	841	1,016	212	212	3,058	3,737	709	622	40	158	78	108	197	174	530	625	128	177	121	131	36	43	97	123	6,195	7,308
1926	803	1,028	281	278	3,277	3,794	786	718	43	157	95	125	213	187	208	305	204	260	135	145	39	44	91	112	6,308	7,336
1927	1,091	1,359	309	307	3,036	5,675	775	696	41	143	107	140	228	206	617	770	252	310	148	158	35	44	105	141	6,905	8,190
1928	984	1,205	321	325	3,167	4,222	832	792	42	175	128	159	231	214	560	722	281	357	161	173	33	51	131	164	7,062	8,645
1929	1,117	1,354	337	342	3,580	4,599	864	808	56	188	130	191	242	225	643	816	360	409	175	184	41	60	139	179	7,892	9,663
1930	808	962	283	282	2,659	3,326	842	784	45	148	141	191	206	189	525	618	418	474	159	161	38	52	120	153	6,397	7,601
1931	505	691	269	260	1,547	2,108	685	651	42	121	117	153	171	170	318	438	398	409	126	128	32	46	97	127	4,412	5,493
1932年 1月	358	400	247	242	988	1,485	490	469	40	94	120	140	150	146	335	437	494	516	112	111	23	37	51	61	(h) 3,430	(h) 4,229
2月	330	448	244	247	980	1,483	458	463	37	99	118	183	150	156	329	488	423	460	116	125	24	44	47	63	(h) 3,276	(h) 4,360
3月	314	435	249	250	983	1,433	471	464	39	113	134	195	151	153	341	470	482	492	109	118	29	56	43	59	(h) 3,290	(h) 4,310
4月	336	521	245	254	866	1,260	459	457	43	108	134	195	159	161	322	440	112	124	21	48	43	53	(h) 3,223	(h) 4,222

各 國 鉄 鋼 月 別 出 産 量

品名	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年	昭和十七年	昭和十八年	昭和十九年	昭和二十年	昭和二十一年	昭和二十二年	昭和二十三年	昭和二十四年	昭和二十五年	
...

昭和五年中鐵鋼材用途別品目別販賣數量調査表

備考 本表販賣鐵鋼材販賣總數量 1,613,400 吨、同年中同鋼材需要總數量 2,048,412 吨、對之約 79%ニ相當ス

昭和五年中鐵鋼材用途別品目別販賣數量調査表

品目	用途	品目別											合計											
		鐵道(電鐵ヲ含ム)	土木建築	造船	船舶	機械工業	被服	石瓦水	油	鑛	山	其他		合計										
45封度以上	鐵道(電鐵ヲ含ム)	144,526	佛屯 1,801	佛屯 99	佛屯 1,106	佛屯 1	佛屯 251	佛屯 1,673	佛屯 149,457															
計	合計	251,382	619,081	117,063	312,711	51,699	36,076	225,388	1,613,400															

(銑鐵及屑鐵鋼)

品目	用途	製	鋼	延	鑄	物	其	他
銑	鐵	1,203,416	佛屯	(スラップ、ローシヤ)	415,646	佛屯		
鋼	屑	449,002		佛屯 18,675	14,356			佛屯 37,620
鑄	物	129,246			12,377			8,889

品名	用途	製造	機械工業	石炭	油	鑛山	其他	合計
鐵道	土木建築	造船	機械工業	石炭	油	鑛山	其他	合計
144,526	1,801	99	1,106	1	251	1,673	149,457	1,613,400
2,056	6,242	25	177	41	2,590	2,380	13,411	10,164
8,987	358	10	9	3	222	575	10,164	1,730
865	411	74	24		207	149	1,730	174,762
156,434	8,812	208	1,316	45	9,270	4,677	174,762	425,910
20,980	287,785	11,685	38,201	4,030	9,778	53,451	425,910	41,162
5,720	10,266	2,257	12,397	326	1,742	8,454	41,162	75,220
4,707	22,145	6,037	21,913	620	2,443	17,355	75,220	7,842
565	2,061	411	2,156	77	903	1,669	7,842	550,134
31,972	322,257	20,390	74,667	5,053	14,866	80,929	550,134	195,025
17,307	131,998	15,895	14,326	164	3,643	11,692	195,025	40,505
3,720	23,787	3,986	3,018	135	694	5,165	40,505	44,546
1,314	30,254	4,526	3,036	99	697	4,620	44,546	85
1,19	423	976	94	53	14	140	3,121	284,597
1,831	736	206	136	451	74	85	3,121	80,712
24,347	187,198	25,191	20,580	482	5,122	21,708	80,712	6,767
594	11,976	662	30,528	482	666	35,804	80,712	247,875
8	822	47	5,663	3,207	3,557	227	6,767	335,354
18,800	69,130	57,382	45,201	3,689	4,223	86,629	335,354	76,666
19,402	81,928	58,091	81,392	54	29	12,149	76,666	100,161
7	10,379	1	54,047	41,393	7,870	13,109	100,161	91,726
7,436	7,125	13,037	10,191	1,014	696	6,187	91,726	225,388
11,784	1,382	145	70,518	1,014	696	6,187	91,726	1,613,400
261,382	619,081	117,063	312,711	51,699	36,076	225,388	1,613,400	

昭和五年中鐵鋼材用途別品目別販賣數量調表

備考 本表壓延鋼材販賣總數量 1,613,400 延、同年中同鋼材需要總數量 2,048,412 延ニ對シ約79.9%ニ相當ス
昭和五年中鐵鋼材(壓延鋼材)販賣數量調表

附表三ノ一

品目	用途	鐵道 (電鐵ヲ含ム)	土木建築 鐵骨構造	造船	機械工業	石炭	油	鑛山	其他	合計	形	
											丸	角
計		156,434	8,812	208	1,316	45	9,270	4,677	174,762	425,910	41,162	75,220
計		20,980	287,785	11,685	38,201	4,030	9,778	53,451	425,910	41,162	75,220	7,842
計		5,720	10,266	2,257	12,397	326	1,742	8,454	41,162	41,162	41,162	41,162
計		4,707	22,145	6,037	21,913	620	2,443	17,355	75,220	75,220	75,220	7,842
計		565	2,061	411	2,156	77	903	1,669	7,842	7,842	7,842	7,842
計		31,972	322,257	20,390	74,667	5,053	14,866	80,929	550,134	550,134	550,134	195,025
計		17,307	131,998	15,895	14,326	164	3,643	11,692	195,025	195,025	195,025	40,505
計		3,720	23,787	3,986	3,018	135	694	5,165	40,505	40,505	40,505	44,546
計		1,314	30,254	4,526	3,036	99	697	4,620	44,546	44,546	44,546	44,546
計		1,19	423	976	94	53	14	140	3,121	3,121	3,121	3,121
計		1,831	736	206	136	451	74	85	3,121	3,121	3,121	3,121
計		24,347	187,198	25,191	20,580	482	5,122	21,708	284,597	284,597	284,597	284,597
計		594	11,976	662	30,528	482	666	35,804	80,712	80,712	80,712	80,712
計		8	822	47	5,663	3,207	3,557	227	6,767	6,767	6,767	6,767
計		18,800	69,130	57,382	45,201	3,689	4,223	86,629	335,354	335,354	335,354	335,354
計		19,402	81,928	58,091	81,392	54	29	12,149	76,666	76,666	76,666	76,666
計		7	10,379	1	54,047	41,393	7,870	13,109	100,161	100,161	100,161	100,161
計		7,436	7,125	13,037	10,191	1,014	696	6,187	91,726	91,726	91,726	91,726
計		11,784	1,382	145	70,518	1,014	696	6,187	91,726	91,726	91,726	91,726
計		261,382	619,081	117,063	312,711	51,699	36,076	225,388	1,613,400	1,613,400	1,613,400	1,613,400

(銑鐵及厚鐵鋼)

品目	用途	製鋼	壓延 (スラック、ローリナ)	鑄物	其他
銑鐵	鐵層	1,203,416 佛屯		415,646 佛屯	37,620 佛屯
鑄物	鐵層	449,002	18,675 佛屯	14,356	8,889
計		129,246		12,377	

(鋼 煙 鋼 材)

品目	数量	割合(%)	数量	割合(%)	数量	割合(%)	数量	割合(%)	数量	割合(%)	数量	割合(%)	数量	割合(%)	数量	割合(%)	数量	割合(%)
...

昭和五年中鐵鋼材用途別品目別販賣數量割合表

備考 各欄内左上方ノ數字ハ品目別合計數量ニ對スル各種用途ノ割合(%)ナリ
右下方ノ數字ハ用途別合計數量ニ對スル各鋼材ノ割合(%)ナリ

昭和五年中鐵鋼材用途別品目別販賣數量割合表

品目	用途		品別															合計					
	鐵道	土木建築	造船	機械工業	石瓦水	油壓道	鑄山	其他	合計	鐵	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼		鋼	鋼	鋼	鋼	
軌條及附屬品	967.7	575.5	1.2	0.3	0.1	0.7	0.3	1.1	0.7	17.0	1.0	0.7	12.5	23.7	2.7	2.1	100.0	9.3					
45封度未満	15.3	0.8	46.6	1.0	0.2	1.3	0.1	19.3	0.7	17.0	1.0	1.0	17.0	17.0	1.0	1.0	100.0	0.8					
繼目板	88.4	3.6	3.5	0.1	0.1	0.1	0.1	2.2	0.6	5.7	0.3	0.3	5.7	0.3	0.3	0.3	100.0	0.6					
其他	50.0	0.3	23.7	0.1	4.3	1.4	0.6	12.0	0.6	8.6	0.1	0.1	8.6	0.1	0.1	0.1	100.0	0.1					
計	89.5	62.2	5.0	1.4	0.1	0.8	0.4	1.9	0.6	2.7	0.1	0.1	2.7	0.1	0.1	0.1	100.0	10.8					
丸鋼	4.9	8.3	67.6	46.5	2.7	9.0	0.4	2.3	0.8	12.5	0.7	0.7	12.5	0.7	0.7	0.7	100.0	26.4					
角鋼	13.9	2.3	24.9	1.7	5.5	30.1	4.0	4.2	0.8	20.6	3.8	3.8	20.6	3.8	3.8	3.8	100.0	2.5					
平鋼	6.3	1.9	29.4	3.6	8.0	29.1	7.0	3.3	0.6	23.1	7.7	7.7	23.1	7.7	7.7	7.7	100.0	4.7					
其他	7.2	0.2	26.3	0.3	5.2	27.5	0.7	11.5	0.2	21.3	0.7	0.7	21.3	0.7	0.7	0.7	100.0	0.5					
計	8.5	12.7	65.8	52.1	8.9	7.2	23.9	1.8	0.2	7.6	35.9	35.9	7.6	35.9	35.9	35.9	100.0	34.1					
山形	0.7	6.9	14.9	21.3	0.8	37.8	4.6	0.8	0.3	44.4	5.2	5.2	44.4	5.2	5.2	5.2	100.0	12.1					
形	9.2	1.5	58.7	3.8	9.8	7.5	1.0	1.7	0.3	12.8	2.3	2.3	12.8	2.3	2.3	2.3	100.0	2.5					
工形	2.9	0.5	67.9	4.9	10.2	6.8	1.0	1.6	0.2	10.4	2.0	2.0	10.4	2.0	2.0	2.0	100.0	2.7					
Z形	12.5	0.1	30.2	0.1	41.3	4.6	1.0	1.0	0.1	10.4	0.1	0.1	10.4	0.1	0.1	0.1	100.0	0.1					
其他	58.7	0.7	23.6	0.1	6.6	4.3	6.6	1.7	0.1	2.7	9.6	9.6	2.7	9.6	9.6	9.6	100.0	0.2					
計	8.6	9.7	65.8	30.2	8.8	7.2	6.6	1.8	0.2	7.6	17.6	17.6	7.6	17.6	17.6	17.6	100.0	17.6					
板	0.7	0.2	14.9	1.9	0.8	37.8	9.8	0.8	0.9	44.4	15.9	15.9	44.4	15.9	15.9	15.9	100.0	5.0					
電氣鐵板	0.1		12.2	0.1	0.7	83.7	1.8			3.3	0.1	0.1	3.3	0.1	0.1	0.1	100.0	0.4					
其他ノ鋼板	7.6	7.5	27.9	11.2	23.2	18.2	14.4	1.4	6.2	20.4	22.5	22.5	20.4	22.5	22.5	22.5	100.0	15.4					
計	5.8	7.7	24.4	13.2	17.3	21.3	26.0	1.3	7.1	11.7	38.5	38.5	11.7	38.5	38.5	38.5	100.0	20.8					
ワイヤロッド	7.4	3.0	7.1	1.7	13.0	70.5	17.3	0.1	0.1	15.9	5.4	5.4	15.9	5.4	5.4	5.4	100.0	4.8					
筒及管	12.8	4.7	1.5	1.2	0.2	10.2	3.3	41.3	80.1	6.7	5.8	5.8	6.7	5.8	5.8	5.8	100.0	6.2					
其他	15.6	100.0	38.4	100.0	7.2	19.4	22.5	1.1	1.9	14.0	2.7	2.7	14.0	2.7	2.7	2.7	100.0	5.7					
合計	15.6	100.0	38.4	100.0	7.2	19.4	22.5	1.1	1.9	14.0	2.7	2.7	14.0	2.7	2.7	2.7	100.0	5.7					

附表三ノ二

種別	数量	数量		数量		数量		数量		数量	数量
		数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量		
生	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3
上	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
中	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
下	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8
計	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3

昭和五年中鐵鋼材用途別自別販賣数量割合表

（單位：噸）

種別	数量	数量	数量	数量	数量	数量
亞細亞	1,349	2,029	1,986	2,196	2,205	2,305
白耳義領	20	78	51	50	56	
南阿	598	915	21	39	52	828
支英日朝滿	1,112	3,592	4,419	4,966	1,880	
總	177,331	171,606	174,674	199,352	約 175,000	

註 a=戰前地域
 b=戰後地域
 2=獨逸を含む
 3=佛國を含む
 4=波蘭を含む
 5=含滿俄鐵嶺を含む
 6=輸出鑽石
 7=滿洲を除く
 Stahl und Eisen, 28 April 1932 所載

世界國別鐵鑛石生產高表

(世界鐵鑛石生產高は1930年は約一億七千五百萬噸、
1929年は約二億噸、1928年は1930年と殆んど同じ)

(單位千噸)

國別	年別	1913	1927	1928	1929	1930
歐羅巴		107,750	97,037	98,862	112,027	104,807
獨逸	5	35,941			6,374	5,741
獨逸	5	28,608	6,626	6,475	6,374	5,741
獨逸	5	7,309	19,211	20,404	21,368	20,240
獨逸	5	21,134	3	3	3	3
獨逸	5	105	6	17	12	8
獨逸	5	7,333	7,386	7,027	7,571	6,649
獨逸	5	151	181	164	156	
獨逸	5	21,918	45,426	49,008	50,731	48,512
獨逸	5	43,052	124	167	253	171
獨逸	5	314				
獨逸	5	16,253	11,386	11,443	13,426	11,813
獨逸	5	603	521	641	722	728
獨逸	5	545	479	663	746	772
獨逸	5	3,039	1,599	1,928	1,891	1,174
獨逸	5	2,031	546	737	659	477
獨逸	5	493	8	14	9	
獨逸	5	49				
獨逸	5	325	97	84	89	
獨逸	5	465				
獨逸	5	9,214	6,035	7,650	8,868	9,888
獨逸	5	10,300	9,661	4,669	11,468	11,236
獨逸	5	7,476	4,960	5,771	6,547	5,408
獨逸	5	9,862	336	439	451	428
獨逸	5	229	1,591	1,779	1,808	1,653
獨逸	5	1,800	195	203	258	157
獨逸	5	2,659				
獨逸	5	395				
獨逸	5	66,315	64,510	65,168	76,422	60,877
獨逸	5	279	2	2	3	0
獨逸	5	1,457	1,357	1,573	1,541	1,340
獨逸	5	62,972	62,729	63,192	74,196	59,343
獨逸	5	1,607	422	401	682	194
獨逸	5	14	1,516	1,515	1,812	1,689
獨逸	5	1,967	4,052	4,024	3,258	3,141
獨逸	5	1,349	2,029	1,986	2,196	2,205
獨逸	5	20	78	51	50	56
獨逸	5	598	952	1,057	973	828
獨逸	5	1,112	3,592	4,419	4,966	1,880
獨逸	5	440	503	925	980	
獨逸	5	377	1,876	2,089	2,468	
獨逸	5	153	159	172	178	
獨逸	5	142	423	559	559	
獨逸	5		631	674	781	
獨逸	5	176	899	686	867	952
獨逸	5	177,331	171,606	174,674	199,352	約 175,000

註 a=戰前地域
b=戰後地域
2=獨逸を含む
3=佛國を含む
4=波蘭を含む

5=含滿洲鐵鑛を含む
6=輸出鑛石
7=滿洲を除く
Stahl und Eisen, 28 April 1932 所載

世界主要國の鐵鑛石供給高表 (單位千噸)

本表は主要製鐵國の鐵鑛石供給高を示すものにして國內供給高(産出高+輸入高)と鐵鑛生産高との對比に依り消費鑛石鐵成分の概念を掴むことを得べし

Stahl und Eisen 28, April, 1932 所載

區別	1913	1927	1928	1929	1930
産出高	295	1,212	1,391	1,518	1,711
輸入高	-	-	-	-	-
國內販賣高	295	1,212	1,391	1,518	1,711
國內消費高	280	952	1,660	1,984	2,001
鐵鑛生産高	575	2,164	3,051	3,502	3,712
鐵鑛産當鐵高	243	1,285	1,540	1,562	1,687
鐵鑛消費高	237	1,68	1,98	2,24	2,20

本表には朝鮮滿洲の分を含む

世界主要國の鐵鑛石供給高表

(單位千噸)

本表は主要製鐵國の鐵鑛石供給高を示すものにして國內供給高(産出高+輸入高)と鐵鑛生産高との對比に依り消費鑛石鐵成分の概念を掴むことを得べし

Stahl und Eisen 28, April, 1932 所載

英國

區別	1913	1927	1928	1929	1930
産出高	295	1,212	1,391	1,518	1,711
輸入高	-	-	-	-	-
國內販賣高	295	1,212	1,391	1,518	1,711
國內消費高	280	952	1,660	1,984	2,001
鐵鑛生産高	575	2,164	3,051	3,502	3,712
鐵鑛産當鐵高	243	1,285	1,540	1,562	1,687
鐵鑛消費高	237	1,68	1,98	2,24	2,20

本表には朝鮮滿洲の分を含む

附 表 獨 逸

區別	1913	1927	1928	1929	1930
輸入高	1,410	1,047	989	1,141	1,012
國內消費高	13,261	31,808	32,943	35,468	34,481
鐵鑛生産高	5,122	11,044	11,917	12,469	11,947
鐵鑛産當鐵高	2,59	2,81	2,76	2,84	2,89

五

Table with multiple columns and rows, containing various numerical data and text. The text is partially illegible but appears to be a statistical table related to iron and steel production or consumption in various countries.

世界主要國の鐵鑛石供給高表 (單位千噸)

本表は主要製鐵國の鐵鑛石供給高を示すものにして國內供給高(産出高+輸入高)と鐵鑛生産高との對比に依り消費鑛石鐵成分の概念を掴むことを得べし Stahl und Eisen 28. April 1932 所載

附 表 獨 逸

區別	年別	1913	1927	1928	1929	1930
産出高		35,941	6,626	6,475	6,374	5,741
- 輸出高		2,613	167	179	116	76
= 國內販賣高		33,328	6,459	6,296	6,258	5,665
+ 輸入高		14,024	17,409	13,794	16,953	13,890
= 國內消費高		47,352	23,868	20,090	23,211	19,555
鐵鑛生産高		16,761	13,103	11,804	13,401	9,695
鐵鑛産當鐵						
鑛石消費高		282	182	170	173	202

英 國

區別	年別	1913	1927	1928	1929	1930
産出高		16,253	11,386	11,443	13,426	11,813
- 輸出高		5	7	16	7	4
= 國內販賣高		16,248	11,379	11,427	13,419	11,809
+ 輸入高		7,561	5,247	4,511	5,780	4,204
= 國內消費高		23,809	16,626	15,938	19,199	16,013
鐵鑛生産高		10,424	7,410	6,716	7,711	6,292
鐵鑛産當鐵						
鑛石消費高		228	224	237	249	255

白耳義及ルクセンブルク(1)

區別	年別	1913	1927	1928	1929	1930
産出高		151	7,430	7,181	7,727	6,785
- 輸出高		725	903	900	818	509
= 國內販賣高		-	6,527	6,281	6,909	6,276
+ 輸入高		7,085	12,678	13,727	14,057	12,860
= 國內消費高		6,511	19,205	20,008	20,966	19,136
鐵鑛生産高		2,485	6,442	6,627	6,947	5,867
鐵鑛産當鐵						
鑛石消費高		262	298	302	302	326

合衆國

區別	年別	1913	1927	1928	1929	1930
産出高		62,972	62,729	63,192	74,196	59,343
- 輸出高		1,241	913	1,303	1,325	764
= 國內販賣高		61,731	61,816	61,889	72,871	58,579
+ 輸入高		2,282	2,663	2,492	3,190	2,820
= 國內消費高		64,013	64,479	64,381	76,061	61,399
鐵鑛生産高		31,462	37,151	38,766	43,296	32,260
鐵鑛産當鐵						
鑛石消費高		203	174	166	176	190

佛 蘭 西(3)

區別	年別	1913	1927	1928	1929	1930
産出高		21,918	45,426	49,008	50,731	48,453
- 輸出高		10,067	14,665	17,054	16,404	14,984
= 國內販賣高		11,851	30,761	31,954	34,327	33,469
+ 輸入高		1,410	1,047	989	1,141	1,012
= 國內消費高		13,261	31,808	32,943	35,468	34,481
鐵鑛生産高		5,122	11,044	11,917	12,469	11,947
鐵鑛産當鐵						
鑛石消費高		259	281	276	284	289

註: (1) 1913年はルクセンブルクを除く
(2) 白耳義の生産高は見積
(3) 1925年以降サル地方を含む

參 照 日 本

區別	年別	1913	1927	1928	1929	1930
産出高		295	1,212	1,391	1,518	1,711
- 輸出高		-	-	-	-	-
= 國內販賣高		295	1,212	1,391	1,518	1,711
+ 輸入高		280	952	1,660	1,984	2,001
= 國內消費高		575	2,164	3,051	3,502	3,712
鐵鑛生産高		243	1,285	1,540	1,562	1,687
鐵鑛産當鐵						
鑛石消費高		237	168	198	224	220

本表には朝鮮滿洲の分を含む

年	1913	1917	1922	1928	1933	1938
生産量	101	197	212	197	242	272
消費量	101	197	212	197	242	272
輸出	0	0	0	0	0	0
輸入	0	0	0	0	0	0

年	1913	1917	1922	1928	1933	1938
生産量	101	197	212	197	242	272
消費量	101	197	212	197	242	272
輸出	0	0	0	0	0	0
輸入	0	0	0	0	0	0

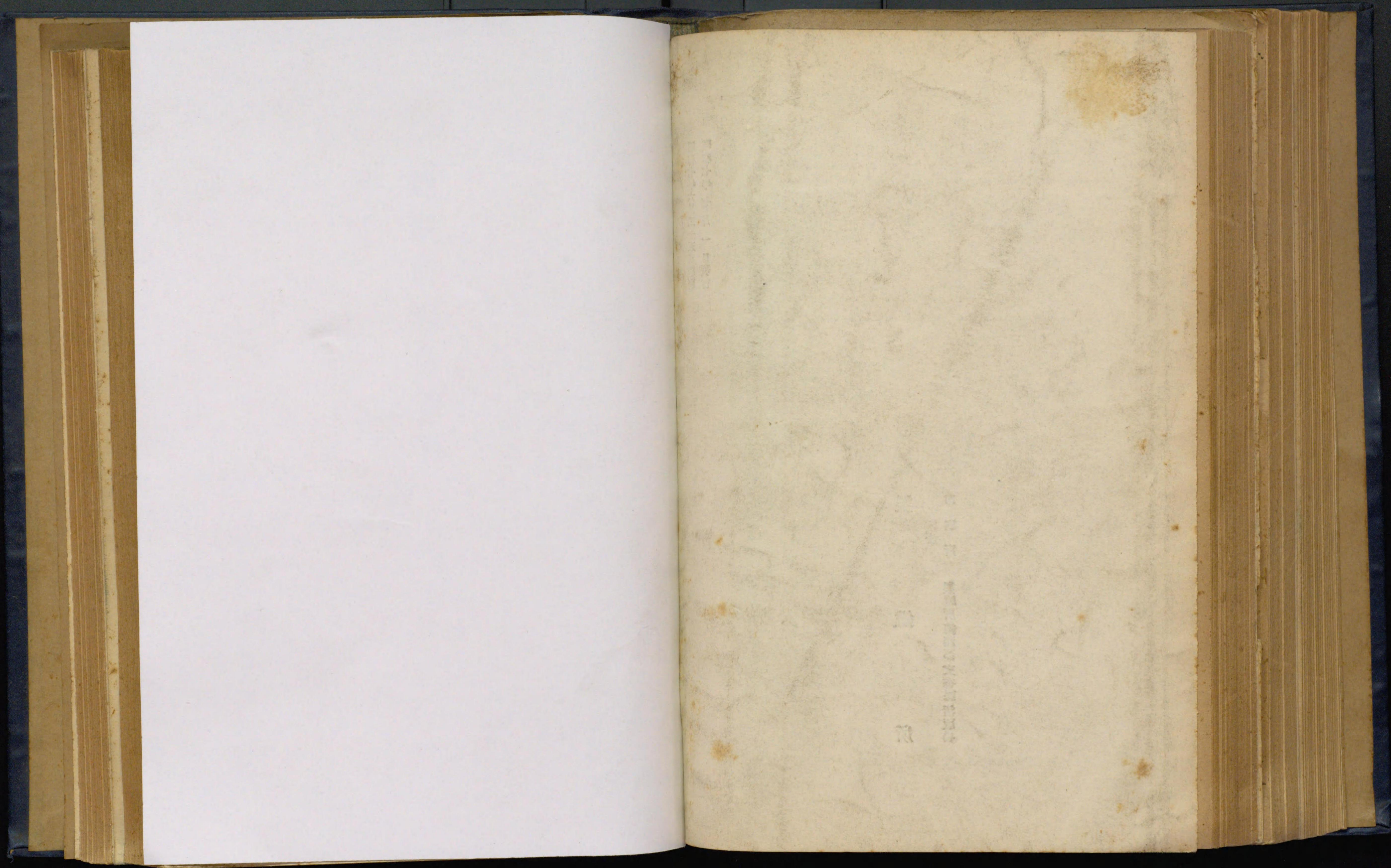
世界主要國の鐵石高給表 (單位千噸)

本表は一九二九年及一九三〇年に於ける世界國別石炭産額 (無煙、煙青炭、褐炭、亜炭) を示し英國帝室學會發表

世界の石炭産額 (單位英屯)

本表は一九二九年及一九三〇年に於ける世界國別石炭産額 (無煙、煙青炭、褐炭、亜炭) を示し英國帝室學會發表

國名	1929	1930	1929	1930
英國	13,800,000	14,500,000	13,800,000	14,500,000
美國	1,200,000	1,300,000	1,200,000	1,300,000
日本	1,000,000	1,100,000	1,000,000	1,100,000
法國	1,500,000	1,600,000	1,500,000	1,600,000
德國	1,800,000	1,900,000	1,800,000	1,900,000
蘇聯	1,200,000	1,300,000	1,200,000	1,300,000
其他	1,000,000	1,100,000	1,000,000	1,100,000
合計	23,500,000	24,700,000	23,500,000	24,700,000



THE
LIBRARY OF THE
MUSEUM OF
COMPARATIVE ZOOLOGY
AT HARVARD UNIVERSITY
CAMBRIDGE, MASS.